

靈界物語 第四二卷 舍身活躍 巳の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四二卷』愛善世界社

2002(平成14)年04月07日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文じよぶんに代かへて

總説そうせつに代かへて

第一篇 波瀾重疊はらんちよつでふ

第一章 北光照暗ほくくわうせうあん（一一二六）

第二章 馬上歌ばじやうか（一一二七）

第三章 山嵐やまあらし 一 二八

第四章 下り坂くだざか 一 二九

第二篇 戀海慕湖れんかいぼこ

第五章 戀の畏こひをな 一 三〇

第六章 野人の夢やじんゆめ 一 三一

第七章 女武者をんなむしや 一 三二

第八章 亂舌らんぜつ 一 三三

第九章 狐狸窟こりくつ 一 三四

第三篇 意變心外いへんしんぐわい

第一〇章 墓場の怪はかばくわい 一 三五

第一章 河底の怪かてい くわい〔一一三六〕

第二章 心の色々こころ いろいろ〔一一三七〕

第三章 椰揄やゆ〔一一三八〕

第四章 吃驚びっくり〔一一三九〕

第四篇 怨月恨霜えんげつこんさつ

第五章 歸城きじやう〔一一四〇〕

第六章 失戀會議しつれんくわいぎ〔一一四一〕

第七章 酒月さかづき〔一一四二〕

第八章 酌苑ていゑん〔一一四三〕

第九章 野襲やしふ〔一一四四〕

第五篇 出風陣雅しゅつふうぢんが

第二〇章	入那立 <small>いるなだち</small>	〔一四一四五〕
第二一章	應酬歌 <small>おうしうか</small>	〔一一四六〕
第二二章	別離の歌 <small>べつりうた</small>	〔一一四七〕
第二三章	龍山別 <small>たつやまわけ</small>	〔一一四八〕
第二四章	出陣歌 <small>しゅつちんか</small>	〔一一四九〕
第二五章	惜別歌 <small>せきべつか</small>	〔一一五〇〕
第二六章	宣直歌 <small>のりなほしのうた</small>	〔一一五一〕

序文に代へて

人種を超越し、地域を脱離し、古今を絶し、過去と現在と未來に亘りて、神示の儘に口述編纂したる珍書は、此物語を措いて外には今日迄の賢哲知識の著述の中には認むる事は出来ませぬ。従つて一般の讀者の種々批評の種となるべきは寧ろ當然かも知れませぬ。彼の佛祖釋迦は、比喻や偶言、謎等を甘く利用して一大教典を作り、後世に傳へて人心の生命の綱を與へ、キリストは地上に降誕して天國を地上に建設すべく努力した。されど最早今日となつては釋迦の教理もキリストの聖訓も人心を善導するの實力なく、徒に偽善者が世を欺く原資品となつたやうな感がするのである。古き宗教、古き道德は影を没して、新しき救世の宗教も偉人も顯はれず、千古不磨の倫理も道德教も出現を見ず、實に世は古典に所謂天の岩戸隠れの慘状を再び現出しつつあるのである。天下の秋氣動いて山野の草木既に黄紅化するの時、表面上は黄金の波漂ふ時、眼を遠く海外に放つて世界の大勢を見れば、吾人は實に人間として生れ出でたる神柱の責任の重にして大なる

を悟らざるを得ないのである。

ケマル・パシヤ一度小亞細亞の風雲に叱咤して長劍を撫し咆哮怒號するや、歐洲列強悉く震駭し、流石の大英帝國宰相ロイド・ジョージも其地位を失墜して一平民となり、幾度となく死を報ぜられたレーニンは再び健康を恢復して、奇策を歐亞の天地に揮ひ、依然として一敵國の感を爲し、日露の會議は其效を收むること能はずして、武器問題倏忽として起り日本海の波浪之が爲に騷がしく、印度また叛亂勃發し、支那には獨立軍威を振ふあり、米國は自由と正義を標榜しつつ全國に渡りて軍事教育を施し、海相デンビーをして伊佛兩國の海軍條約に批准せざる間は、一艦たりとも之を破却せずと宣告し、其の假想敵國の何れにあるかを疑はしむ。然るに我國獨り率先して戰艦を破り、海員を減じて、只管華府會議の條規に對して極力忠誠を誓ふ實状である。世界は今や斯の如く大動搖を來しつつあるのである。歐洲の大戦、一度鎮靜して天下の大勢は再び累卵の危機に瀕す。經濟界の沈衰と人心の惡化は並び臻る。ア、この危局に立つて能く人類救濟の大業を全うせむとする大偉人の出現を望むや切ならざるを得ず。世界の人類は腐敗糜

爛の極に達せる社會の現状を眺めて、救世の福音を翹望するや久し矣。しかもキリスト、釋迦を温ねて満足を得ず、立正、見眞、弘法また當時人心の渴を醫するに足らず。煩悶焦燥の結果今や世人は糾然として天啓的神書を求め、之を得て以て人生の苦惱を醫せむとすつたのである。仁慈無限の大神は、茲に天下萬類の爲に綾の聖地に降りたまひ、神の僕と選ばれたる瑞月の肉の宮を藉りて、以て救世の福音を宣示し給うたのが即ちこの靈界物語であります。世道人心の廢頹を歎き、天下を憂ふるの志士淑女は、心を潜めて御神慮の在る所を御探究あらむことを希望する次第であります。

大正十一年十一月十一日

總説に代へて

靈界には神界、中界、幽界の三大境界がある。

神界は神道家の唱ふる高天原であり、佛者の謂ふ極樂淨土であり、耶蘇の曰ふ天國である。

中界は神道家の唱ふる天の八衢であり、佛者の謂ふ六道の辻であり、キリストの曰ふ精靈界である。

幽界は神道家の唱ふる根の國、底の國であり、佛者の謂ふ八萬地獄であり、キリストの曰ふ又地獄である。

故に天の八衢は高天原にもあらず、また根底の國にもあらず、兩界の中間に介在する中程の位置にして即ち情態である。人の死後直に到るべき境界にして、所謂中有である。中有に在ること稍久しき後、現界に在りし時の行爲の正邪により、或は高天原に上り或は根底の國へ落ち行くものである。

人靈中有の情態（天の八衢）に居る時は、天界にもあらず又地獄にもあらず。

佛者の所謂六道の辻又は三途の川邊に立つて居るものである。

人間に於ける高天原の情態とは、眞と善と美の相和合せし時であり、根底の國の情態とは、邪惡と虚偽とが人間にありて合致せる時を云ふのである。

人の靈魂中に在る所の眞と善と美と和合する時は、その人は直ちに天國に上り、人の靈魂中に在る邪惡と虚偽と合致したる時は、その人は忽ち地獄に落つるものである。斯の如きは天の八衢に在る時に於て行はるるものである。

天の八衢（中有界）に居る人靈は頗る多數である。八衢は一切のものの初めての會合所であつて、此處にて先づ靈魂を試験され準備さるのである。人靈の八衢に彷徨し居住する期間は必ずしも一定しない。直ちに高天原へ上るものもあり、直ちに地獄に落ちるものもある。極善極眞は直ちに高天原に上り、極邪極惡は直ちに根底の國へ墜落して了ふのである。或は八衢に數日又は數週日、數年間居るものもある。されど此處に三十年以上居るものは無い。此の如く時限に於て相違があるのは、人間の内外分の間に相應あると、あらざるとに由るからである。

人間の死するや、神は直ちに其靈魂の正邪を審判し給ふ。故に惡しき者の地獄

界に於ける醜團體に赴くは、其人間の世にある時、その主とする所の愛なるもの
忽ち地獄界に所屬して居たからである。又善き人の高天原に於ける善美の團體に
赴くのも、その人の世に在りし時の其愛、其善、其眞は正に天國の團體に既に加
入して居たからである。

天界、地獄の區劃は、斯の如く判然たりと雖も、肉體の生涯に在りし時に於て、
朋友となり知己となりしものや、特に夫婦、兄弟、姉妹と成りしものは、神の許
可を得て天の八衢に於て會談することが出来るものである。

生前の朋友、知己、夫婦、兄弟、姉妹と雖も、一旦この八衢に於て別れた時は、
高天原に於ても根底の國に於ても、再び相見る事は出来ない、又相識することもな
い。但同一の信仰、同一の愛、同一の性情に居つたものは、天國に於て幾度も相
見相識ることが出来るのである。

人間の死後、高天原や根底の國へ行くに先だつて、何人も經過すべき状態が三
途ある。そして第一は外分の状態、第二は内分の状態、第三は準備の状態である。
此状態を經過する境域は天の八衢（中有界）である。然るにこの順序を待たずに、

直に高天原に上り根底の國へ落つるものもあるのは、前に述べた通りである。

直ちに高天原に上り又は導かるものは、其人間が現界に在る時、神を知り、神を信じ、善道を履み行ひ、其靈魂は神に復活して、高天原へ上る準備が早くも出來て居るからである。また善を表に標榜して内心惡を包藏するもの、即ち自己の兇惡を装ひ人を欺く爲に善を利用した偽善者や、不信仰にして神の存在を認めなかつたものは、直ちに地獄に墜落し、無限の永苦を受くる事になるのである。

死後高天原に安住せむとして靈的生涯を送ると云ふことは、非常に難事と信ずるものがある。世を捨て、その身肉に屬せる所謂情欲なるものを一切脱離せなくてはならないからだ、と言ふ人がある。此の如き考への人は、主として富貴より成れる世間的事物を斥け、神、佛、救ひ、永遠の生命と云ふ事に關して、絶えず敬虔な想念を凝らし、祈願を勵み、教典を讀誦して功德を積み、世を捨て、肉を離れて、靈に住めるものと思つて居るのである。然るに天國は斯の如くにして上り得るものではない。世を捨て、靈に住み、肉に離れようと努むるものは、却て一層悲哀の生涯を修得し、高天原の歡樂を攝受する事は到底出來るものでない。

何となれば、人は各自の生涯が死後にも猶留存するものなるが故である。高天原に上りて歡樂の生涯を永遠に受けむと思はば、現世に於て世間的の業務を執り、その職掌を盡し、道德的民文的生涯を送り、かくして後始めて靈的生涯を受けねばならぬのである。これを外にしては、靈的生涯を爲しその心靈をして、高天原に上るの準備を完うし得べき途はないのである。内的生涯を清く送ると同時に、外的生涯を營まないものは、砂上の樓閣の如きものである。或は次第に陷没し或は壁落ち床破れ崩壊し傾覆する如きものである。

あゝ惟神靈幸倍坐世

大正十一年十一月十四日

口述者識

第一篇 波瀾重疊はらんちよつでふ

第一章 北光照暗ほくくわうせうあん（一一二六）

神かみの御み稜いづ威づも高たか照てる山やまの
堅かき磐は常とき磐はの岩がん窟くつに

天あめ降り坐ましたる北きた光てる彦ひこの
天あめの目ま一ひとつ神かむつ司かさ

さしもに猛たけき獸けもの族のまで
伊い豆づの慈じ眼がんに救すくひつつ

瑞みづの教をしへを遠をち近こちに
開ひらかせたまふ尊たふとさよ

その妻つま神がみと現あれませる
こころも直すぐなる竹たけ野の姫ひめ

朝あさな夕ゆふなの起おき【ふし】に
諸ももの獸けもの族のを愛いつくしみ

美み都づの御み靈たまの御み教をしへを
體たい現げんしますぞ畏かしこけれ

神かみの御み綱つなに曳ひかれつつ
こゝに耶や須す陀たら羅ら姫ひめの命みこと

テルマン國の毘舎の家

シヤールの夫の暴状に

堪り兼ねたる時もあれ

忠誠無比の下男

リーダーの誠に助けられ

夜を日に次いで入那國

蓮の川邊に来る折

右守の司の放ちたる

數十人の手下等に

取り圍まれて主従は

進退茲に谷まりし

その一刹那後方より

聲も涼しく宣傳歌

聞え來ると思ふうち

諸國巡修の龍雲が

此處に現はれ主従が

危難を救ひ寄手をば

彼方の野邊に追ひ退りぬ

耶須陀羅姫とリーダーは

危救の恩を謝しながら

龍雲司に守られて

照山峠の麓まで

進みて來る折もあれ

三五教の宣傳使

黄金姫や清照姫の

その一行に邂逅して

北光神の傳言を

聞きて歡び勇みつつ

袂を別つ右左 狼巢ぐふ高照の

深山を指して三人は 膝の栗毛に鞭を打ち

漸く谷を數越えて 北光神の鎮まれる

岩窟館に着きにけり 天の目一つ神司

竹野の姫も歡びて この珍客を優待しつ

誠一つの三五の 教を諭す時も時

黄金姫や清照姫の 貴の命の計らひに

入那の城主と時めきし セーラン王はカル、レーブ

その他の従者と諸共に 駒に鞭打ち出で來り

又もや不思議の對面に 日頃慕ひし相愛の

目出度き男女の語り合ひ 實にも割無く見えにける

北光神は慇懃に 天地の神の經綸を

心を籠めて宣り傳へ さしもに寂しき岩窟も

萎れ切つたる夏草の 白雨に蘇生せし如く

天國淨土の花咲きぬ

ア、惟神々々

御靈幸はへましまして

四十二卷の物語

車の轍もすらすらと

進ませたまへ世を守る

畏き神の大前に

謹み敬ひ願ぎ奉る。

北光の神なる天の目一つの神は白髯を撫でながら、セーラン王や耶須陀羅姫、

龍雲その他を集めて、神界の御經綸や神示に就て綿密なる解釋を與へつつあつた。

セーラン「昨日より承はりました世界の終焉に就て、今一應詳細なる説明を御願

ひ申上げ度きもので御座ります。瑞の御靈の御神示の中に、世の終りの來る時は

其日の患難の後、直ちに日は暗く月は光を失ひ、星は空より墜ち、天の勢ひ震ふ

べし。其時、人の子の徵天にあらはる。又地上にある諸族は哭き哀しみ、且つ人

の子の權威と大なる榮光とを以て天の雲に乗り來るを見む。又その使等を遣はし、

ラツパの大なる聲を出さしめて、天の彼の極みより此の極みまで、四方より其選

ばれし者を集むべし……とあるのは、其言葉の通りに解すれば如何なもので御座

りませうか、文字通りに解すべきものとするれば、最後の神の審判と云はれてある世界終焉の時に、是等の恐るべき事件が出現すると見なくてはなりません。『この豫言を以て教示の文字通りに解するものは可成澤山あるさうです。是等の人は日月光を失ひ、星は空より墜ち、主なる神の徴天に現はれ、又雲の中よりラツパを持った天使は、瑞の御靈の救世主と共に、現實的に天より降り給ふものと思考して居るのみならず、見る限りの世界は悉く滅びて、茲に始めて新しき天地の出現を見得らるるものと早合點して居るのである。三五教の宣傳使の中に於ても、此の如く信じて居る人があるやうです。斯の如く信じて居る人は、神諭の微細なる所に至るまで密意の存在しある事を知らないものである。神諭の裡には文字の如く解すべき自然的世間的の事では無くして、心靈的、神界的の祕事を包含されて居る。一文一句のうちにも、一々内義を含ましめむために、悉く相應の理に由りて示諭されてある。故に神諭は、普通の知識や學問の力では、到底眞解されるものではない。是即ち神聖なる神諭たる所以である。』

主なる神、大空の雲に乗りて來るとの神示も亦此内義に由つて、解釋すべきも

のである。

即ち暗くならむといふ日は

愛の方面より見たる救世主嚴の御魂を表はし、

月は信の方面より見たる

救世主瑞の御魂を表はし、

星は

善と信との知識又は

愛と信との知識を表はし、

天上に於ける人の子の徴は

神眞の顯示を表はし、

地上に於て哭き哀まむと云ふ諸族は

眞と善、又は

信と愛とより来る萬事を表はし、

天の雲に乗りて權威と榮光とを以て主即ち救世主の來らむといふのは、

神諭しんゆの中なかに救世主きうせいしゆの現存げんぞんすることを表あらはし、

かねて其その黙示もくじを表あらはし、

雲くもは

神諭しんゆの文字もじに顯あらはれたるを表あらはし、

榮光えいくわうは

神諭しんゆの内うちに潛ひそめる意義いぎを表あらはし、

天人てんにんのラツパをもちて、大だいなる聲こゑを出だすというてあるのは、

神眞しんしんの由よりて來きたるべき天上界てんじやうかいを表あらはしたものである。

この故ゆゑに救世主きうせいしゆの宣のたまへる如上じよじやうの言葉ことばは、何なんの意義いぎなるかと云いへば、

教をしへの聖場せいぢやうの終期しうきに當あたりて

信しんと愛あいとまた共ともに滅ほろぶる時とき

救世主きうせいしゆは神諭しんゆの内意ないいを啓發けいはつし、神界しんかいの密意みつゐを現あらはし給たまふといふ事ことである。目下もくかの

婆羅門ばらもん教徒けうともウラル教徒けうとも亦また三あな五な教徒けうとも、殆ほとんど全ぜん部ぶ知しるものなしと謂いつても良よい

位くらゐだ。實じつに宣傳使せんでんしの職しよくにあるものすら、神諭しんゆのわが解釋かいしやくを否いなまむとする者もの計ばかりだ。

そして彼等の多くは曰ふ。『何者か、能く神界を探查し來りて、是等の事を語り得るものぞ』と。斯の如き説を主張する者、特に世智に長けたる人々の中に多々あるを見る。其害毒の或は眞率純眞の人に及ぼし、遂に其信仰の壞亂を來すの恐れあるを歎き、我は常に靈魂を淨めて天人と交はり、之と相語り合うたのである。天人と言語を交換する事、人間界と同様に神界より許されて、親しく天界に起る諸多の事件や地獄の有様をも見ることを許され、神界の眞相を天下萬民に傳へ示し、説き諭すに努めて居るのは、無明の世界を照破し、不信の災を除き去らむが爲である。例へ神諭に天地が覆へると示してあつても、泥海になるとあつても、人間が三分になると示されてあつても、眩舞が來るとあつても、決して之を文字其儘に解すべきものでない。凡て内義的、神界的、心靈的に解すべきものである。さうで無くては、却て天下に大なる害毒を流布し、神慮を惱ませ奉る事になるものである事を承知せなくてならぬと思ふ。併し乍ら、是は北光一家の私言だ。脱線して居るかも知れぬ、アハ、ハ、ハ、』

『御懇篤なる御教示を蒙りまして、吾々も漸くにして迷夢を醒ましました。あゝ

かむながらたまちはへませ
惟神靈幸倍坐世〆

と感涙かんるいに咽むせぶ。ヤスダラ姫ひめも龍雲りゅうんも、其他そのたの一同いちどうも息いきも繼つがず、北光神きたてるのかみの示教じけうを
聽聞ちやうもんし、感謝かんしゃの涙なみだに暮くれつつあつた。

「サア サア セーラン王様わうさま、ヤスダラ姫様ひめさま、レーブ、カル殿どの、是これより入那いるなの城しろ
に乗り込み、邪神じゃしんを言向ことむけ和やはすべく時ときを移うつさず出陣しゅつげんされよ。時遅ときおくれては大變たいへんだ。黄わう
金姫ごんひめ、清照姫きよてるひめ様も待つて居をられます〆

と平素へいそ落着おちつき拂はらつた神かみに似にず急せき立たてる。セーラン王わうは此この言葉ことばに立上たちあがり、
「重々ぢゆうぢゆうの御親切ごしんせつに預あづかりました。然しからば、是これより三五教あななひけうの言靈ことたまを以もつて、惡人あくにんを善ぜん
道だうに導みちびく首途かどに際さいし、神様かみさまに宣傳歌せんでんかを奏上そうじやう致いたしませう〆
と銀扇ぎんせんを開ひらいて、聲こゑも涼すずしく歌うたひ始はじめた。その歌うた、

「神かみが表おもてに現あらはれて

天地てんちを造つくりし神直日かむなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの世よは

善神ぜんしん邪神じゃしんを立別たてわける

靈魂みたまも廣ひろき大直日おほなほひ

神かみの御旨みむねに任まかすのみ

怪しき卑しき人の身のいかでか正邪を覺り得む

大黒主の神司 八岐大蛇の表現と

吾は心に思へども 尊き神の攝理の下に

弱き身魂を救はむと 邪神と顯現ましまして

試させ給ふも計られず 他人を惡しと思はずに

吾身の罪を省みて 日に夜に感謝の生活を

樂しむならば天地の神は必ず守るべし

吾身の罪惡の有様が 寫り給ひしものならむ

あゝ惟神々々 無抵抗主義の御教に

刃向ふ敵はあらざらめ あらゆる曲津も醜神も

大蛇も凡て他にあらず 執着心の雲深き

穢なき身魂に憑依して 吾身の罪が自ら

吾身を苦しめ攻むるなり あゝ惟神々々

ヤスダラ姫と諸共に 心の駒を立直し

邪神じやしんと惡にくみしカールチン　　テーナの姫ひめは言いふも更さら

サマリー姫ひめを憐あはれみて　　吾等われらに與あたへし無禮ぶれいをば

直日なほひに見直みなほし聞きき直なほし　　廣ひろき心こころに宣のり直なほし

入那いるなの國くにの民草たみぐさを　　安やすく樂たのしく神國しんこくの

花咲はなく春はるの歡よろこびに　　救すくひて天津神國あまつかみくにの

貴つづの消息たよりや福ふくいん音を　　導みちびき諭さとし麻柱あななひの

誠まこと一つの御教みをしへに　　習ならはせ上下しやうかした親したしみて

常世とこよの春はるを樂たのしみつ　　地上ちじやうに降くだりし天國てんこくの

神かみの柱はしらと仕つかふべし　　北光神きたてるがみよ竹野姫たけのひめ

いざいざさらば　　いざさらば　　是これよりお暇申いとまをし上あげ

入那いるなの都みやこへ堂々だうだうと　　轡くつわを竝ならべて立歸たちかへり

國人等くにびとどもの心こころをば　　安やすんじ救すくひ大神おほかみの

誠まことの教のりを傳つたふべし　　あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈幸みたまさちはへましませよ』

と歌うたひを了はり、用意よういの駒こまにヒラリと跨またがり、一行いっかう七人しちにんは北光きたてるのかみ神かみ夫婦ふうふに別わかれを告つげ、
手綱たづなかいくり、山路やまみちを狼おほかみの群むれに送おくられ、ハイハイハイと駒こまを警いましめながら高照山たかてるやま
を降くだり、入那いるなの都みやこをさして進すすみ行ゆく。

(大正一一・一一・一四 舊九・二六 加藤明子録)

第二章 馬上歌ばじやうか (一一・二七)

神かみの御み稜いづ威づも高照山たかてるやまの 巖いづの岩窟いはやを後あとにして
入那いるなの都みやこの刹せつ帝利ていり セーラン王わうの一行いっかうは
栗毛くりげの駒こまに跨またりて 狼おほかみほ吼なえる山路やまみちを
岩いはの根木ねきの根ねふみさくみ 閑荒こがらぶ野路のぢを越こえ
蹄ひづめの音おとも勇いさましく 音おとに名高なだかき照山てるやまの

峠たつげの麓ふもとに到着たつちやくし 馬上ばじやう豊ゆたかに歌うたひつつ
都みやこをさして進すすみゆく。

セーラン王わうは馬上ばじやう静しづかに歌うたふ。

父ちちの命みことの後あとをつぎ 心こころの暗くらき吾わが身み魂たま

入いる那なの國くにの王わうとなり 德望とくばう缺かけたる所ところより

部ぶ下かの統率とうそつ誤あやまりつ 遂つひには右守うもりの司かみをして

邪神じやしんの群むれにおとしける われは尊たふときバラモンの

神かみの教をしへを受けつぎて 朝あさな夕ゆふな國民くにたみに

誠まことの模範もはんを示しめすべき 尊たふとき職しよくに在ありながら

神かみの恵めぐみを輕かろんじつ 知しらず識しらずに慢まん心しんの

雲立くもたち昇のぼり村肝むらきもの 心こころは暗やみに迷まよひけり

あゝ惟かむ神な々々ながら 御靈みたま幸さちはへましまして

心こころに千花ちばな百花ももばなの

香かる時ときこそ北光きたてるの

神かみの恵めぐみに助たすけられ

水みづも漏もらさぬ御教みをしへに

漸やっやく晴はれし胸むねの闇やみ

空そらに日月じつげつ輝かがやきて

晴はれわたりたる胸むねの空そら

秋野あきのを飾かぎる黄金わうごんの

姫命ひめのみことの功績いさをしは

清照きよてる姫ひめと輝かがやきぬ

神かみが表おもてに現あらはれて

善神ぜんしん邪神じゃしんを立別たてわける

尊たふとき稜威いづの御教おんをしへ

悟さとりし上うへはセーランの

神かみの司つかさも潔いさぎよく

前非ぜんびを悔くいて天地あめつちに

誠まこと一つの三五あななひの

善言ぜんげん美行びかうを勵はげみつつ

神かみの司つかさの天職てんしよくを

完全うまらに委曲つばらに顯現けんげんし

此世このよの鑑かがみとなりぬべし

ヤスダラ姫ひめよ龍雲りううんよ

神かみは汝なんぢと俱ともにあり

神かみの大道おほぢに任まかす身みは

如何いかに大黒主おほくろぬしの神かみ

神變しんべん不思議ふしぎの神力しんりきを

現あらはし來きたり入いる那城なじやう

蹂躪じうりんせむと【いらつ】とも

何か恐れむ敷島の

大和心のある限り

必ず神は吾々を

安きに救ひ給ふべし

人は神の子神の宮

天地を開く經綸に

仕ふる身ぞと知る上は

骨を粉にし身を碎き

神の御爲世の爲に

互に心を合せあひ

力を一つに固めつつ

大慈大悲の神恩に

酬いまつれよ諸共に

照山峠の坂路は

いかに峻しくあるとて

心の駒の脚竝みの

揃ひし上は光榮の

遂には都に進む如

如何なる事も成りとげむ

進めよ進めいざ進め

誠の道を踏みしめて

勝利の都に逸早く

進めよ進めいざ進め

神の教を力とし

誠の道を杖として

心の駒の勇ましく

上りつ下りつ村肝の

心は最早秋の空

恩頼は目のあたり

輝き初めて春の野の

百花千花咲き出づる

嬉しき思ひに充たされぬ

誠の道に進む身は

いかなる曲も夏草の

上に滴る露の玉

朝日に消ゆる其如く

亡び失せむは目のあたり

勇めよ勇め諸共に

前途多望の神司

身の行末ぞ頼もしき

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

ヤスダラ姫はセーラン王の後について、
聲も静かに馬上ながら歌ひ進む。

入那の國の刹帝利

セーラン王の家筋に

生れ合ひたる吾こそは

親と親との許嫁

セーラン王の妃となりて

入那の國を永久に

守らむものと朝夕に

神に願ひを掛卷も

畏かしこき神かみの御心みこころに 反そむきしものかゆくりなく

テルマン國こくに追おひやられ 素性すじやうい卑いやしき毘舍びしやの家いへ

シヤールの妻つまとなり下さがり 面白おもしろからぬ月日つきひをば

歎なげきかこちつ暮くらしける 時ときこそあれや青天せいてんの

霹靂へきれきむね胸むねをとどろかす 慘状さんじやう吾身わがみに迫せまりけり

梵天ぼんてん帝釋たいしやく自在じざい在天いてん 神かみは此世このよにまさずやと

吾身わがみの不運ふうんを歎かこつ折をり 忠義ちうぎに篤あつきリーダーが

雨風あめかぜ烈はげしき眞夜まよな中に 吾わがとらはれし牢屋ひとやをば

忠義ちうぎの槌つちを打振うちふりて 碎くだき毀こぼちて救すくひ出し

暗やみに紛まぎれて荒野あらの原はら スタスタ進すすみ來きたる折をり

右守うもりの司かみの捕手とりてら等に 前後ぜんご左右さいうを取とりまかれ

蓮はちすの川かはの此方こなたにて いかがはせむと惱なやむ折をり

龍雲りううん司つかさに助たすけられ 又またもやここに高照たかてるの

深山みやまの奥おくの岩窟がんくつに 危あやふき身をみば救すくはれて

北光神の御教を 朝な夕なにかかぶりつ

曇りし胸も晴れ渡り 迷ひの雲は拂拭し

眞如の月日は心天に 強く輝き給ひけり

あゝ惟神々々 悪魔のしげき世の中に

かくも仁慈に富み給ふ 誠の神もいますかと

感謝の涙川となり 沈みし胸も浮き立ちて

救ひの舟に棹をさし 天国浄土の樂園に

逍遙しける折もあれ 思ひがけなき刹帝利

セーラン王の一行が 尋ね來ませる嬉しさよ

絶えて久しき二柱 巡り會ひたる睦び言

かはす間もなく北光の 神の司におごそかに

教へられたる神嘉言 うなじに分けて兩人は

感謝の涙拂ひつつ 駒に跨り岩窟を

名残を惜みふり返り 馬上ゆたかに嵐吹く

野路を踏み越えやうやうに 照山峠に来て見れば

木々の梢の紅葉は いつしか散りて淋しげに

尾の上をわたる秋の風 淋しき山路も何となく

君に従ひ登る身は 春めき渡り村肝の

心は映ゆる春心地 神の教に導かれ

進む吾こそ樂しけれ 入那の都に到りなば

右守の司の御子とます サマリー姫はさぞやさぞ

吾身の姿を打眺め 心を悩ませ給ふべし

あゝ惟神々々 如何なる事も天地の

神の御旨に従ひて 戀の執着秋の野の

木の葉の風に散る如く サラリと清め睦じく

姉妹と手を握つて 誠一つを立て通し

三五教の神力を 現はしまつり入那國

都の花と謳はれて 譽れを千代に傳ふべし

あゝ惟神々々かむながらかむながら 大地の龍と名を負ひし

清き白馬に跨りつまたが 誠を明かし奉るまこと あ たてまつ

セーラン王よ聞し召せわう きこ せ 妾を包みし戀の雲わらは つつ こひ くも

瑞の御靈の吹き送るみづ みたま ふ おく 科戸の風に拂はれてしなど かぜ はら

塵もとめなくなりけるちり あゝ惟神々々かむながらかむながら

吾等の身魂に皇神はわれら みたま すめかみ 清く涼しく宿りましきよ すず やど

汚れ果てたる吾身をばけが は わが み 雄々しく照らさせ給ひけりをを て たま

進めよ進めいざ進めすす すす 誠の道を只管にまこと みち ひたすら

心の限り進みゆけこころ かぎすす 勝利の都も近づきぬしょうり みやこ ちか

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はへまませよみたまさち

朝日は照るとも曇るともあさひ て くも 月は盈つとも虧くるともつき み か

假令大地は沈むともたとへ だいち しづ 誠一つは世を救ふまことひと よ すく

誠の道を踏みしめてまこと みち ふ 玉の御柱立直したま みしら たてなほ

天地の花と謳はれててんち はな うた 豊けき誠の實りをばゆた まこと み

枝もたわわに結びつつ
今迄もつれし心をば
ときさばき行く奇魂
曾富戸の神の幸ひに
進むわれこそ雄々しけれ
あゝ惟神々々
御靈幸はへましませよ

道は益々急坂となり、鞍上最も注意を要すべき難路につき當つた。されど何れも乗馬の達人、鞍上人なく、鞍下馬なき有様に、悠々として厩に面を吹かれながら英氣に充ち、一行は單縦陣を張りつつ登るのであつた。龍雲は馬上豊かに歌ひ始めた。

ハイハイハイハイ馬の奴
照山峠の急坂だ
氣を付け遊ばせ栗毛さま
顛倒致しちや堪らない
ハイハイドウドウ
ハイドウドウ
人世の旅は急坂を
登るが如しと聞くからは
有爲轉變の世のさまを

思ひ浮べてハイハイハイ
ゆかしさ胸に充ちわきぬ

月の御國の首陀の家に
臍の緒おとした龍雲も

天馬が空をかけるよな
思はぬ欲望に驅使されて

波間に浮ぶシ口の島
神地の都の神司

ハイハイ手綱をしめ直し
しつかりせなくちや危ないぞ

サガレン王を放逐し
折柄起る風雲に

乗じて天へ舞ひ昇り
心猿意馬は忽ちに

狂ひ出してハイハイハイ
悪虐無道の張本と

なりすましたる恐ろしさ
心に潜む鬼大蛇

醜神どもの勢は
鬣振り立て急坂を

越え行く駒のその如く
とめどもなくに味噌汁が

ステツペンへと飛上り
意氣揚々と雲の上

ハイハイハイハイドウドウ
天の下をば睥睨し

俺程運のよい者が
三千世界にあらうかと

笑壺ゑつぼに入りし折をりもあれ
運命うんめいつきて北光きたてるの

神かみの司つかさに荒肝あらぎもを
拉ひしがれ忽たちまち谷底たにそこへ

顛落てんらくしたるあさましさ
オツトドツコイ馬うまの奴やつ

道みちにさやりし岩角いはかどに
躓つまずきやがった確しつりせい

膝ひざを推くちいちや堪たまらない
お前は俺おれの助たすけ舟ぶね

神かみの光ひかりに照てらされて
改心かいしん致いたした其そのおかげ

七千餘國しちせんよこくの月つきの國くに
何なんの障さはりも荒野あらの原はら

巡めぐりて進すすむ神かみの道みち
ハイハイハイハイ シーシーシー

セーラン王わうに従したがひて
誠まことの道みちに入いる那城なじやう

四方よもに輝かがやく黄金わうこん姫ひめ
身魂みたまも清照きよてる姫命ひめみこと

あれます聖地せいちへ進すすみ行ゆく
吾身わがみの上うへぞ樂たのしけれ

あゝ惟かむながらかむながら
神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんをば助たすけ惡神あくがみを
誠まことの道みちにまつろはせ

救すくはせ給たまふ三五あななひの
神かみこそ誠まことの世よの柱はしら

心ねぢけた龍雲も

心の駒を立直し

教も清く照山の

さしもに嶮しき坂路を

栗毛の駒に助けられ

正しき人に従ひて

旗鼓堂々と登りゆく

ハイハイハイハイハイドウドウ

馬の合うたる人ばかり

一緒にゆくのが同道々

いよいよ面白なつて来た

最早絶頂も近づいた

峠の上で鹿毛さまよ

お前も一服するがよい

重い男を背に乗せ

登る貴様もえらかるが

乗つてる俺も樂でない

さはさりながら苦みの

後にはキツト樂がくる

あゝ惟神々々

人馬諸共神の山

登りつめたる曉は

四方を見はらす世界晴

晴れて嬉しき胸の暗

忽ち開く天國の

清き涼しき花園に

進むわれこそ樂しけれ

あゝ惟神々々

最早峠もはやたうげに着つきました 王様わうさま一服いつぶく致いたませう

ヤスダラ姫様ひめさま、TEAMスよ レーブよ、カルよ、一休ひとやすみ

四足泡よつあしあわを吹ふき出だした これこれから先さきは下くだり坂ざか

世よの立替たてかへが始はじまつて 上のほる身魂みたまや下くだる魂たま

行合ゆきあひかち合あひ騒さわがしく 入那いるなの都みやこの大空おほぞらに

一悶錯ひともんさくの起おこる前まへ 纏もつれ果はてたる小田卷をだまきの

いとやすやすと治をさめませ あゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈幸みたまさちはへましませよ 』

と歌うたひ了をはり、馬うまをヒラリと飛とび下おり、傍かたはらの巖いはほに腰こしを打うちかけ、息いきを休やすむるのであつた。セーラン王わう其他そのたも龍雲りゅううんの言葉ことばに従したがひ、馬背ばはいを飛とび降おり、人馬じんば共ともに、暫しばし息いきを休やすむることとなつた。

(大正一一・一一・一四 舊九・二六 松村眞澄録)

第三章 山嵐（一一二八）

照山峠の頂上に馬背に跨り、漸く登りついたセーラン王の一行は、尾上を渡る晩秋の風に面を吹かれ乍ら、眼下の原野を瞰下し、感慨無量の氣にうたれ、悲喜交々心中に往来しつつ太き溜息を吐いて居る。無心の駒は嬉しげに頭を擡げ嘶くもあり、色の變つた黄金色の芝草を「むし」るもあり、人馬共に何の隔てもなく暫し心を緩めて浩然の氣を養ひつつあつた。そこへヤスダラ姫の搜索隊として五人の騎士が馬に跨り登つて來た。騎士の一隊は、ヤスダラ姫が王を始め四五人の部下と共に此處に悠然として休息して居るに肝を潰し、目を圓くし、少しく逃げ腰になつて、

騎士の「ヤア、そこに居らるるはヤスダラ姫にましまさずや。吾こそはテルマシヤのシャルル殿より遣はされたるコルトンと云ふ騎士でムる。いい所でお目にかかりました。さアこれから吾々がお供を致し、テルマン國へ歸りませう」と馬上より聲を震はせて云ふ。

「ヤア其方はシャールさまから頼まれて来た騎士だな。遠方のところ、御苦勞で
ムりました。併しながら、妾は何と云はれてもシャールの館へは歸りませぬから、
早く歸つて其由を復命して下さい。又無實の難題で鐵牢へ放り込まれては、堪り
ませぬからな。ホ、ホ、ホ、」
とヤスダラ姫は神力無雙の神司を伴うて居るため、心強くなり、平氣の平左で、
顔色も變へず笑ひながら答へてゐる。その大膽さに騎士は益々氣を吞まれ、目を
丸くし、

コルトン「これはしたり姫様、左様な事を仰せられては、吾々の顔が立ちませぬ。
決して今後は左様な残酷な事はせないと、シャールの主人も悔悟して居ましたか
ら、お歸り下さつても大丈夫です。又私がついて居ります以上は、決して左様な
事はさせませぬ。御安心の上何卒吾々と共に御歸國を願ひます」

「ホ、ホ、ホ、同穴の貉、夜分なれば騙されるかも知れませぬが、なんぼ山の中だ
と云つて、その騙しは利きますまい。シャールの名を聞いても身慄ひが致します。
もう左様な繰言はこれきり一言も仰シャールなや。ホ、ホ、ホ、」

「これ、お姫さま、いや奥様、一生懸命に使命を以てお願い申して居るのに、滑稽所ぢやムりますまい。何卒貴女様も婦道を重んじ、夫の命に従つてお歸り遊ばすが正當でムりませう」

「妾は飽迄も婦道を守つて來ました。今迄微塵も婦道に缺けた事を致した覚えはムりませぬ。それにも拘はらず、罪なき妾を鐵窓のもとに投げ込み、虐待をなさるやうな夫の家へは、護身の關係上劍呑で歸る事は出來ませぬから、之までの縁と諦めて下さいと傳言して下さい。シャルルさまは夫道を守る方ぢやありません。一家の主婦たる妾に對し、家政上について一回の御相談を遊ばすぢやないし、妻を無視して數多の卑しき女を侍らせ、無限の侮辱を加へたお方、假令死んでも左様な處へは滅多に歸りませぬ。かうなつたのもシャルルさまの心の錆から湧き出たのですから、最早回復の見込みはありませぬ。覆水盆にかへらず、何程巧妙な辭令を以て籠絡しようとなさつても、そりや駄目ですよ。ヤスダラ姫だつて少しは精神もありますから、何時迄も無限の侮辱に甘んずる事は出來ませぬ。女權擴張問題の持上つた今日此頃、たとへ女の端くれでも女の權利を保護する點から見

ても、どうして左様な馬鹿げた事が出来ませうか。天下の婦人に對しても妾の責任がすみませぬ。……ヤスダラ姫は多數婦人の面上に泥を塗つたと云はれては濟みませぬ。最早一個の婦人として考ふる事は出来ませぬ。天下の婦人を代表して、女の權利を極力保護する妾の考へでムります。何時迄何と仰有つても金輪奈落歸國は致しませぬ。何卒シャールさまにもこんな不貞腐れ女を目にかけずに、貴方のお氣に入つた御婦人と面白う可笑しくお暮し遊ばせと、ヤスダラ姫が云つたと仰有つて下さいませ。なあコルトンさま、さうでせう」

「さう聞けばさうでもありませんが、そりやあんまり冷淡ぢやありませんか。少しは温情の籠つた御返事を承はらなくては、如何して旦那様に復命が出来ませうか」

「ホ、ホ、ホ、温情が聞いて呆れますわ。今の資本家は労働者に對して温情主義だとか云つて、うまく自分に都合のよい標語を用ひますが、そんな有言不實行のやり方はヤスダラ姫は大嫌ひでムります。シャールさまもテルマン國の大富豪、大資本家だから、口癖の様に温情主義をまくし立てて居られましたな。ホ、ホ、ホ、」

コルトンは頭を掻きながら、

「奥様、貴方は俄に此頃の空ぢやないが、心機一轉したのぢやムりませぬか」

「エー、辛氣臭い、心機一轉もしませうかいな。一天俄にかき曇ると思へば忽ち

晴れる秋の空、妾は已に既に既にシヤールさまから【あき】られてゐました。妾もあ

の様な脅迫されたり、虐待されて虚偽の生活をつづける事は最早忍びませぬ。そ

れよりも早くイルナの都入りをせなくてはなりませんから、何卒妾に構はずお歸

り下さいませ」

「これだけ申し上げてもお聞き下さらねば、私の職務上止むを得ませぬ。失禮な

がらフン縛つてでも連れて歸りますから、其覺悟をなさいませ」

「ホ、ホ、御勝手に成されませえな。妾に指一本でも觸へるなら觸へて御覽」

コルトンは部下に目配せし、ヤスタラ姫を捕縛せしめむとした。四人は姫に向

つて捕縄を【しごき】ながら武者振りつかむとするを、レーブは此時突然身を起

し、大音聲を張り上げて、

「無禮者、狼藉者」

と云ひながら、武者振りつかむとする一人の襟首をとつてスツテンドウと谷道へ
投げつけた。

「何、猪口才な」

とコルトンは手に唾し、武者振りつくを、レーブは向脛をポンと蹴つた。コルト
ンはアツと一聲其場に倒れ、無念の齒ぎしりをしながら、向脛を顔を顰めてさす
つて居る。

レーブ「アハ、コルトンさまがコルトンと

脛をけられて轉げけるかな。

テルマンの國より来る五人づれ

照山峠で泡を吹くなり。

イヒ、命の惜くない奴は

ヤスダラ姫に手向うてみよ。

ウフ、うつかりと手出しを致す者あらば

首くびと胴どうとを分わけてやるぞよ。

エへ、へ、へら相さうに何なんぢやかんぢやと世迷言よまひごと

吐ほいたあとの其態そのさまを見みよ。

オホ、へ、恐おそろしい大權幕だいけんまくでやつて來きて

吠面ほえづらかわく淺あさましの態さま」

コルトン「ア」イタ、へ、呆あきれはてたる奥様おくさまの

強つよい腰こしには楯たてもつかれず。

詐いつて連つれ歸かへらうと思おもひしに

今は手いま足てあしも使つかふ術すべなし。

【ウ】口くちと姫ひめの御後みあとを慕したひつつ

苦くるしき破目はめに遇あひにけるかな。

選えらまれて搜索隊さつさくたいの長ちやうとなり

九死きうしいつしやう一生いっしやうの今日けふの災難わざはひ。

鬼おに大蛇おほろち虎狼とらほかみは恐れねど

姫ひめの剛情がうじやうに吾われは驚おどろく』

セーラン【な】にこと何事なにごとも神かみの御旨みむねに任まかすこそ

人ひとのゆくべき眞道まみちなるらむ。

西【に】しひがめなみ東南きたも北あめつちも天地あめつちの

神かみの守まもりのしげき世よなるよ。

奴【ぬ】ばたま羽玉やみぢの暗路たどを辿ひとる人ひとの身みは

轉こけつ輾まろびつ上のぼりつ下くだりつ。

懇【ね】んじろに諭さとす言ことの葉聞はきかずして

情つれなく散ちりし仇花あだばなあはれ。

野【の】も山やまもはや羽衣はごろもを脱ぬぎすてて

慄ふるひ戦をのくコルトンの胸むね』

コルトン 『腹はら立たたし峠たつげの上うへに倒たふされて

さがる由よしなし胸むねの溜飲りういん。

晝夜ひよるに探たづねまはりし甲斐かひもなく

こんな憂目うきめに遇あうた悲かなしさ。

冬ふゆ近ちかき照山峠てるやまたうげの木枯こがらしに

吹ふかれながらに泡あわを吹ふくなり。

屁放へつりの葦毛あしげの馬うまに跨またがつて

ここで又またもや閉口頓首へいこうとんしゆす。

ほめられて手柄てがらをしようと思おもひしに

骨挫ほねぢかれて痛みいた入いるなり』

龍雲りゅうん 枉神「ま」ががみの醜しこの尾先をさきに使つかはれて

わが身み知らずの馬ば鹿かなコルトン。

身「み」に代かへてヤスタラ姫ひめを捉とらへむと

嘘うそを筑紫つくしの馬うまに蹴けられたつ。

昔「む」かしより今いまに變かはらぬ神かみの道みち

進すすむ眞人まびとを攻せむる愚おろかさ。

珍「め」じらしや照山てるやまたうけ峠ちやうじやうの頂上ちやうじやうで

神代かみよも聞きかぬ芝居しばゐ見るみかな。

諸々「も」ろもろの企たくみを胸むねに抱いだきたる

醜しこの司つかさの身みの上うへあはれ

カル 惟「か」むなががみ神かみの大道おほぢを進すすむ身みは

心こころの駒こまも勇いさみ立たつなり。

氣【き】に入いらぬ夫を捨すてて歸かへり來く

姫ひめを追おひ掛かけ來きたる馬ば鹿か者もの。

苦【くる】しさを堪こらへて脛すねをなでながら

まだ懲こりずまに事こと騒さわぐかな。

怪【け】しからぬシヤールの枉まがに使つかはれて

駒こまひき出いだす人ひとの憐あはれさ。

此【こ】處こで今いま心こころの駒こまを立たて直なほせ

罪つみの重おも荷にもカルに救すくはれむ

テームス【さ】坂かみち道のほを登のぼりて見みればコルトンが

姫ひめを求もとめて來くるに出で會あひぬ。

【シ】トシトと手たづな綱なかいくり駒こまの背せに

跨またがり來きたる曲まがの捕とり手て等ら。

【ス】ワコソと捕縄とつて姫の前に

迫る間もなく足を折られつ。

背に腹は代へられぬとてコルトンが

強談判の腰は抜けたり。

曾志毛里の里に天降りし素盞鳴の

神の警め目のあたり見るも

コルトンは稍足の痛みも恢復したれば、手早く馬に打乗り、四人の騎士に目配せしながら、照山峠を一目散に馬の手綱をひきしめひきしめ、生命からがら逃げ歸り行く。あと見送つてヤスタラ姫は又歌ふ。

はるばると妾が後を尋ね来て

シホシホ歸る人の憐れさ。

妾とて鬼にあらねば世の中の

人ひとなやめむと思おもはざりしよ。

思おもはずも吾われを追おひくる捕人とりうどを

なやめまつりし事ことの苦くるしさ。

さりながら免まぬがれ難がたき此この場ばあひ合

見直みなほし給たまへ天地あめつちの神かみ。

逃にげて行ゆく後姿うしろすがたを見みるにつけ

悲かなしくなりぬ心こころさやぎぬ

セーランセーラン「已やむを得えぬ出でき来こと事ことなりと天地あめつちの

神かみも見直みなほし宿ゆるし給たまはむ

龍雲りううん「勤つとむべき事ことのさはなる世よの中なかに

捕手とりてとなりし人ひとの憐れあはささ」

テームス「彼かれとても生うまれついでの枉まがならじ
やがて誠まことの道みちに目め覺ざめむ」

レーブ「照山てるやまの峠たうげに立たちて逃にげて行ゆく
人ひとの姿すがたを見みるぞうたてき」

カル「天地あめつちの神かみの守まもりの厚あつくして
虎口ここうを逃のがれ給たまひたる君きみ。

いざさらば駒こまに跨またがりシトシトと

都を指して進み行くべし」

セーラン、シヤールの遣はした騎士が、最早此處まで姫の在處を尋ねて進み來る上は、決して油斷はなるまい。此峠を下れば益々危険區域だ。又坂路は乗馬は却て劍呑千萬、駒の口をとつてソロソロ下らうではないか。何とはなしに胸騒がしなくなつて來た。サア、一同行かう」

と先に立ち、急坂を下り行く。

一行は王の後に従ひ、駒を曳き連れ、ハイハイハイと聲をかけながら下り行く。

（大正一一・一一・一四 舊九・二六 北村隆光録）

第四章 下り坂（一一・二九）

レーブ ♪ 月日は空に照山の

峠急坂下りゆく

セーラン王に從ひて ハイハイハイハイ ドウドウドウ

どうしても此坂下らねば イルナの都に行かれない

右守の司のカールチン 欲の悪魔に憑依され

悪逆無道の企み事 ここ迄やつて來たけれど

どうしてこんな企み事 成り遂げさうな事はない

ハイハイハイハイこん畜生 確りせぬかい氣をつけよ

尖つた石に躓いて 千尋の谷間に落ちたなら

お前は忽ち死ぬだらう ハーハーハイハイ何とまあ

嶮しい嶮しい坂道だ ヤスダラ姫の神司

これから暫しの御辛抱 やがて都が見えまする

カールチン奴がいるいと 善からぬ事を企まうと

天地の神のます限り 悪の榮ゆる例ない

忽ち消ゆる春の雪 ハイハイハイハイ敗亡は

鏡かがみにかけて見るやうだ　　ドッコイ畜生氣ちくしやうきをつけよ

豆屁まめべばかり垂たれよつて　　ほんとに誠まことにハアハアハア

大馬鹿おほばか者奴ものめ、畜生ちくしやうめ奴　　何故なにゆゑ俺おれの馬うまだけは

これ程ほどハイハイ頓馬とんまだらう　　ガラガラガラガラ　　アイタツタ

ヒンヒンヒンヒンこん畜生ちくしやう　　おれが轉ころげたがをかしいか

お前まへは四よつ足あしレブさまは　　生うまれついでにほんあしの二本足

二ふたつの足あしと四よつ足あしと　　どうして競争きやうそうがなるものか

あゝ惟かむながらかむながら神々々　　バラモン天王てんわうドッコイシヨ

こいつは云いふのぢやなかつたなア　　天地てんちを造つくりし元もとつ神かみ

國治くにはる立たち大神のおほかみの　　お守まもり偏ひとへに願ねがひます

こんな難所なんしよでペツタリと　　右守うもりの司かみの手下てした等に

出會でつくわすならばどうしようぞ　　レちつーブは些ちつとも構かまはねど

心こころにかかるは王様わうさまや　　ヤスダラ姫ひめの身みの上うへだ

龍雲りゆううんさまよ確しつりせ　　お前まへさまの馬うまも怪あやしいぞ

私わたしが後あとから眺ながむれば 屁へつ放はり腰ごしの馬うまのさま

目め玉だまをあけて見みられない 八ハー八ハー八ハー八ハー 八ハイ八ハイ八ハイ

此こ畜ちく生しやう奴め氣きをつけよ 俺おれの頭あたまをなぜ噛かぶる

すつての事ことで笠かさの臺だい がつつとやられる所ところだつた

賢かしこいやうでも畜ちく生しやうだ 此こ奴やつは大きな柄がらをして

ヒンヒン吐ぬかして屁へを垂たれて 小ちひさい男をとこに扱あつかはれ

背せなに乗のられて鞭むち打うたれ いと神しん妙めうに八ハア八ハア八ハア

ついて出でて來くる馬ば鹿か者ものよ これこれもうし龍りゆう雲うんさま

お前まへばつかり先さきへ行いて 俺おれをどうして呉くれるのだ

俺おれのコンパスあ達たつ者しやだが 肝かん腎じん要かなめの馬うまの奴やつ

どうしても思おもよに歩あるかない 屁へ古こ垂たれ馬うまを曳ひいて往ゆく

俺おれの心こころになつて見みよ ほんとに誠まことにぢれつたい

さはさりながら八ハイ八ハイ八ハイ 蛞なめくぢ蝸せんりさへも百ひやく千せん里り

歩あゆめばいつか目も的くて地ち 達たつする例ためしもありときく

照山峠は名にし負ふ
イルナで一の難所ぞや

此處をば無事に馬曳いて
下り終せた曉は

再び駒を立て直し
勇氣を起して堂々と

一瀉千里の勢ひで
進みイルナの聖城へ

何の苦も無く月の空
ハイハイハイハイハイ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

照山峠はさかしとも
いつしか越ゆる此旅路

前途は中々有望だ
勝利の都も近づいて

首をのばして待つて居る
黄金世界の神司

黄金姫や清照姫の
嚴のお顔を拜むのも

次第に近づき北光の
神の教を遵奉し

イルナの城に蟠まる
曲司等を悉く

誠の道に言向けて
三五教の神力を

宇内に普く輝かし
譽も高き宣傳使

レーブと名乗つて月の國　ハイハイハイハイ　フサの國

羅馬に希臘小亞細亞　筑紫の島の果てまでも

吾足跡を印しつ　仕へまつらむ吾思ひ

叶はせ給へ天津神　國津神等八百萬

馬諸共に眞心を　捧げて祈り奉る

あゝ惟神々々　御靈幸はへましませよ

と倒徳利のやうにドブドブと出まかせの熱を吐きながら、一行の最後について、
足許覺束なく下り行く。テームスは馬を曳きながら歌ひはじめた。

セーラン王やヤスダラの　姫の命の御尾前を

守りて下る照山の　嶮しき坂はハイハイハイ

又とあるまい難所ぞや　追々坂はきつくなり

足許あやしくなつて來た　雨の如くに打出し

風かぜに木この葉はの散ちる如ごとく　　バラバラバツと追おひ散ちらし

ハイハイハイハイドウドウドウ　　畜ちく生しやう氣きをつけ危あぶ険ないぞ

何なんだえ泡あわを吹ふきやがつて　　ハ―ハ―ハツハイこれしきの

坂さかがそれ程ほど苦くるしいか　　とは云いふものの俺おれだとて

矢や張つばり苦くるしうなつて來きた　　苦くるしい時ときの神かみ頼だのみ

三あ五な教なの神かみ様さまよ　　何なに卒とそ宜よろ敷しく願ねがひます

人じん馬ば諸もろ共とも恙つがなく　　此この坂さか道みちをハイハイハイ

下くだらせ給たまへ惟かむ神ながら　　誠まことの道みちを進すすみ往ゆく

此このテームスも神かみの御み子こ　　神かみの守まもりのある上うへは

假たと令へま曲が津がつが襲しふ來らいし　　前ぜん後ご左さい右いうを取とり卷まいて

猛まう虎この勢いき凄まじく　　槍やりのきつ先さきハイハイハイ

竝ならべて進すすみ來きたるとも　　如い何かで恐おそれむ益ます良ら雄をの

吾われ等らが腕うでには骨ほねがある　　日やま本と魂だましの生き粹つすと

選よりによつたる神かむつ司かさ　　天てん下かは如い何かに廣ひろくとも

吾等に敵するものあるか
坂を登る時重寶な

名馬も困る下り坂
足手纏ひと知りながら

曳いて往かねばハイハイハイ
大野ヶ原を渡れない

右守の司の手下等は
神出鬼没ドツコイシヨ

木の葉の下に隠れ居て
吾等一行を散々に

艱ませくれむとハイハイハイ
固唾をのんで待つぢやらう

假令數萬の敵軍が
押し寄せ来る事あるととも

三五教にて學びたる
善言美詞の言靈を

ハイハイハイハイブウブウ
エ、こん畜生臭いわい

後から風の吹く時に
さうやられては耐らない

些は行儀を知るがよい
セーラン王のお供だぞ

無禮極まる畜生だな
ハ―ハ―ハ―ハイ アイタツタ

高い岩根に躓いた
皆さま用心なされませ

其處らあたりに轉倒て居る
石の車に乗つたなら

馬諸共うまもろともに千仞せんじんの谷間たにまに忽たちまち顛落てんらくし

再びふたたび此世このよの明あかりをば見みられぬやうになりますぞ

ハハハハハハドウドウドウお蔭かげで難關なんくわん踏ふみ越こえた

馬うまの畜生ちくじやう喜よろこべよこれから先さきは歩あるきよい

俺おれも面白おもしろなつて來きた人の一ひと生いっしやうと云いふものは

恰度ちやうど此山このやま渡わたるよなハイハイハイハイものだらう

一寸ちよつと目放めばなしたときはハイハイ忽たちまち失脚しつぎやくし

世よの落人おちびととなり果はてて世界せかいの奴やつに卑さげしまれ

ハハハハハハ牛馬うしうまに踏ふまれにやならぬやうになる

さはさりながら人間にんげんが何程なにほどあせつて見みたところで

其力そのちからには限かぎりある無限むげんの神力しんりき備そなへたる

ハイハイハイハイドウドウドウ尊たふとき清きよき神様かみさまの

攝理せつりのもとに任まかすより仕様しやうもやう模様も無ないものぞ

あゝ惟かむながらかむながら神々かむながら々々御靈みたま幸さちはへましまして

神かみにしたが従したがふ吾々われわれを
 厚あつく守まもりてハイハイハイ
 イルナの都みやこへ恙つつがなく
 進すすませ給たまへと願ねぎまつる
 ドツコイドツコイ ドツコイシヨ
 道みちも段々だんだん廣ひろくなり
 小石こいしも少すくなうなつて來きた
 七なな轉ころび八やおき起おきの苦くるしみも
 漸やつやく越こえた下くだり坂ざか
 右うもり守かみの司かみの醜しこ靈だまを
 直日なほひの靈みたまに言こと向むけて
 勝かち鬨どき擧あぐるも目まのあたり
 あゝ勇いさましし勇いさましし
 〇

と歌うたひつつ漸やつやくにして一いつ行かうは峠たうげの麓ふもとに下くだりついた。
 谷たにを流ながる清しみづ水づに喉のどの乾かわきをいやし、暫しばし休きう憩けいの上うへ再ふたび馬ば上じやうの人ひととなり、一いち同どう
 轡くつわをならべて鈴すずの音ねも勇いさましく、木こ枯がら荒らすぶ大おほ野の原はら、暴ほう虎こ馮ひ河ようの勢いきほひにて、都みやこをさし
 て驅かけりゆく。

(大正一一・一一・一四 舊九・二六 加藤明子録)

第二篇 戀海慕湖

第五章 戀の罖（一一三〇）

イルナの都の神館の奥の間には、黄金姫、清照姫、セーリス姫の三人鼎坐して、ヒソビソ話に耽つてゐる。

「ユーフテスが甘く使命を果して歸るだらうかなア。カールチンの姿を見る迄は、何とはなしに心許ない感じが致します。清照姫、大丈夫だらうかなア」

「お母アさま、そんな御心配は要りませぬ、キツと右守司は宙を飛んでやつて來ますよ。前以て怪しき秋波を私に送つてゐましたもの、メツタに外れっこありませんよ。せぬワ、オホ、」

「さうだらうかな、何時そんな微細な所迄看破しておいたのですか、まだ一度より御會ひになつてゐないぢやないか」

「一度會うても二度會うても、カールチンの顔には變化はありますまい。どうも怪しい目付でしたよ。餘程いいデレ助ですわ、オツホ、」

「油斷のならぬ娘だなア。そんなことを云つて本當にお前の方から何々してるのではあるまいかな。年頃の娘を持つと、親も氣が揉めますワイ。オホ、、、と吹き出して笑ふ。

「お母アさま、私だつて女ですワ、異性の匂ひを嗅いでみたい様な心もたまには起りませぬワ、オホ、、」

「何とマア貴女等母子は氣樂な方ですな、娘が母親を掴まへて惚氣るといふ事がありますか、前代未聞ですワ。清照姫様はさうすると、貰ひ子と見えますなア」

「ハイお察しの通り、龍宮の一つ島で拾うて來ましたお轉婆娘でムいますよ。今こそ斯うして宣傳使になつて眞面目な顔をして居りますが、随分拾つた時分は、此育ての親を手古摺らしたものですよ。蛇が食ひたいの、蛙が食ひたいのと申しましてなア、丸で雉子の様な娘ですワ」

「雉子だの、友彦だのと、それ丈は言はぬやうにして下さい、顔が赤うなります

ワ

「顔が赤うなる丈、まだどこか見込がありますなア。母もそれ聞いてチツとばかり安心しましたよ。カールチンも定めて、お前さまの口車にキツと乗るでせう。早うやつて来ると面白いのだがなア」

セーリス「ユーフテスを使にやつたのですから、キツと直に見えますよ。あの男も中々抜目のない人物ですからなア」

黄金「あなたもユーフテスさまに餘程執着があると見えますな。どうぞ本當にならぬやうに願ひますよ。様子を考へてると、何だか怪くてたまりませぬワ」

「あなたの慧眼にさへ怪しく見える位でなければ、あの男が如何して擒になりませう。私も随分凄腕を持って居りませうがなア。神様に何だかすまないやうな

氣が致しますけれど、之も忠義の爲だから、許して下さいさるでせう」

清照「セーリス姫様の上手な行方には、私も感服して居ります。到底私なんぞは足許へも寄せませぬ。爪の垢でも煎じて頂きたいものですな」

かく一生懸命になつて馬鹿話に耽つてゐる。そこへチガチガと跛をひきながら

やつて来たのは右守司であつた。セーリス姫は何とも言へぬ優しみを面に浮べ、優しい聲で、

「ア、貴方は右守司様、よう来て下さいました。大變お待ち申して居りましたよ」
「承はれば、ヤスダラ姫様は少しく御氣分が悪いとのこと、其後の経過は如何で
ムいます」

「ハイ有難う。御覽の通り、此様に元氣にお成り遊ばしました。貴方がお越し下さるに相違ないと、覺束ながら都合點して、姉さまに申上げた所、不思議なことには大病はケロリと忘れた様な顔をして、ニコニコと何が嬉しいのか知りませぬが、勇んでゐらつしやるのですよ」

「それは何より結構でござる。イヤ、ヤスダラ姫様、先日は偉い御無禮を致しました。どうぞお心易う御願致します。少しくおかげんが悪かつたさうですな」

清照「ハイ、有難うムいます。何だか知りませぬが、貴方のことを一寸思ふと一寸悪くなり、ヤツと思ふとヤツと悪くなり、或は一寸よくなつたり、又大變によくなつたり致しますのですよ。私の身魂はどうやら貴方の身魂と合つてる様な心

持が致します。本當に妙な鹽梅ですワ」

「ヒヨツとしたら、前世に於て身魂の夫婦だつたかも分りませぬな。私も何だか貴女のことを思ひ出すと、氣が變になつて堪りませぬワ。エツへ、へ、へ、」

セーリス「モシ右守さま、ハンケチをお使ひなさいませ、何だかおチヨボ口の横の方から、瑠璃の玉のやうな物がしたたつてゐるぢやありませんか」

「これは私に取つては非常な神聖にして且貴重な物ですよ。私のヤスダラ姫さまに對する隠しても隠しきれぬ喜びの露ですからなア。エへ、へ、へ、」

と目を細くし、現在其場に黄金姫が六ヶしい顔をして控へてゐるのも氣がつかず、清照姫にのみ視線を集注してゐた。黄金姫は右守司の視線を避けて漸く次の間に姿をかくし、ヤツと胸を撫でおろした。

「モシ姉さま、私がここに居つても御邪魔にはなりませんまいかな」

「姉の處に妹が居るのに、何が邪魔になりませう。姉妹同士だから、他人に言へないことでも、氣を許して話せるぢやありませんか」

「さうですね。さう云つて下されば、私だつて嬉しいですよ。併し貴女、右守司

様と何か秘密の話が
ありでせう。一寸氣を利か
しませうか、あの粹を利か
して別席致しませうかなア」

「決して決してお氣遣ひ
下さいますな。秘密のあら
う道理はございませぬから、
私も申上げたい事は赤裸々
に申上げますから、ヤスダ
ラ姫様もどうぞ遠慮なく御
心中をお話し下さいませ」

清照姫はワザとツーンとして、

「私は別に右守さまに何も申
上げる事は無いませぬワ。女
の身を以て奥さまのあ
る御方に、内證話をしては濟
みませぬからなア」

セーリス姫は思ひ切りジラ
してやらうと思ひ、

「さうだつて姉さま、あなた
の心と口と違つてゐるでせう。
私がゐますと又大病が
起ると互の迷惑ですから、暫
らく御免を蒙ります」

「ホ、甘いこと仰有います
こと、ユーフテスさまがあ
なたの居間に待つてゐら
れるものだから、氣が氣で
ないのでせう」

「あなただつて、私がここに
ゐると氣が氣ぢやあります
まい。思へば同じ女氣の、

男戀しき秋の空、顔に紅葉の唐紅、とめてとまらぬ紅葉の、色……とか云ひましてなア、言ふに云はれぬ、誰だつて秘密はありますワ。それなら姉さま、一寸往つて來ます。どうぞシツポリとお楽しみ遊ばせ。なア右守さま、あまり御氣分の悪なる話ぢや御座りますまい、オホ、ハ、ハ、ハ、

カールチンは鼻をビコつかせながら、
「左様々々、客と白鷺、立つが美事、暫くユーフテスさまと、郊外の散歩でもなさつたら面白いでせう」

「右守さまのイヤなこと、そんな粹を利かして貰はなくとも宜しいワ。何と云つても自由結婚の流行する世の中ですもの、そんな事は如才のある私ぢや御座いませぬ。なア姉さま、古い道徳に捉はれてゐる連中の様に、吾身の一生一代に關する夫婦問題まで、無理解な親に干渉されちや堪りませぬからなア。それなら右守さま、ユーフテス……イエイエ自分の居間へ暫く下りますから、ゆつくりとお話を遊ばしませや。そしてよい結果を齎して、私にお目出度うといふ様にして下さいませ」

「兔も角、惟神ですからなア」

斯く云ふ所へユーフテスは舌を切り、鯉の邊りまで膨らせながら走り來り、

「あゝ、あなたは、う右守さまでせう、あゝ餘りぢやムいませぬか。人をふみこ

かして先へ出て來るとは。コ、コレ、セーリス姫……どの、こんな無情な人は、

末が恐ろしいから、姉さまが何と仰有つても、あんたが水を注さねば……なりま

せぬぞや。清……オットドツコイ、ヤスダラ姫様にお氣の毒ですから」

セーリス「ユーフテス様、其お顔はどうなさいました。チツと變ぢやありませんか

「ミ、道でぶつ倒れ、シ、舌をかんで、コ、此通り、ハ、腫れました、イ、痛く

て堪りませぬ」

「コリヤ、ユーフテス、何と云ふ無禮なことを申すか。俺が、そして何時貴様を

踏んだか」

「誠にス、濟みませなんだ。セーリス姫は、私の豫約濟だから、滅多に秋波を送

るやうなことはなさらぬでせうな。何だかチツと様子が變だから……ワ、私もキ、

氣が揉めますワイ」

「ワハ、ハ、ハ」

清照「オホ、ハ、ハ」

「マアいやなこと、ユーフテスさま、サア私の居間へおいでなさいませ。私が介抱して直して上げませう、嬉しいでせう」

とワザとに意茶ついて、右守の戀を沸きたてようとしてゐる。ユーフテスはいい氣になり、姫の肩に凭れかかり、ヒヨロリ ヒヨロリとこの場を立つて、セーリヌ姫の居間へ伴はれ行つてしまつた。

後にカールチン、清照姫は互に顔を見合せ、手持無沙汰な様子で黙り込んで了つた。カールチンは姫の發言を何時迄待つても口切りがないので、とうとう劫を煮やし、矢庭に飛付く様にして、顔をそむけながら、清照姫の柔かい手を岩のやうな固い手でグツと握つた。清照姫は、

「エー」

と一聲ふりはなす途端に、ヒヨロ ヒヨロ ヒヨロとカールチンは一閒ばかり、

後に尻餅をつき、

「あゝコレコレ、ヤスダラ姫殿、女の身のあられもない、そんな亂暴なことをするものぢやありませんぞ」

清照姫は恥かしさうな風をして、

「それでも恥かしくてたまりませぬワ、モウこらへて下さいな、お頼みですから」

「ワハ、、、、流石は女だなア、そこが尊い所だ。矢張ウブなものだワイ。生れが違ふとどこもなしに床しい所がおりなさる、ウフ、、、、」

と言ひながら、今度は姫の背後より兩手をグツと肩にかけ、抱き締めようとすのを、清照姫は、カールチンの兩腕をグツと取り、ウンと力を入れた拍子に體をすくめた。カールチンは負投を喰つて一聞ばかり向ふへ飛び、床柱に後頭部を力チンと打ち、

「アイタ、、、、コレコレ姫さま、何といふ手荒いことをなさるのだ。何時の間にも柔術を覚えましたが、天晴な御手際だ。ヤア感心々々」

「餘り無禮な事をなさいますと、私は承知致しませぬぞや」

「何と偉いヒステリックだなア。如何したら御機嫌がとれるかなア。まてまて、姫の心の奥底を測量もせず無暗に相手になつて、はねるのは當然だ。惚切つた男にからかはれると、却て嬉し驚きに肱鐵砲をかまし、後から後悔する女が、間々あるものだ。姫もヤツパリ其傳だなア」

と思はず知らず小聲で囁く。清照姫は可笑しさを恠へて、

「右守さま、何と仰有います。私は決してヒステリックぢやありません。此通り、ビチビチ肥えとるぢやありませんか。何だか知らないが、身魂が合はないと見えまして、守護神が怒つて仕様がムいませぬワ。チツと此守護神に鎮魂でもして歸順するやうに言ひきかして下さいませぬ。本當に私困つちまひますワ」

「あゝそれでよく分かりました。さうすると貴女の肉體はカールチンに對し、別に嫌忌の情をお持ちになつてるのぢやありませんか」

「ハイ」

「本人の肉體さへ承知なら、守護神位、何と言つた所で、物の數でもありません」
「ワイ」

と言ひながら、また又もや姫の手をグツと握る。清照姫はワザと聲を尖らし、

「妾はヤスダラ姫の副守護神、三五教の宣傳使清照姫でごきゝるぞよ。汝苟くも右守うもりの司となり、萬民を導く身みであらながら其卑しき振舞は何事ぞや。容赦は致さぬぞ。

今其方を投げつけたのは、此清照姫の靈がしたのぢや。決してヤスダラ姫の所爲ではない程に、誤解をせぬやうにしたがよからう。清照姫は最早此肉體を立去る程に、後は其方の自由じいうに致したが宜からうぞや。ウンウン」

ドスンと飛上り、清照姫は「おこり」のおちたやうなケロリとした顔をして、カールチンの顔を打眺め、

「ヤア貴方は戀しい慕はしい右守さまで御座いましたか、能うマア御多忙な職務をすてて、妾の願を叶へて御出で下さいました、あゝ嬉しう御座います。どうぞ不束な私、お見捨なく末永く可愛がつて下さいませ」

と右守の膝に頭をなげつけ、首を左右にふつて嬉し泣の眞似をして見せる。カールチンは悦に入り、

「ウツフ、フ、フ、イヤ姫、心配なさるな。其方の事なら、如何なることでも吾力

に叶ふことならば、叶へて進ませう。どうぞカールチンも今の心で何時迄も愛して下さいや」

となまめかしい聲で、目を細くして喋り出した。どこともなく、桶の輪がゆるんだやうな言葉遣ひである。

「ハイ有難うムいます。それなら此ヤスダラ姫の願は何でも聞いて下さいませうか」
「申すに及ばず、どんな事でも聞いて上げるから言つて見なさい」

「それなら申上げますが、決してお腹を立てて下さいませう。貴方も御存じの通り、セーラン王様は茲一ヶ月の後には萬事の準備を整へて、貴方様に後をお譲り遊ばすことに内定して居りますのは確です。さうすれば貴方は右守司ではなくて、入那の都の刹帝利様、さう御出世を遊ばした時は、こんな卑しき女は體面に係はると仰有つて、キツと妾をお捨て遊ばすでせう。貴方が本當に私を愛して下さいのならば、ここで一つどこまでも捨てないと云ふ書付を書いて下さいませぬか」

「如何なる難問題かと思へば、そんな事か。ヨシヨシ、書いてやらう。何と書け

ばいいのだなア」

「私の要求は到底貴方には聞入れられますまい。いざと云ふ場合になれば、キツと拒絶なさるにきまつて居りますワ」

「武士の言葉に二言はない。女の一人位誑かつて何になるか。早く其要求の次第を細々と言つて見なさい」

「貴方が刹帝利にお成り遊ばした曉は、キツと妾を正妃にして下さるでせうなア」
「ウーン、そりや、せぬでもないが、私にはテーナ姫といふ女房があるぢやない

か」

「其テーナさまは、貴方が右守司としての奥さまでせう。決して刹帝利の奥さまではムいますまい。刹帝利の奥さまには誰をお選びですか。ヤツパリ依然として古いのを御使用遊ばしますか。それでは折角貴方が一切の規則を革新しようとなさつても、城内の空気を新しくする事は出来ずまい。能う考へて御覽なさい。バラモン教の大教主大黒主の神柱は、永らく共に苦勞を遊ばした糟糠の妻を放逐し、新規蒔き直しの若い美はしい石生能姫様を正妃と遊ばしたぢやムいませぬか。

大黒主様でさへも遊ばしたことを、貴方が出来ない道理はありますまい。サア何卒これからきめて下さい。おイヤですか。おイヤならばお厭とキツパリ言つて下さい。私にも一つ覺悟がありますから」

「成程さう聞けばそれも尤もだ。それなら貴女を正妃とすることを固く約しませう」

「有難うムいます、それなら今日から私はあなた様の誠の妻ですなア」

となまめかしい聲を出し、満面に笑を湛へて凭れかかった。其しをらしさにカールチンは骨も魂も抜けた如くグニヤグニヤとなつて了ひ、顔の相好を崩して平素のさがり目を一入下げ、聲の調子まで狂はしながら、

「ウンウンよしよし、お前の云ふことなら、命でもやらう。ホんに可愛い奴だなア、エへ、へ、へ、」

「それなら妾に一つの願がムいます。御存じの通り、最早刹帝利の授受は圓滿解決の曙光を認めてゐるので、大黒主様の軍隊を借用するのはお止めになつたら如何ですか、何程圓滿解決とは言ひながら、カールチンは刹帝利の位を奪は

む爲ために、大黒主様おほくろぬしさまの軍隊ぐんたいを借用しやくようして脅迫けうはくしたといはれては末代まつだいまでの不名譽ふめいよ、又また國民一般こくみん いっぱんに對たいしても治政上ちせいじやうたいへん大變たいへんな障害しやうがいとなるぢやありませんか。どうぞ妾わたしの御願おねがひですから、一時いちじも早く早馬使はやうまつかひをハルナの都みやこにさし向け、軍隊ぐんたいの派遣はけんを斷ことわつて下さくだいませ。大黒主様おほくろぬしさまだつて、近國きんごくに動亂どうらんが起おこつてゐるのですから、大變たいへんな御迷惑ごめいわくでせう。一層いつそうの事こと、貴方あなたの軍隊ぐんたいを全部應援ぜんぶおうえんの爲ためお差向けさしむになつたならば、貴方あなたの武勇ぶゆうは天下てんかに轟とどろき又大黒主様またおほくろぬしさまのお覺おぼえはますます目出度めでたく、遂つひにはハルナの都みやこの後あと繼つぎにお成なりなさる端緒たんちよを開ひらくといふものです。これ位の決斷けつだんがなくては到底たうてい駄目だめですからなア」

「成程なるほどさう聞きけばさうだなア。それなら一先ひとまづ吾館わがやかたへ立歸たちかへり、早馬使はやうまつかひを走はしらせて、軍隊ぐんたいの派遣はけんを御辭退ごじたい申上まをしあげ、味方みかたの勇士ゆうしをして、殘のこらず大黒主様おほくろぬしさまの爲ために應援おうえんさせよう。ヤア、ヤスダラ姫ひめ、又またゆつくりとお目めにかからう。キツと明日あすは早朝さうちうから登城とじやうするから、安心あんしんして待つてゐるがよい。左守殿さもりどのへも其方そちから宜よろしく言いつて下さい。私わたしから云いふのは何なんだか都合つがふが悪い様やうだから」

「父ちちの左守さもりは最早もはや妾わたしの切せつなる戀こひを看破かんぱし、夜前やぜんも嚴きびしく膝詰ひざつめ談判だんぱんを致いたしました故ゆゑ、

命いのちをかけて、いろいろと陳辨ちんべんしました所ところ、ヤツと得心とくしんして呉くれまして……流石さすがは俺おれの娘むすめだ。よい所ところへ氣きがついた、お前まへがさうなつてくれれば、右守司うもりのかみとの暗闘あんとうもこれでサツパリ解とけるだらう……と喜よろこび勇いさんで別わかれた位くらいですから、父ちちの方は決けつして御心配ごしんぱいくださいますなや」

「ヤスタラ姫殿ひめどの、お名残なごり惜をしいが、明日あす又またお目めにかからう」と云いひながら、滴したたる涎よだれをソツとたぐり、イソイソとして己おのが館やかたへ立歸たちかへるのであつた。後あとに清照姫きよてるひめは歸かへり行く姿すがたを、首くびを伸のばして眺ながめてみたが、何時いつの間まにやら姫ひめの首くびは三みつ四よつ縦たてに動うごき、赤あかい舌したまで「はみ」出だして居ゐた。

（大正一一・一一・一四 舊九・二六 松村眞澄録）

第六章 野人やじんの夢ゆめ（一一・三一）

カールチンは吾館わがやかたの奥おくの間に只ただ一人ひとりニコニコしながら戀こひの瞑想めいさうに耽ふけつてゐる。

そこへやつて来たのはユーフテス、セーリス姫の二人であつた。

「右守さま、最前はようこそ御登城の上、姉にお會ひ下さいまして、誠に有難う御座ります。貴方がお歸り遊ばしたその後で姉も非常に気分がよくなつたと申し、それはそれは偉い御機嫌でムります。就いては姉の申しますには、男心と秋の空、如何變るやら心許ない。右守の司様に、も一度お目にかかる迄は安心ならぬ。もしや奥様に感づかれ遊ばして、種々と御争ひの結果、お心變りをなされはすまいかと申しまして、妾に一遍御様子を伺つて来てくれと、まるで狂人の様に申しますの。貴方に限つてそんな水臭い方ぢやないから御安心遊ばせと何度云つても聞きませぬ。それ故夜中にも拘らず、御邪魔をいたした様な次第でムります。夜中御門前が通れないと存じまして、ユーフテス様について来て頂きました」

カールチンは小聲で、

「あゝさうでしたか、それは御苦勞でした。屹度心變りするなと姫に云つてやつて下さい。さうすりや安心するでせう」

と早くも女房扱にしてゐる。セーリス姫は可笑しさを堪へ、故意と濕っぽい聲を

出して、

「ハイ有難い其お言葉、妾の夫になつて下さつた様に嬉しうムりますわ、ホ、、、、」

「これこれセーリス姫殿、氣の多い事を云つちやなりませんぞ。貴女の最愛のユーテスが其處に居るぢやありませんか。大變に氣を揉んで、顔の色まで變へて居りますよ。アハ、、、、」

「ホ、、、、こんな口の腫れた、物も碌に云へぬ様な男、妾俄に嫌になつちまつたのですよ……と云ふのは表向き、ねえユーテスさま、貴方、私の心の中はよく知つてゐますね。人の前でさう惚氣も云へませぬからな」

「ユーテスは嬉しさうな顔して、ウフ、、、」

と笑ふ。

「あのマア好かぬたらしい笑ひ様わいな。本當に嫌になつてしまふワ。如何して、こんな好かぬたらしい男が好きになつたのだらう。吾と吾心で判断がつかぬワ」

「これこれセーリスさま、あまりぢやありませんか。何か一つ奢つて貰ひませう。たつぷりとお惚氣を聞かされました」

「お惚氣はお互様ですわ。奢るだけは儉約を致しまして、爲替に願ひませうか。」

時にカールチンさま、奥様の處置は如何なさいましたの。それを承はらねば、姉が矢張り氣を揉みますから、なあユーフテスさま、さうでしたね」

「それ：：それが肝腎要の只今の御用ですわ。もし旦那様、如何になりましたか。屹度直様、何とか御處置を取られたでせうな」

「實の所、今日はマンモス、サモア姫に招かれて、テーナは未だ歸つて來ないのだ。然しながら出し抜けにそんな事云つたら、此際一悶錯が起るから、暫らく執行猶豫を願ひたいものだ。何れ折を見て甘くやる積りだから、ヤスダラ姫にもカールチンの心は大磐石心だから安心せよと傳へて下さい。それよりも姫の方に心變りのせないやうと此方から却て氣を揉んである位だ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

「好い男さまに生れると氣の揉める事ですな。妾の様なお多福の方が却て幸ひかも知れませぬわ。それでも世間は廣いもので、干瓢に目鼻をつけた様なユーフテ

又さまが秋波を送つて下さいますもの、お多福だつて、さう悲觀したものでやムりませぬな」

「あゝ何だか妙な気分になつて來ましたわい。貴女も氣が利きませぬな。ユーフテスの様な男をつれずに、何故姉さまをソツと連れて來ないのでですか。さうすれば何事も直に氷解が出來ますがね。矢張姉さまよりもユーフテスの方が宜いと思へますな」

「そりやさうでせうとも。何程姉さまが綺麗だと云つても、女同士世帶を持つ譯には行かぬぢやありませんか。何程ヒヨットコでも瓢箪でも干瓢さまでも蜥蜴の缺伸した様な男でも、夫とすれば、ヤツパリ鼻肩がつかますわ。オホ、々、々、」

「時にセーリス姫様、追つ立てる様で濟みませぬが、今に女房が歸つて來て感づかれては大變ですから、何卒ユーフテスと共に此處を立退いて下さいますまいか」

「はい、承知致しました。氣の利かぬ女だと思召すでせう。これが姉だつたら、そんな事滅多に仰有いますまいに。お多福はヤツパリ仕方がありませんわ。奥様がお待ち兼ねでせう。何卒御夫婦睦まじうお暮しなさいませ。姉も御親密な御夫

婦だと聞いたたら、嘸氣を揉みませう、いや喜びませう。誠にいけすかない女が参りまして濟みませぬでした。何卒神直日、大直日に見直し聞直して下さいまして、永當々々御鼻眞に願ひます」

「(東西屋口調) チヨン チヨン チヨン、えー今晚はこれで大切りと致しまして、又明晩は新手を入れ替へ、大序より大切りまで御覽に入れます。藝題は入那の城入那の城、登場役者は右守の司カールチン殿、ヤスダラ姫のローマンズの情味津々たる艶場をお目にかけますれば、近所合壁誘ひ合せ、賑々しく御觀覽の程を偏に乞ひ願ひあげ【よこ】奉ります。アハ、、、」

セーリス「ウツフ、、、」

「(義太夫)「右守は悠然として立上り、テーナ姫の館をさして、入りにける。後に残りし兩人は、四邊をキツと打見やり、互に手に手を取り交はし、ヤイノヤイノと意茶つく間もなく、表に聞ゆる人の足音、コリヤ叶はぬと、暗に紛れて逃げ失せたりチヨン」と云ふ所ですな。イヒ、、、」

カールチン「セーリス姫殿、又改めてお目にかかりませう」

と云ひすて足早に奥の間指して姿をかくした。二人は是非なく暗に紛れて館を出で、木枯烈しき野道をよぎり、城内指して歸り行く。

カールチンは二人に別れ、奥の大廣間に座蒲團を幾枚も積み重ね、「ばい」の化物然とすまし込み、頻りに首をかたげて時々堪へきれぬ様な笑を洩し、鼻糞をほぜくつたり、手の甲で齒糞を取つたり、眉毛の癖を直したり、首筋を撫で上げたり等して、俄に若やいだ気分になつて上機嫌で納まり返つてゐる。そこへマンモスに送られて歸つて來たのはテーナ姫であつた。

旦那様、今日は奥様に穢しい處へ御入來を願ひまして實に光榮で御座いました。サモア姫も大變に満足致しましたと、旦那様へお禮を申上げて呉れよと申しました。今日はツイにない御機嫌なお顔を拜し、マンモスに於ても恐悦至極に存じます」

「マンモス、よう送つて來てくれた。もう少し遅くても構はなかつたになあ」

テーナ姫は不機嫌な顔をして一杯機嫌を幸ひ、カールチンの前に進み出で矢庭に胸倉をグツと取り、

「これ、旦那さま、薬罐老爺さま、もちつと長くともよいとは、そりや何と云ふ事を仰有いますか。大方貴方は妾の歸つて來るのがお氣に入らぬのでせう。二三日前から、何だかソワソワして落着かぬ風ぢやと思つてゐましたが、到頭本音を吹いたぢやありませんか。ツイ二三日前まで妾が一息の閒居らなくても八釜しく仰有つただぢやありませんか。貴方は何か外に増す花が出來たのでせう。いやもの云ふ花を手折つて來たのでせう。サア今日は何處迄も調べ上げねばおきませぬぞ。女房は手の下の罪人だと思つて何時も馬鹿にしてゐなさが、もう私も今日は了簡しませぬ。さあ白状しなさい、男らしう」

と云ひながら力限り襟髪をとつて前後にシヤクリまはす。

「アハ、々々、恠氣も宜い加減にしたが良からうぞ。十九や二十の身ぢやあるまいし、四十女の姥櫻の分際として、その態は何だ。あまり見つともよくないぢやないか」

「雀百まで雄鳥を忘れぬと云ふぢやありませんか。四十女がいやなら、元の十七にして返しなさい。お前さまに嫁づいて年をとらされたのだから、元のスタイル

にさへして貰へば何時にても歸りますわ。サア何處で何奴と意茶ついて来た。白状しなさい。實の處は今日マンモスに招かれて行つたのも、お前さまの祕密を探る爲めだつた。隠しても駄目ですよ。何もかも皆ユーフテスやセーリス姫のドスベタの取持ちでやつて居る事はチャンとマンモスに探偵がさしてあるのですよ。

あまり人を盲目にしなさるな。サア之でもお前さまは知らぬと云ひますか

何と偉い權幕だな。まるで狂人の様ぢやないか

良妻賢母も夫の仕打が悪いと、こんなになるのですよ。權幕が荒くなつたのも

狂人になつたのも、何かの素因がなくてはなりませんまい。あゝ残念や、くゝゝゝ

口惜しやな。こんな事と知つたなら、何故二十年も昔に命までかけて戀慕うて居

つたキユールさまに、添はなかつたのだらう

と燒糞になつて恪氣の角を生やし、襖や疊や其處邊の道具にあたり散らす。忽ち

箆笥は顛覆する、襖は倒れる、土瓶は腹を破つて小便を垂れる、火鉢は宙に舞ふ。

座敷一面灰煙が濛々と包む。手も足もつけられなくなつて了つた。

マンマンマン　モスモスモスもすこし待つて下さい。奥さま、さう腹を立てち

やお身體からだに障さはります。まだ確たしかなことは見届みとどけてないので、さう早はやくから豫よか行演習うえんしふをやられちや、旦那様だんなさまは申まをすに及およばず、マンモスまでが忽たちまち迷惑めいわくを致いたします。先まづ先まづお鎮しづまりを願ねがひます」

カールチンはマンモスをハツタと睨ねめつけ、聲こゑを震ふるはせて、
「こりや、マ、マ、マ、左様さやうな不届ふとどきな事ことを申まをして右守うもりの館やかたを攪亂かくらんせむとするのか。不忠不義ふゆうふぎの癡しれ者奴ものめ、今日けふ限かぎり暇ひまを遣つかはす。トツトと出でて行ゆかう」

「これカールチンさま、マンモスが居あると大變たいへんに御都合ごつがふがお悪わるいでせう。序ついでに妾わたしも此處ここに居をりますと貴方あなたの御都合ごつがふが嘸さぞお悪わるう御座ございませう。妾わたしはこれから御免ごめんを蒙かうむります。何程なにほど貴方あなたに棄すてられても、決けつして難儀なんぎは致いたしませぬ。廣ひろい世界せかいに女をんなの廢すたり物ものはありませぬぞや。男をとこ「やもめ」に蛆うぢが湧わきませぬぞえ。大おほきに永々ながなが御世おせ話わになりまして。何卒どうぞ鬼薊おにあざみの様やうなお方かたと末永すえながうお添そひなさいませ。これマンモス、捨すてる神かみがあれば拾ひろふ神かみもある。妾わたしの財産ざいさんだつて、云いふと濟すまぬが、旦那様だんなさまより倍ばい以上いじやうもあるから心配しんぱいなさるな、屹度きつと養やしなうて上あげますぞや。えーえー、こんな所ところにようも二十にじふ年ねんも居をつた事ことだ」

と足で疊を蹴り立て髪ふり亂し、恥も外聞も構はばこそ、オンオンと狼泣きしながら館を後に何處ともなく姿を隠した。

後見送つてカールチンは、さも嬉し氣に肩を聳やかし、頤をしゃくり獨言を云つてゐる。

「アハ、ハ、ハ、都合の好い時には何處までも都合の好いものだな。如何して追放り出さうかと、そればかり思案してゐたのに、自分の方から飛び出すと云ふのは、何したマア都合のいい事だらう。あれ丈亂暴して行つた以上は、よもやテナも歸つて来る考へぢやあるまいし、俺だつてあれだけ踏みつけられた女を、又ノメノメと家において置く様な事では、右守の司の威勢も空つきり駄目になつて了ふ。もう何人が仲裁に這入つても聞く必要はない。エへ、ハ、ハ、ハ、福の神の御入來、貧乏神の御退却、實に恐れ入谷の鬼子母神、そこへヤスダラ姫の辨財天が御降臨遊ばし、暫く天之御柱、國之御柱を巡り合ふうち、忽ち布袋さまと早變り、大黒天さまもお羨み遊ばすやうな圓滿な家庭を作り、假令女房の素性が毘舍門天でも美人でさへあれば、それで本能が満足するのだ。それさへあるにヤスダラ姫

は刹帝利の御種、こんな結構な事が、ようマア如何して勃發したのだらうかな。
南無大自在天大國彦大神、謹み敬ひ感謝し奉ります。あゝあ今日位目の上の瘤が
とれて愉快な事があらうか。エへ、へ、へ、もう誰に遠慮も要らぬ、天下晴れての
夫婦だ」

と獨言を獨り喜んでゐる。そこへ隣の襖をガラリと引き開け、髪ふり亂し、馮河
暴虎の勢で現はれたのはテーナ姫であつた。矢庭に首筋を剛力に任せてグツと抑
へ、

「えーえ、何もかも知らぬかと思つて蛙は口から白状致したな。もう此上はテー
ナ姫が死物狂、生首引き抜き地獄の八丁目まで擔げて行つて鬼に喰はしてやるか
ら左様思へ、如何ぢや如何ぢや」

と頭が「めしや」げ程疊に壓へつける。カールチンは苦しさに堪へかね、キヤ
ツと悲鳴をあげる途端に、

「これこれ旦那様」

と揺り起したのはテーナ姫であつた。

「旦那様、えらう魔まされてみましたな。しつかりなさいませ。えらい冷汗ひやあせが出てぬますよ」

「あゝあ、夢ゆめだつたか、ま、夢ゆめでよかつた。貴様きさまも餘程よほどひどい奴やつだな」

「何なんですか、妾わたしの夢ゆめを御覽ごらんになりましたの。へー、何かなに妾わたしに怒おこられるやうな事ことをなさつてゐられるので、そんな夢ゆめを御覽ごらんになつたのでせう」

「何なに、お前まへの武者振むしやぶりを夢ゆめに見みたのだ。それはなア随分ずぶん、白馬はくばの上うへに跨またがつて軍隊ぐんたいを指揮しきする勢いきほひは目覺めざましいものだつたよ。あれが俺わしの女房にようぼうかと驚嘆きやうたんのあまり目めが覺さめたのだよ、アハ、ハ、ハ、ハ」

「オホ、ハ、ハ、ハ」

(大正一一・一一・一四 舊九・二六 北村隆光録)

秋も漸く深くして 澄み渡りたる朝日影

東の窓をおしあけて 今日には心もカールチン

テーナの姫と諸共に 目出度い目出度い、お目出度い

鯛や鰹の生魚 夫婦はここにさし向ひ

水も漏らさぬ親しみの 色を表に現はして

酒汲み交す右守司 ホ口酔機嫌の高笑ひ

杯重ねてフナフナと 腰のあたりも怪しげに

戀（鯉）に迷うた目の光り どころはなしにキラキラと

月（杯）にさし込む朝日子の 眩きばかりヤスダラ女

女房となつてほしの空 天の河原を中にして

年に一度は七夕の 逢ふ瀬も清き戀の川

そしらぬ顔に杯を 女房にさせばテナ姫

さも嬉しげに頂いて これが別れの杯と

知らぬが佛神心 胸に一物たたみたる

右守うもりの司かみの布袋ほてい顔がほ やうやう右守うもりは顔かほをあげ

「テーナの姫ひめよ、吾妻わがつまよ いよいよ願望くわんまうじやうじゆ成就じゆの

時ときこそ迫せまり来きたりけり 吾われはイルナの刹帝利せつていり

汝なれは妃きさきの貴たかき身みよ 陰いんと陽やうとの息合いきあはせ

イルナの國くにを永久とこしへに 守まもるも嬉うれし松まつの御代みよ

待まつ甲斐かひあつて妹いもと背せの 夫婦ふうふの喜よろこび千代ちよの縁えん

勇いさみ喜よろこび舞まひ歌うたへ 梵天ぼんてん帝釋たいしやく自在じざいてん

大國彦おほくにひこの御惠みめぐみは 天津あまつ御空みそらも只ただならず

大海原おほうなばらのいと廣ひろく 惠めぐみの露つゆを遠近をちこちの

青人草あをひとぐさに垂たれ給たまふ 蒼生あをひとぐさは神かみの御子みこ

尊たふとき神かみの珍うづの宮みや 御子みこと宮みやとを預あづかりて

イルナの國くにに君臨くんりんし 堅磐かきはとぎは常磐とぎはに世よを守まもる

吾身わがみの上うへぞ樂たのしけれ あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはへましませよ 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも
汝と吾とは永久に 夫婦の仲も睦じく
八千代の椿優曇華の 花咲く春を樂しみて
神の大道に仕ふべし 梵天帝釋自在天
神の御前に眞心を 誓ひて祈り奉る

と一杯機嫌で、右守の司は妻のテーナ姫と共に酒酌み交しながら歌つて居る。テーナ姫は氣もさえざえしく笑を満面に湛へて、夫に杯をさしながら節面白く歌ひ始めた。

大梵天王自在天

大國彦の大神の

恩頼は目のあたり

現はれ來り吾夫は

イルナの國の刹帝利

四民の親と仰がれて

時めき給ふ時は來ぬ

妾も同じ妻司の

麻あさに連つれ添そふ蓬よもぎぞよ 君きみが高たかきにのぼりなば

妾わらはも高たかき位くらゐにつき 月つき日ひ竝ならべて永とこしへ久へに

天津あまつ御空みそらの星ほしのごと 群うしな集なはり居をる蒼たみぐさ生をを

いと平たひらけく安やすらけく 神かみのまにまに治をさめゆき

イルナくの國くにの生いき神がみと 名なを萬よろづよ世ところに轟とどろかし

尊たふとき神かみの御柱みはしらと なるぞ嬉うれしき夫ふう婦ふな仲なか

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々みたま 御靈みたま幸さちはへましまして

一日ひとひも早はやく片時かたときも 此この目的もくてきを委まつぶさ曲まに

立たてさせ給たまへと願ねぎまつる 思おもへば思おもへば先さきの世よで

吾等われら夫ふう婦ふは天あめ地つちの 神かみの御前みまへに身みを盡つくし

誠まことを盡つくせしものならむ 忽たちまち入いり來くる福ふくの神かみ

大黒おほくろ主ぬしは云いふも更さら 右守うもりの司かみの惠めぐみ比ひ須す顔がほ

小せうじ事じを苦くにせぬ布ほ袋てつ腹はら 命いのちも長ながく福げ祿ぼ壽あ頭たま

辨財べんざい天てんの御利益ごりやくで 珍うづの寶たからを積つみ重かさね

毘しゃもんでん
毘舍門天の武勇をば

四方の國々果てしなく

はつき
發揮しまつり天國の

目出度き様を地の上に

築き上ぐるも目のあたり

あゝ頼もしや頼もしや

かみ
神は吾等を守りまし

吾等は神を敬ひつ

しんじんわがふ
神人和合し敬愛し

名位壽富の大徳を

ちよよろづよ
千代萬代に永久に

授け給へよ自在天

もとつみおや
元津御祖の大神の

御前に畏み願ぎまつる

かむながらかむながら
あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

テーナ姫、日頃の大望もどうやら成功の機運に向つたやうだなア。今日は一人

酒の味もよいぢやないか。お前も前祝ひに今日は十分飲んだらよからう。エーン

左様でムいますなア、これと云ふのも日頃信ずる大自在天様の御利益でムいま

せう。何卒旦那様、貴方は御出世なさつても私を捨てない様にして下さいませや。

出世をなさればなさる程氣の揉めるは女の常です。お見捨てない様に呉れ呉れも

お願申して置きますよ」

「アハ、、またしてもまたしても、取越し苦勞をする女だなア。假令三千世界を手に入れるとも、お前と別れて暮すのなら、何の樂しみもないぢやないか。お前は二十年以上も添うて置いて、まだ私の心が分らぬのぢやなあ。エーン」

「旦那様が其お心ならば私は嬉しうムいます。その代りどんな事を仰有つても、決して背きは致しませぬわ。こんな親切な旦那様に背くやうな事があつては、大自在天様の御冥罰が恐ろしうムいますからなア」

「イヤ好く云つて呉れた。それでこそ俺の女房だ。併しお前に一つ相談があるが、キツト聞いて呉れるだらうなア」

「オホ、、聞いて呉れえなんて、そりや又何を仰有います。夫が女房に頼むお人が何處の世界にムいませうか。貴方のお望みとは何事でムいますか。何卒手取り早く仰有つて下さい、貴方のお頼みが一刻も早く聞きたうムいます」

「アハ、、實の處は是からお前にハルナの都まで出陣して貰ひ度いだ。夫の言葉をよもや背きは致すまいなア。エーン」

「ハテ心得ぬ其お言葉、今や大黒主様から五百騎の兵士をお送り下さる筈になつて居るぢやありませんか。それに又反對に此方から軍隊を連れて行くとは、どういふお考へでございますか」

「もはやセーラン王様は御決心遊ばしたなり、軍隊の必要は些しもないのぢや。

大黒主様は近國に騒動が起り、澤山の兵を御派遣になり、ハルナの城は守備全く

薄弱となつて居る。一方は三五教征伐に鬼春別を出し、一方はウラル教征伐に大

足別が出陣して居る。云はば國家多事の時だ。こんな時に戦争もないのに援軍を

乞ふとは全く濟まないぢやないか。さうしてカールチンは神力が足りないものだ

から、大黒主様から軍隊をかりて、非望を遂げたなど云はれては末代の恥だ。そ

れよりも此方より軍隊をさしむけ大黒主様のお手傳ひをしようものなら、吾々の

武勇は天下に轟き、大黒主様の御覚えも目出度う、吾々の守護する社稷は金剛不

壊の如意寶珠の玉のやうなものだ。エーン、テーナ、合點が行つたか」

「旦那様のお言葉に背く譯ぢやムいませぬが、さう樂觀も出来ませぬ。寸善尺

魔の世の中、何時どんな事が突發するか分つたものぢやムいませぬ。こればかり

は篤り御思案を願ひたいものです」

「英雄の胸中が女童に分つて耐らうか。オイ、テーナ、其方は夫の命令に反抗する積りか。ヨシ、ヨシ、それならそれで此方にも了簡がある。今日限り夫でないぞ、女房でないぞ、サア一時も早く此館を立ち去り召され。エーン」

「それは餘り非道なお言葉、あまりと云へば餘り水臭いぢやございませぬか」

「決して俺は水臭い事はない、其方こそ夫の言葉に背く冷淡至極の女だ。俺だつて長らく添うて来た女房を放り出すやうな約らぬ事は致し度くないのだ。お前が餘り頑固だから腹が立つたのだ。エーン」

「貴方は實際私を愛して呉れては居ませぬなア。どうも此ごろの御様子がちつと怪しいぢやムいませぬか」

「嫌ぢや、嫌ぢやで十年暮れた、到底々々で添ひ遂げた、と云ふ世間の噂もあるぢやないか、さう氣に入つた女房ばかりあるものぢやない。併し俺はお前に對して一度も嫌ないの字も思つた事はない。お前のやうなよい女房がどこにあらうか

と實は感謝して居るのだ。餘り可愛いものだから、つひこんな事を云うたのだ。これテーナ姫、堪忍へて呉れ、この通りだから」
と手を合して拜んで見せる。テーナ姫は俄に機嫌を直し、いそいそとして肩を揺ぶりながら、

「ホ、ホ、あのまア男らしいお顔だち、今更のやうに新枕の昔が思ひ出されて嬉し涙が零れます。それなら吾夫様、仰せに従ひハルナの都に参りませう」

カールチンは仕済したりと私かに打ち喜び、態と嚴かな口調で、

「ヤア天晴れ天晴れ、サアこれより汝はハルナの國に立ち向ひ、五百騎の應援軍を元へ歸し、大黒主様の御加勢に出陣致せ。吾は都に留まり、汝が凱旋の日を指折り數へて待ち暮らさむ。サア一時も早く」

とせき立てる。テーナ姫は部下の士卒を残らず集め、茲に三百餘騎を引き連れ、イルナの都を後にハルナの都をさして遠征の途に上る事となつた。

後にカールチンは、やれ、股の腫物が【うん】で潰れたと云ふやうな心持で、一人笑壺に入り、

「エへ、へ、へ、遠は右守さまだ。吾々の神謀奇策には疑ひ深い女房も、とうとう納得して出て行きやがった。エへ、へ、へ、三寸の舌鋒をもつて五百の應援軍を喰ひとめ、女房を動かして、又もや三百の兵士を大黒主様に差し向けた俺の力には、大自在天様だつて舌を巻き給ふだらう。あゝしてテーナ姫を陣頭に立たせた以上は、討死するは當然だ。ウフ、へ、へ、イヤもう、とんともう根つかから葉つかから面白くなつて来たワイ。サアこれから辨財天のやうな、ヤスダラ姫のお顔を拜見して来うかなア」

と思はず知らず大聲を出した。隣室に居たサモア姫は、すっかりカールチンの獨言を聞いて了ひ、目を丸くし舌を巻いて呆れかへつて居た。併し何喰はぬ顔をして足の運びも淑やかにカールチンの傍に進み、

「旦那様、お奥様が御出陣遊ばし、嘸お淋しい事でムいませうなア。私も女でムいます。併し乍ら、旦那様は本當に偉い方ですなア。ヤスダラ姫様がお待ち兼ねでせうから、一度お顔を拜ましてお上げなされましたらどうでせうか」

「これこれサモア、滅多なことを云ふではないぞ。ヤスダラ姫如きにこの方は用事はないわ」

「ホ、ホ、ホ、さうでせうとも、御用事はありませんさうな筈はありませぬわねえ」

「これサモア姫、今日は俺の出勤日だから登城して来る、留守を頼むぞ。さうして下僕共の行動を監督して呉れ」

「ハイ畏まりました。急いで又轉げないやうになさいませや。ホ、ホ、ホ、」

「エー、いらぬ事を云ふな」

とゆるゆる叱りつけ、供をも連れず唯一人、裏門より城内さして進み行く。

(大正一一・一一・一四 舊九・二六 加藤明子録)

第八章 亂舌(一一三三)

騙だまされ切きつたユーフテス さぞ今いま頃は勇いさみ立たち
 舌したをかみ切きり腮あこをうち 苦くるしい身みをも打うち忘れわす
 吾わが身の事ことを一心いつしんに 思おもひこらしてスタスタと
 家路いへぢを出いでて大道だいだうを 急いそぎて進すすみ來きたらむ
 又またもや大道だいだうに顛倒てんたふし 大おほきな怪け我がのなき様やうに
 梵天ぼんてん帝釋たいしやく自在じざい在天いてん 厚あつく守まもらせ給たまへかし
 ユーフもヤツパリ天地あめつちの 神かみの御水み火いに生うまれたる
 神かみの御子みこなり神かみの宮みや 妾わらはも憎にくしと思おもはねど
 セーラン王わうの御爲おんために 忠義ちうぎの犠牲ぎせいと心得こころえて
 心こころにもなき詐いつはりを 圖づうづう々づうしくも白晝はくちうに
 振舞ふるまひ來きたるぞ悲かなしけれ 天地てんちの神かみよ百神ももがみよ
 セーリス姫ひめの罪業ざいごふを 咎とがめ給たまはず速すみやかに
 許ゆるさせ給たまへ惟神かむながら 神かみの御前みまへにねぎ奉まつる』

と二絃琴に合はして淑やかに歌つてゐるのは、歌の文句に現はれたセーリス姫である。

廊下に足音を忍ばせながら、あたりを窺ひ、ソツと這入つて来たのはユーフテスである。瘦犬が臭い乞食の飯を嗅ぎつけたやうなスタイルで、負傷した舌を五分ばかりニヨツと出し、下唇の上に大切さうにチヤンと載せ、腰と首と互ちがひに振りながら、少しく屈んで、左右の手を妙な恰好にパツと廣げ、掌を上向けにして、乞食が物を貰ふ様な手つき可笑しく、

「モシ……………モシ……………姫さま」

と言ひ憎さうに口を切つた。セーリス姫は……………あゝ又嫌な男がやつて来た、暫く蟲を抑へて、一活動やらねばならぬ、何ほど嫌でも嫌さうな顔は出来ない。「いやなお客に笑うて見せて、ソツと泣き出す好きの膝」といふ事もある。ここは遺憾なく愛嬌を振りまくのが孫呉の兵法だ……………と敏くも心に決し、笑を十二分に湛へて、

「ユーフテス様、御怪我は如何で御座いますか、御用心して下さいませや。あた

え心配致しまして、昨夜も碌に寝なかつたのですよ。貴郎が此世の中に生存して居られなかつたら、あたえも最早社會に生存の希望はありませぬワ。ねえ貴郎、可愛いものでせう、オホ、お、お、恥し………

ユーフテスは之を聞いて頭のぎりぎりまでザクザクさせ、自由のきかぬ舌の側面から止め度もなく涎を迸りながら、慌てて袂で拭き取り、

「言ひにくさうに言ふ」お姫さま………有難う………お蔭様で………大した事は………ありませんから、マア、安心して下さい………至極………健全です。昨日は大變に痛みましたが、今日はお蔭で大ウツキがとまり、気分も餘程よくなりました

「本當にそれ聞いて、あてえ嬉しいワ。そらさうでせうよ、終日終夜、大自在天様に御祈願をこらしてゐたのだもの、貴郎の爲なら、假令あたえの命がなくなつても、チツとも惜しくないワネエ」

「そりや………有難いなア………お姫さまの………御精神が………そこまで………熱誠だとは………夢にも思はなかつたですよ。始めの内は何か、氣をひかれて

ゐるのぢやなからうかと、疑つてゐましたが……ヤツパリ疑ふのは……私の
心が汚いからでした……どうぞ、お姫さま、こんなつまらぬ男でも、ここま
も解け合つたのですから、どうぞ末永う可愛がつて下さい……其代りに、貴女
の爲ならば鬼の巣窟へでも、獅子狼の岩窟へでも、飛込めと仰有れば飛込みます。
猛獣の棲處は愚か、猛火の中でも水底へでも、御命令ならば……いやお頼みな
らば……何でも忠實に御用を承はりますワ」
「オホ、貴郎そんな叮嚀な事いつて下さると、あたえ、何だか他人行儀のや
うになつて氣が術なうてなりません。どうぞこれから、そんな虚偽の辭令は拔
きにして、あたえを女房扱ひに呼んで下さいねえ。そしておくれやしたら、あた
え、何ほ嬉しいか知れませぬワ。オホ、」
「時にお姫さま、否セーリス姫、喜べ、偉い事が出来たぞ。天が地になり、地が
天になる……と云ふ大事變だ。それもヤツパリ智謀絶倫のユーフテスとセーリ
ス姫との方寸から捻りだした結果だから、剛勢なものだよ、オツホ、。アイ
タ、、餘り笑ふと、ヤツパリ舌が痛いワイ。アーン」

「大變とは何ですか。早う言つて下さいな。あたえ、氣にかかつて仕様がありません。せぬワ。吉か凶か、善か悪か、サ早う聞かして頂戴」

と、目を細うし首を傾け腮を前へ突き出し、舌を右の唇の縫目へニユツと出し、色目を使つて見せた。ユーフテスは益々得意になり、十分に手柄話を針小棒大にやつて見たいのは山々だが、思ふ様に舌が命令を聞かぬので、もどかしがり、目をしばしばさせながら、

「天地が變るといふのは………それ、お前の心配してゐた、大黒主様の御派遣遊ばす、五百騎を「ぼつ」返す様になつたのだ」

「エ、いよいよ決行されましたかなア。さぞ清照姫さまも喜ばれる事だ、清照姫さまはヤツパリ偉いですなア」

「そらさうですとも、セーリス姫さまの………ドツコイ、お前の贗の姉になるといふ腕前だからなア、偉いと云へば偉いものだが、併しながら其八九分迄の功績は、ヤツパリ、ユーフテスとセーリス姫にあるのだからなア。何程智慧があつても、器量がよくても、一人で芝居は出来ないから、吾々夫婦は千兩役者と云つて

も………過言ではあるまい。アーン」

「オホ、正式結婚もせない内から、夫婦なんて言ふものぢやありませんよ。

もしも口さがなき京童の耳へでも這入らうものなら、ユーフテスの夫婦は自由結婚をやつたとか、セーリス姫はお轉婆の標本だとか、新しい女だとか言はれちゃ、互の迷惑ですからなア」

「それなら何と言つたらいいのだ。夫婦と言はれても、餘り氣が悪くなる問題ぢやあるまい。アーン」

「そらさうですとも、一刻も早く、互に夫よ妻よと意茶ついて暮したいのは山々ですワ。餘り嬉しうて、一寸「すねて」見たのですよ。オホ、」

「エ、肚の悪い女だなア。さう夫をジラすものぢやないワ」

「夫でも男でも、オットセイでも、ナットセイでも良いぢやありませんか。本當の私のオットセイになるのは、此廣い世界に貴郎丈ですワネエ。なつと千匹に夫一匹と云ひまして、擇捉島あたり澤山に棲息してゐる臘肭臍も、眞實は千匹の中、で眞のオットセイは只の一匹より居ないさうです。九百九十九匹迄は皆「なつと

せい】ださうですからな。アホツホ、

「なつとせい……なんて、そんな事は初耳だかなア、オットセイと「なつとせい」と何處で區別がつくのだらうかな」

「そりや確に區別がありますワ。ナットセイといふのは、人間でいへば【やくざ】男の事ですよ。婿えらみをした結果、どれを見ても帯には短し襷に長し、意中の夫が見つからない、さうかうする内に月日の駒は矢の如く進み、綻びかけた櫻の花は、グズグズしてゐると既に梢を去らむとするやうになつて来る。そこで慌て背となる人を俄にきめます。其時にどれを見ても、甲乙丙丁の區別がつかぬ、併し此男は鼻が高いとか、口元がしまつてるとか、目が涼しいとか、一つの氣に入る點を掴まへ出し、コレナツと夫にしようか……と云つて、女の方からきめるのが、所謂ナットセイですワ。オツホ、」

「さうすると、俺はナットセイの方かなア。それを聞くと餘り有難くもないやうだ。アーンアーン」

「貴郎はオットセイですよ。毛の皮は柔かいし、皮むいて首巻にしたつて大變な

高貴なものなり、皮になつても、女の首丈はきつと、ホコホコするといふ大事の
大事のオットセイですワ。どの男を婿に持たうかと、あたえも永らく調べてゐま
したが、あなたのやうな色の白い、目のパツチリとした、鼻筋の通つた、口元の
リリしい、カイゼル髯の生えた、背のスラリと高い、肌の柔かい、しかも智謀絶
倫と來てゐるのだから、オットマカセに喰へ込んだのだから、オット待つてまし
たといふ具合に、猫のやうに喉をゴロゴロならして飛付いたのですもの、眞の誠
のオットセイですワ。オホ、

「アハ、アハ、アハ、アイタ、何だか笑ふと舌が痛い、困つた事だ。有難い
なア」

「コレ文戀慕うてゐる女房ですもの、あなただつて、何もかも腹藏なく仰有つて
下さいますわねえ。夫婦の間といふものは、本當に親しいもので、生んでくれた
親にも見せない所まで見せたり、話さない事まで話すのですもの。夫婦は家庭の
日月天地の花ですワ」

「俺はお前の事なら、何でも皆秘密を明かしてやる覺悟だ。時に何だよ……五

百騎を差止めたばかりでなく、テーナ姫さまが三百餘騎の強者を皆引率して、ハルナの國まで行つて了つたのだから、カールチンの部下は最早一人も残つてゐないのだ。もう斯うなつちや、何程謀叛を企まうたつて、駄目だからなア。後に残つてる奴ア、目ツかちや、跛や聾、閒しやくに合はぬ奴ばかりウヨウヨしてるのだ。屈強盛りの豪傑連は、皆テーナ姫に従軍したのだから、之を一時も早く、清照さまに………報告して喜ばしたいものだ。アーン」

「ホ、ホ、そんな事ですか。それなら夜前私の許へチャンと無言靈話がかかりましたワ。清照姫様も既に既に御存じですよ。そんな遅い報告は駄目です。モチツト早く報告して貰はぬと、女房のあてえが清照姫様へ申上げて手柄にする譯には行かぬぢやありませんか」

「何分舌を怪我したものだから、舌が遅れたのだよ。それは惜しい事を【した】ものだ。ウツフ、フ、フ、此奴ア一つガツカリ【した】」

「オツホ、ホ、ホ、時に右守は如何して居られますか、随分御機嫌が良いでせうなア」
「ユーフテスは最前から餘り舌を無暗に使つたので、チツとばかり腫れて來たと

見え、

「ア、ア、ア、」

と言ひながら、手を擴げて不恰好な仕方をして見せて居る。

「オホ、まるで蠅螂が踊つとる様だワ。モウ一つ違うたら米搗バツタの手踊み

たやうですワ。あたえ、そんなスタイル見るの、嫌になつたワ。オツホ、」

「アーンアーンアーン、ウーウーウー、シシ舌が、オオ思ふよに、きけなくなつ

た」

セーリス姫は兩手を組み、鎮魂の姿勢を取り、心靜かにユーフテスの舌に向つ

て、

「一二三四五六七八九十百千萬」

と天の數歌を三四回繰返し祈願をこらした。不思議やユーフテスの舌は其場で腫

が引き、痛みもとまり、又もや水車の如く運轉し始めた。

「ヤア有難う、不思議の御神徳で輪轉機の破損が全部修繕したと見え、運轉が自

由自在になつて來ました。サア是から三寸の舌鋒を縦横無盡にふりまはし、懸河

第九章 狐狸窟（一一三四）

ユーフテスは外から呼んだ女の聲に不審の念晴れやらず、腕を組んで暫く「ウン」と溜息をついてゐる。外より以前の女の聲、

「もしもユーフテス様、セーリス姫で△います。這入りましてもお差支は△いませぬかな」

「差支がないとは申さぬ。二人もセーリス姫があつて堪るか。ば、ば、ば、化物奴、早く退却せい。ユーフテスには腕があるぞ」

「オホ、御兩人さまが密約御成立の間に、白首が参りましたは、嚙御迷惑でせう。然しながら、あたえは本當のセーリスですから、何と仰有つても侵入致しますよ」

「主人の許可もないのに無断で闖入すると、治警法嘘八百條によつて告發してやるぞ。それでも承知なら、闖入なつと亂入なつと、やつたら宜からう。アーン、オホン」

「何方か知りませぬが、何卒お這入り下さいませ。あなたも矢張セーリス姫さまで△いますか。妙な事もあるものですか」

「ハイ、有難う△います。同名同人のセーリス姫ですよ」

「こりやこりや女房、オットセイの俺に答へもなく、勝手に女を吾居間へ引き入れると云ふ事があるか。婦人道德をチツトは考へたがよからうぞ」

「オホ、よ、よ、ようそんな事仰有いますな。女の居間へ女が来るのが、何がそれ程悪いのですか。貴郎如何です、私一人の女の居間へ何時も二ヨコ二ヨコやつて来るぢやありませんか。外のセーリス姫さまが御入来になるのが不道德ならば、貴郎の方が餘程不道德ですわ、あゝもう貴郎の御面相が俄に怪體になつて来て、私は兔も角、腹の蟲が排日運動をやりかけました。國際問題の起らぬうちに早く退却して下さい。ねえ、オットセイのユーフテスさま」

「こりやこりや女房、何と云ふ暴言を吐くのだ。千年も萬年も添うて呉れと云つたぢやないか。心機一轉と云ふも實に甚だしい」

「手を翻せば雨となり、手を覆へせば風となる、君見ずや管鮑貧時の交、此道近

人すてて土の如し、オホ、、、

「女と云ふものは本當に分らぬものだな。八尺の男子を三寸の舌鋒で、肉を剔り骨を挫き、血を搾るやうな目に遇はしやがる。貴様は大方化州だらう。アーン」

「オ、、、貴郎も餘程頓馬ですな、開闢以來女は化物と云ふぢやありませんか。そんな譯の分らぬ様な野呂作では、婦人に對し彼是云ふ資格はありますまい。ねえ外からお出でやしたセーリス姫さま、どつちが化物だか分つたものぢやありませんか」

「どうせ化物ばかりの跳梁跋扈する世の中ですもの、このユーフテスさまだつてやはり化物ですわ。戀と云ふ曲者の魔の手に誑惑されて、三代相恩の主人の陰謀を殘らず相手方へ密告なさる様な世の中ですもの、百鬼晝行は現代の世相だから、如何ともする事は出来ません。是から二人の女が兩方から膏を搾つてあげませうか。女と云ふ字を二つ書いて眞中に男の字をはさむと嫩られるとか讀むさうですな。オホ、、、」

「男の字を二つ竝べて女を一字はさめると嬲るとか讀むさうですわ。何れ戀とか

鮎ふなとかに嫩なぶられてゐる天下てんかの色男いろをとこだから、黝なぶるのも嫩なぶられるのも光榮くわつえいでせう。サア遠慮ゑんりよは要いりませぬ。外そとのセーリス姫ひめさま、お這入はいり下ください」

「何が何なんだか狐きつねに魅つまされてる様やうだ。ハテ、如何どうしたら此眞偽このしんぎが分わかるだらうかな」

と頻しきりに首くびを捻ひねる。其間そのまに外そとの女をんなは襖ふすまをガラリと引ひき開あけ、轉こけ込こむ様やうにしてユーテスの前まへにドスンと音おとを立てて坐すわり込こんだ。其反動そのはんどうでユーテスは一尺いつしゃくばかり大だいの圖體づうたいを撥はね上あげられ、情だりよく力が餘あまつて二ふたつ三みつ餅搗もちつきの演習えんしゆをやつてゐる。

「これ、ユーテスさま、お怪我けがは如何いかがですか。あてえ、本當ほんたうに心配しんぱいしましたわ」

「こりやこりや女をんな、何を吐ぬかしやがる、セーリス姫ひめの眞似まねをしやがつて、馬鹿ばかにするな。そんな事ことで「ちよろまか」される様やうなユーさまぢやないぞ」

「ホ、ホ、ホ、已すでに已すでに騙だまされてゐるぢやありませんか。ユーさまの舌したが俄にはかに直なほつたのは何なんとお考かんがへです。本當ほんたうの人間にんげんなれば、さう即座そくざに神言かみごとを稱となへたつて直なほるものぢやありますまい。セーリス姫ひめぢやと思おもつて居ゐなされるのは、其實そのじつは狐こんこん々さまですよ。ねえセーリス姫ひめさま、さうでせう」

「お察さつしの通とほり狐こんこん々さまかも知しれませぬ。あたひ何なんだか肌はだに薄うすい毛けがモシヤモシ

ヤ生え出した様な気が致しますわ。オホ、、、、、イヤらしいわいの。こんな毛の生えたものを、それでも女房にしてくれると仰有る、涙もろい慈悲深い頓馬野郎があるのですからね。まるつきり女でも捨てたものぢやありませんわ。イヒ、、、、」

「こりやこりや、セーリス、到頭貴様は發狂しよつたな。オイ、ちつとシツカリして呉れぬかい」

「あなた、チツとシツカリなさいませや。あてえ今までセーリスさまになつて化けてみたのよ。ユーさまの睫の毛が何本あると云ふ事も、みんな知つてみますわ。そして氣の毒ながら、お尻の毛は一本もない様に頂戴しておきました。ウフ、、、、」

ユーフテスは俄に懐から手を伸し、尻に手をあて、尻毛の有無を調べて見て、指でクツと毛を引つ張つて見て、

「アイタ、、ヤツパリ毛は依然として蓬々たりだ。オイ、セーリス姫、憚りながら一本だつて紛失はして居ないぞ」

「オツホ、、、いつも肛門から糞出さして御座るぢやありませんか。フ、ーン」
「えー糞面白うもない。糞慨の至りだ。オイ、外から来た女、貴様は早く去んでくれ、俺の家内が貴様の邪氣にうたれてサツパリ發狂して了つた。アーン、さあ早く去なぬかい」

女は涙をホロホロと流し、悲しさうな聲で、

「これ旦那さま、否オツトセー様、チツト確りして下さいませ。あたいは本當のセーリス姫ですよ」

「これ旦那様、チツト確りして下さいや。あてえこそ本當のセーリス姫よ」
と右左よりユーフテスの袖に取りすがり、兩手を一本づつ握つて「ヤイノヤイノ」と言ひながら變つた方面へ力限りに引張る。ユーフテスの腕は關節の骨が如何か
なつたと見えて、パチンと怪しき音を立てた。

「アイタ、、、待つた待つた、さう兩方から腕を引張られちや男が立たぬぢやないか、いや俺の體が立たぬぢやないか。許せ許せ、色男と云ふものは叶はぬものぢや。何故かう女に惚れられる様に生れて来たのだらう。二人の美人に攻められ

て、判別も付かず、烏の雌雄を何うして識別し得むやだ。五里霧中に彷徨すると
はこんな事をいふのかな」

「ホ、ホ、ホ、五里霧中所が無理夢中ですわ。それも一理ありませう。エへ、へ、へ、
さあ後のセーリスさま、力一杯可愛い男を引張つて下さい。あたかも引張ります
から……」

「ア、ア、ア、アイタツタ、待った待った、待てと申さば、二人の女房、暫らく待ち
やいのう」

女「もしユーさま、両手に花、右と左に月と雪、貴郎も今が花ですよ。男と生れ
たからは一度はこんな事もなくては、この世に生れた甲斐がないぢやありませんか
か」

「何程、甲斐があると云つても、さう引張られちや腕がなくなるぢやないか。も
うもう女は懲り懲りだ。只今限り綺麗サツパリと断念する。さう心得たがよから
うぞよ」

「オホ、何と氣の弱い男だこと。僅か二人や三人の女に嫩られて弱音を吹

くとは見下げはてたる瓢六玉だな。さうだと云つて、一旦思ひ詰めたユーさまを如何して思ひきる事が出来ませうぞ。ねえ、後から御出でたセーリスさま、さうぢやありませんか」

「本當に意志の薄弱なユーさまには、あたかも啞然と致しましたよ。女にかけたら男と云ふ奴ア話にならぬ程弱いものですな。私だつて一旦約束したユーさまには如何しても離れませぬわ。今更別れる様な事なら、潔う鞆丸噛んで死んで了ひますよ。オホ、これユーさま、此中で一人は本眞物、一人は化物だが、どつちが本眞物が調べて下さい」

「どちらを見ても何處一つ變つた點がないのだから、俺は實は、その眞偽判別に苦しんでゐるのだ」

「それなら、その眞偽の分る方法を教へてあげませう。貴郎の頬邊を二人の女に抓らして御覽、痛さのひどい方が本物ですわ。何程よく似たと云つても、やはり妖怪は妖怪、肝腎の時に力がありませぬからね」

「うん、そりやさうだ。よい事を聞かして下さつた。それなら兩方の頬邊を一時

に抓つて見い」

「力一杯あてえも抓りますから、セーリス姫さまも抓つておあげやす。一二三つと云ひながら二人の女はユーフテスの兩方の頬を力一杯捻ぢる。

「おー随分痛いものだな。あんまり痛くて度が分らぬわい。どちらも同じ様な痛さだよ。オイも一つ氣張つて抓つて見い」

二人は顔見合せながら、又グツと抓る。

「いゝゝゝ痛いわい。あゝゝゝもういゝもういゝ、さつぱり分らぬ。意地の悪い、どつちも同じやうに痛いわい。こりやヤツパリ、先の嬢嘘つかぬと云ふから、前のが本當だらう。オイ後の奴、今日から暇をくれてやるからトツトと歸れ」

「いえいえ、何と仰有つても、これが如何して歸られませうか。姉のヤスダラ姫様に對しても合す顔がありません。お父様の前にも大きな顔して歸られませぬ。それなら何卒あなたの手にかけて殺して下さい。それがせめても貴方の御親切でムいます。オホゝゝゝ、」

「益々分らぬ様になつて來よつた。オイ一寸待つてくれ、兩人、之から手水を使

つて来て、沈思黙考せなくちや眞僞の審神が出来ないわ」

セーリス「あなた今まで活動なさつた事に就て最善を盡したと思つて居ますか。

或は横道を通つたとお考へにはなりません。それを一寸聞かして下さいな」

「縦横無盡に活動するのが智者の道だ。縦も横もあつたものかい。正邪不二、明

暗一如だ。兔も角善の目的を達しさえすれば、それが神様へ對して孝行となるの

だ。此ユーフテスは惡逆無道の右守の司の陰謀を探査して、王様の爲に獅子奮迅

の活動をやつてゐるのだから、決して悪い行動をとつたとは微塵も思つて居ない

よ。忠臣の鑑と云ふのは、天下廣しと雖も此ユーフテスより外にはないからな。

是から三十萬年の未來になると、晉の豫讓だとか、楠正成とか大石凡藏之助とか

が現はれて、忠臣の名を擅にする時代が来るが、今日では正に俺一人だ。此忠臣

を夫に持つセーリス姫は餘程の果報者だ。（義太夫）「女房喜べユーフテスは王

様のお役に立つたぞや……とズツと通るは松王丸、源藏夫婦は二度ビツクリ、

夢現か夫婦かと呆れはてたるばかりなり」と云ふ次第柄だ。ウツフ、ウツフ、ウツフ、

セーリス姫はユーフテスの横面を平手でピシャピシャと殴りながら、

「これユーさま、おきやんせいな。何をユーフテスのだい。好かぬたらしい」
女「イツヒ、、、それなら化物のセーリスさまは一先づ化を現はして退却致します。ユーフテスさま、目を開けて御覽、あてえ、こんな者ですよ」
と花も羞らふ様な美人が忽ちクレツと尻を捲り、ユーフテスの目の前につき出した。見れば眞白の毛が密生し、太い白い尻尾がブラ下つてゐる。ユーフテスは「アツ」と叫んで其場に顛倒した。女は忽ち巨大なる白狐と化し、セーリス姫に叮嚀に辭儀をしながら、ノソリノソリと此場を立つて何處ともなく姿を隠した。
「オホ、、、まアまア旭さまのお化の上手な事、斯うなると自分も白狐になつて見たいわ。どれどれユーフテスの倒れてる間に、一つ化けて見ようかな」
と云ひながら俄に鏡臺の前に坐り、狐の顔に作り變へ、ユーフテスの面部に清水を吹きかけた。ユーフテスはウンウンと呻くと共に起き上り、目をパチつかせてゐる。セーリス姫は狐に作つた顔をニユツと出し、
「これユーさま、氣が付きましたか。ホ、、、」
ユーフテスはセーリス姫の姿を見て二度ビツクリし、

「やあ此奴あ堪らぬ」
とノタノタノタと自分も狐の様に這ひ出し、長廊下をさして己が館へ逃げて行く。
(大正一一・一一・一五 舊九・二七 北村隆光録)

第三篇 意變心外

第一〇章 墓場の怪(一一一三五)

「イルナの都に名も高き
右守の司と仕へたる
吾は賢きカールチン
千思萬慮の其結果

バラモン教の大棟梁

大黒主のお見出しに

預かりまして今ははや

右守の司を尊しと

思ふた事も夢となり

左守や右守を使ふ身の

イルナの都の刹帝利

セーラン王の後を繼ぎ

時めき渡るも目のあたり

うれしき事が重なれば

よくも重なるものだなア

天女を欺く美貌持ち

ヤスダラ姫に慕はれて

思はず知らず顔の皺

俄にのびて来たやうだ

文珠菩薩の再来か

曾富戸の神の生宮か

何だか知らぬが俺は又

尊き知識があるだらう

古くなつたるテーナ姫

どうしてやるかと朝夕に

思案なげ首息を吐き

困りぬいたる折もあれ

ヤスダラ姫の忠告に

渡りに船と喜んで

テーナの姫に遙々と

軍を率ゐて遠國に

出陣せよと命ずれば

天下に武名を現はして

イルナの花と謳はれむ

あゝ面白しと勇み立ち

進み行くこそ嬉しけれ

定めしテーナは途中にて

敵の軍勢に出會し

奮戦苦闘の其結果

必ず討死するだらう

さうなりや俺の活舞臺

これから自由に開け往く

疊の古くなつたのと

居宅が焼けて女房が

死んだのは泣き泣き新しくなるものなりと聞く上は

ほんに嬉しい俺の胸

もはや女房に對しては

絶對氣兼はいるまいぞ

あゝ惟神々々

梵天帝釋自在天

神の御目に叶うたか

よい事ばかりが續々と

吾身を襲うて來たやうだ

それはさておき今頃は

ヤスダラ姫は首のばし

カールチンさまはなぜ遅い

心變つたのぢやあるまいか

何とはなしに氣がもめる

一時さへも千秋の

思ひがすると首のばし 案じて待つて居るだらう

エへ、へ、へツへ エへ、へ、へ イヒ、へ、ヒツヒイあゝぼろい

年をとつたと思へども 惚れた女の眼より

見た時や若く見えるのか ほんに合點のゆかぬ事

さはさりながらカールチン 色は黒ても跛でも

惚れた弱身の姫様の 心にうつるは天教の

山に在します日の出別 司の如くに見えるだらう

俺は矢張り女等に もてる男に違ひない

エへ、へ、へ、へ、エへ、へ、へ、へ 涎の奴めが知らぬ間に

俺に許しもうけぬ間に 勝手氣儘に流れよる

アハ、へ、へ、へ、面白 此奴また偉いエラしこぢや

右守の司も戀路には 話にならぬ呆け方

嗚や他人が見たならば 吹き出すだらうと思へども

そこがかはつた戀の路 唐變木には分らない

アイタ、タツタ躓いた

誰だか知らぬがスタスタと

向ふの方からやつて来る

もうよい加減に切り上げて

惚けの歌はやめようか

勿體なやと思へども

心猿意馬奴が狂ひたち

中々容易にや納まらぬ

ヤスダラ姫の事思や

思はず知らずドシドシと

自然に足が早くなる

女の力と云ふやつは

ほんとに偉いものだなア

時めき渡る右守さへ

涼しい目玉をさしむけて

自由自在に翻弄し

中々苦勞をかけよるな

とは云ふものの苦勞せにや

誠の花は咲かないと

三五教でも云つて居る

戀の花咲くイルナ城

男は澤山ありとても

此花手折る主人公は

カールチンさまより外にない

山も田地も家倉も

麿の中へ吸ひ込んで

俺の魂までグチャグチャに

分らぬやうにしてしまふ

女をんなは魔神まがみと聞ききつれど あんな優しい顔かほをして

右守うもりの司かみやヤスダラ姫ひめの 心こころが貴方あなたに分わからぬか

悲かなしう御座ござると泣ないた時ときや 俺おれもチヨツクリ泣なきかけた

右守うもりは男をとこだ悲かなしうて 決けつして泣ないたのぢやないほどに

餘あまり嬉うれして嬉うれし泣なき あんな所ところをテーナ奴めが

一寸ちよつとのぞいた事ことならば 地震ちしん雷火らいびの雨あめが

ガラガラ ビシヤビシヤ ピカピカと 亂らん癡ち氣き騒さわぎが起おこるだらう

桑原くはばら々々惟神かむながら 危あぶないところであつたわい

アイタ、タツタ、イツタイ………

と云いつた途端とたんに、ドスンと何者なにものにか衝つき當あたられ、大道だいだうの眞中まんなかに仰向あふむけに倒たふれて了しまつた。衝つき當あたつた男をとこは、セーリス姫ひめに嚇おどかされて、命いのちからがら尻しりひ引きまくり、頭あたまを

先に尻しりを一いつけん間けんばかりつき出して、向むかふ見みずに飛とんで來きたユーフテスであつた。タ、誰たれぢやい。往來わうらいを歩あるくのに、ちつと氣きをつけぬか。人ひとに衝突しやうとつしよつて何者なにもの

ぢや。勿體なくも俺はイルナの城の右守司だぞ。もはや了簡ならぬ。姓名を名乗れ。後から捕吏を遣はして相當の處分をなしてやる」

と唸鳴る聲も慄つて居る。ユーフテスは此聲に初めて右守たる事を知り、衝突したる頭の痛さを耐へ顔を顰めながら、

「マ、誠にすみませぬ。夕、大變ですよ。何うにも斯うにも、ドテライ女に出會して私はもう懲々致しました。貴方もこれから女の所へ行くのでせう。悪い事は云ひませぬ。おきなさい。【むき】ますぜ。それはそれは大きな奴を、おまけに同じ奴が二人も出ますぜ。あゝ恐い恐い、あた嫌らしい」

「ナ、何と申す。【むく】とは何をむくのぢや。膝節を擦り【むい】たのか、大變な慌方ぢやないか」

「これが慌てずに何としませう。それはそれは【むき】ましたぜ。セーリス姫だと思つて居つたら、ドテライ狐でした。もう私は諦めました。旦那様、悪い事は云ひませぬ。サアこれから私と館へ歸りませう」

「貴様の云ふ事は、何が何だか曖昧模糊として捕捉する事が出来ないぢやないか。」

もつとハツキリ分るやうに云はぬかい。一體何が出たと云ふのぢや

「それが分るやうな事なら、何うして逃げて歸りますものか。偉い事頼邊をつめ
りますぜ、痛い痛い痛くないのつて、涙が一升程出ました」

「一升も涙がどこから出たのだ」

「尿道から出ました」

「エ、貴様のやうな没分曉漢に相手になつて居る所ぢない。ヤスダラ姫が待つて
居るわい、大方貴様は肱鐵を喰はされよつたのだなア」

と云ひながら、又もや尻引つからげ驅け出さうとするのを、ユーフテスは後から
腰をグツと掴んだ。カールチンは向ふに氣を取られ、ユーフテスが剛力に任せ腰
を抱いて居るのにも氣が付かず、同じ所ばかり手を振つて石づきをやつて居る。

恰度横槌を縦にして、柄に石龜をのせたやうなスタイルである。

「あゝ、何ぼう歩いても抄らぬ道だなア。近いやうでも遠いのは戀の道だワイ。
ウントコドツコイ ドツコイ、これでも進めば、何時かは行くだらう。何だか後
髪を引かれるやうだ。俄に體が重くなつて來よつた」

と益々石龜の地團駄を踏んで居る。ユーフテスはとうとう根負をして手を放した。其勢にバタバタバタと三間ばかり急進し、バタリと倒れ、

『アイタツタツタ、又膝頭を擦りむいた』

と云ひながら、覺束ない足を無理に踏ん張り、タ、タ、タ、と一目散に駆けて行く。勢あまつて左へおりの道を一町ばかり右へ取り、小栗の森に飛び込んだ。此森はイルナの城に仕へて居る神司の先祖や身内のものが葬つてある墓場であつた。矢庭に墓場に飛び込み、石塔に頭を打つて、

『アイタツタツタ』

と叫ぶと共に目から星のやうにパツと火が出た。自分の目から出た火に驚いてドスンと腰をおろし、どうしたものか一聲も出なくなつて了つた。カールチンは晝頃から一のくらみになる迄ビクとも動かさず、ウンとも得言はず、墓の石塔と睨み合ひをして居た。心のせいか、何か知らず石塔の後から婆が赤黒い手を【しう】と前に垂らし、蚊の鳴くやうな聲で、

『恨めしや』

とやり出した。カールチンは益々驚きよくよく見れば女房のテーナ姫の顔にそつくりである。

「ヤア貴様はテーナぢやないか………ハ………テーナ………いつの間に、こんな所へ来やがったのだ。エーン」

「お前はカールチンぢやないか。ヤスダラ姫に現を抜かし、私をハルナの都へ軍に出し、其間に甘い事、戀の欲望を遂げようとした悪性男だ。此テーナは途中に於て非業の最後を遂げ、先祖の骨の埋めてある此墓へ幽霊となつて出て来たのだ。併し此婆も、かう幽霊になつた上は、お前と添ふ譯にも往かぬ。見て見ぬ振をして居るから、仲よくヤスダラ姫と添ふがよからう」

と蠅螂のやうなスタイルをして、譯の分らぬ事を喋りたて、クルクルと毬のやうな目を剥いて見せた。

「コリヤコリヤ、貴様は狸ぢやな。俺の女房はそんな弱いものと違ふわい。馬鹿にさらすと了簡ならぬぞ。早く俺の腰を癒さぬか」

と何時の間にやら言論機關が圓滑に働き出した。

「實の處は俺は小栗の森の古狸だよ。どうぞこれぎり、キット出ませぬとは申さぬから、許して下さい。左様なら、又明晩改めてお目にかかりませう」
ブスツと象が屁を「こい」たやうな音をして消えて了つた。カールチンは漸く立ち上り、

「何だ狸奴、馬鹿にしゃがつた。何時の間にか慌ててこんな所へ飛び込んで來たと見えるわい。俺もやつぱり戀の暗路に迷うて居るのかなア。女一人關係をつけようと思へば大抵の事ぢやない、命がけだ」

と呟いて居る。そこへ提燈を燈してスタスタとやつて來た美しい女がある。カールチンは其女の顔を怪しみながら、こはごは窺いて見ると、豈計らむやヤスダラ姫であつた。

「ヤア貴女はヤスダラ様ぢやありませんか。どうしてまアこんな物騒な所へ、女の身としてお越しなさつたのですか」

「ハイ、私日が暮れたので、貴方のお越しを待つて居ました處、お出が遅いものだから、じれつたくて仕方がなく、そこで一寸人目を忍び、裏門からお迎へに參

りました。こんな恐ろしい所に、ようまア獨り何ともありません。私ならよう参りませぬわ。戀しい貴方が御座ると思へばこそ、ここ迄お迎へに來たのですよ」

カールチンは嬉しさに、

「あゝさうでしたか、御親切にようまア迎へに來て下さった」

「何も變つた事は無いませなんだかなア」

「私の名がカールチンだと思つて、餘程カールたチン（變つた珍）な事を古狸の奴やつて見せたのですよ。随分大きな目を「むき」ましたよ。其時には私も随分

肝を潰しました」

「惡戲な狸もあつたものですなア。どんなに大きな目でしたか、こんなですか」と團栗のやうな目を「むい」て見せた。

カールチンは何だか少し怪しいと思ひながら、

「そんな小さなのぢやありません、随分大きな目でしたよ」

「こんにちは」

と大きな聲を出し、耳まで裂けた口を開け、蛇の目の傘のやうな目を、クリクリと「むい」て見せた。カールチンはビツクリして一生懸命に闇の道をスタスタとイルナ城の表門さして逃げて行く。

(大正一一・一一・一五 舊九・二七 加藤明子録)

第一章 河底の怪(一一一三六)

墓場に迷ひ込み、怪物に荒肝をとられて二度ビツクリをしながら、息を喘ませ、イルナ城のヤスタラ姫に會はむものと、宵暗の路を駆け出した。十五夜の満月は、ソロソロ地上に光を投げ始めた。カールチンは月の光に漸く安心し、立止まつて、両手を合せ、月神を拜しながら獨言、

「あゝあ、戀の闇が何うやら明るくなつて來たやうだ。むすびの神は月下氷人と
か言ふさうだから、戀路の暗を照らすお月様は、俺にとつては助け神のやうなも

のだ。あゝ月なる哉月なる哉。これからヤスダラ姫の居間に【ツキ】、いろいろ雑多と意茶【ツキ】、粘り【ツキ】、武者ぶりツキ、終ひには悋氣の角を生やし、て咬み【ツキ】、食ひ【ツキ】といふ段取になるかも知れないぞ。エへ、へ、へ、と涎をたぐりつつ入那川の橋詰迄やつて来た。不思議や深さ一丈餘りもある川底が水晶の如く透き通り、月夜にも拘らず、小魚の泳ぐの迄がハツキリと見えて来た。カールチンは、

「不思議な事があるものだ。晝でさへも此川はうす濁りで底の見えた事はないのに、今日は又何うしたものだらう、透きとほつた水晶の水が流れてゐるワイ。ヤツパリ之も月の大神様が、俺達の戀の前途を祝して下さるのだらう」
と獨言ちつつ、覗き込んでゐる。そこへ水底をもがきながら、流れて来たのがテナ姫であつた。

「ヤア、テナの奴、この川上で落馬して川へはまり、此處まで流れて来よつたと見えるワイ。何だか、まだ川の底で動いてゐるやうだ。ヤア、此處で、とうとう沈没するらしいぞ」

どこともなく聲ありて、

「テーナ姫は其方の女房ではないか。なぜ命を的に河中に飛込み救うてやらぬのか。ホンに水臭い男だなア」

と叫ぶ者がある。後ふり返り見れば、ユーフテスであつた。

「コリヤ、ユーフテス、どこから来たのだい。救はうと救ふまいと、俺の女房だ。貴様等の敢て干渉する範圍ぢやないわい。黙つて居よう」

テーナ姫は川底に坐り込み、何だか手をあげて救ひを叫ぶ。其聲は残らず水の泡となつて、ブクブクブクと屁の玉が風呂の中で行列して浮き上る様になつて居る。

「旦那さま、あんた俄に水臭くなりましたなア。何程戀の邪魔になると云つても、女房を見殺しにするのは、チツト不道德ぢやありませんか」

「どうで不道德だらうよ、併し事の成行ならば仕方がないぢやないか」
かく話してゐる所へ、又もや川底をゴロリゴロリと流れて来る女の姿が手に取るやうに見える。二人は目を見はつて、よくよく見れば、妙齡の美人ヤスダラ姫

が綺麗な着物を着飾った儘、髪を垂らして流れて来た。そしてテーナ姫の沈んである所へ折よく沈殿した。

「ヤア、此奴ア大變だ、肝腎の目的物が身投をしたと見える。此奴ア、助けにやなるまい」

と赤裸にならうとするのを、ユーフテスは其手をグツと握り、

「モシモシ旦那さま、危ない危ない、こんな所へ飛び込まうものなら、それこそテーナ姫さまと情死するやうなものだ。おきなさいな」

「ナーニ、俺はヤスダラ姫と心中するのだ。かもてくれない」

と赤裸になり、飛込まうとするのを、グツと襟髪をつかみ、

「待てと申さば、先づ先づお待ちなさいませ」

「エ、邪魔ひろぐな、グツグツしていると、ヤスダラ姫の息の根が切れてしまふぢやないか」

川の底では二人の女が、組んづ組まれつ、力限りに格闘を始め出した。カールチンは、

「コラ、テーナ姫、何をやる、俺が了簡せぬぞ」
と云ふより早く、着物を着たまま、ザンブと飛込んだ途端に、ブルブルブルと石を投込んだ様に沈んで了つた。橋の袂には凧が笛を吹いて通つてゐる。ユーフテスと見えた男は忽ち巨大な白狐となり、のそりのそりと橋を渡つてイルナ城さして進み行く。

テーナ姫の出陣の後、館の守備に任せられ、ハルナの應援軍から取残された大男、ハルマンは此頃カールチンの擧動の常ならぬのに不審を起し、日が暮れても主人の歸りなきを案じて橋詰迄やつて來た。川の面は月の光でキラキラと光つてゐる。忽ちムクムクと川底から浮上つた黒い影がある。ハルマンは透かし見て、「ヤアヤこれは誰かが川へ「はま」つて死にかけてゐるのだ。助けにやならぬ」と衣類を脱ぎ捨て、身を躍らしてザンブとばかり飛込み、黒い影を矢庭に引摺み、抜き手を切つて一方の手で水をかき分け、泳いで岸に取りつき、救ひ上げ、いろいろと介抱して呼び生かし、よくよく見れば右守司のカールチンであつた。ハルマンは二度ビツクリ、言葉もせはしく、

「ヤア、貴方は旦那様ぢやムいませぬか。危ないこつてムいました。手と確か
して下さいませ」

カールチンは漸くにして氣が付き、

「あゝお前はヤスダラ姫か、危ない事だつた。俺も一生懸命にお前の命を助けて
やらうと思つて飛込んだのだ、マアよかつた。サア之から城内へ行かう、こんな
所にグズグズして居つて、人に見付けられちや大變だから」

「モシモシ旦那様、確りなさいませ。ここは何處だと思つてムるのですか」

「ここは入那川の堤ぢやないか、サア早く行かう。ヨモヤ又目を剥いたり、妙な
手付をして俺をおどかす狸村喜平ぢやあるまいな、エーン」

「モシモシ旦那様、私はヤスダラ姫ぢやムいませぬよ、家來のハルマンですがな。
手と確かりして下さいな」

「ヤスダラ姫の命は助かつたか、何うだ。早く様子を聞かしてくれないか」

「そんな人は如何なつたか、私や分りませぬ。只貴方さへ助ければ私の役がすむ
のぢやありませんか。ヤスダラ姫なんて、テルマン國から逃げて來たやうなアバ

ズレ女をんなに構かまふことがあるものですか。あんな奴やつア、死しなうと生いきようと放ほつときやいいのですよ。貴方あなたもヤスダラ姫ひめを大變たいへんに憎にくんで居ゐらつしやつただやありませぬか。サマリー姫ひめ様が此頃このごろの貴方あなたの御精神ごせいしんが變かはつて、如何どうやらヤスダラ姫ひめを王様わうさまの女房にようぼうにしさうだと云いつて、大變たいへんに疝かんを立てて泣ないてばかりゐられますよ。私わたしはそれが氣きの毒どくで見みて居をれないので、かうして搜さがしに來きたのです。何なんで又またこんな川かはへ、盲めくらでもないので落おちこ込みなさつたのですか

「今は何時いま なんとだ、テンと譯わけが分わからぬやうになつて來きたワイ」

「夜の五よる いつつ時とき、あの通とほりお月つき様が東ひがしの空そらへお上あがりになつてるぢやありませんか。

「サア、私わたしがお供ともして歸かへりませう。お召物めしものもズクズクになり、風かぜに當あたつてお風邪かぜでも召めしたら大變たいへんです」

と言いひながら、無理むりにカールチンを引抱ひつかかへ、大力無雙たいりきむさうのハルマンは右守司うもりのかみの館やかたを指さして、トントントンと地響ぢひびきさせながら歸かへつて行く。

（大正一一・一一・一六 舊九・二八 松村眞澄録）

第一二章 心の色々（一一三七）

カールチンの奥の間にはハルマン、サマリー姫と主人の三人が鼎坐となりて、ヒソビソ話に夜の明くるのも知らず、耽つてゐる。

「旦那さま、貴方はお晝前から、館をソツとお立出でになり、お歸りが夜になつてもないので、若しや御城内で、お酒でもおすごし遊ばし、クダを巻いて皆の者を、いつものやうに困らせてゐるのではあるまいかと心配でならず、ソツと城内を窺うて見た所が、門番の話にも、今日は右守さまのお姿は見なかつたと言ひ、女中共に聞いて見ても、お越しが無いと言つて居ましたので、そこら中を捜しまはつて居りました所、入那川の水面に怪しい音がするので、ハテ不思議と立止まり様子を考へてゐると、大きな狐がソソノソと橋を渡つて北の方へ行く。此奴ア變だと水面を眺めると、パツと浮上つた黒い影、命カラガラ飛込んで救ひ上げ、よくよく見れば旦那様、取止めもないことを仰有つて、本當に此ハルマンも如何なる事かと氣を揉みました。奥様の御不在中に、若しもの事があつたら、此ハル

マンは申譯まをしわけがありませぬからなア、マアマア結構けっこうで△いましたごさ」

「お父とうさま、此頃このころはお母かアさまの不在ふざいちゆう中ちゆうですから、何卒なにとぞどつこへも行ゆかず内うちに居をつて下ください。心配しんぱいでなりませぬ。もし御登城ごとうじやう遊あそばすなら、何時いつものやうに二三にさんに人の家來けらいを伴つれて行いつて下ください。苟いやしくも右守司うもりのかみの職掌しやくじやうでありながら、一人ひとり歩あるきをなさるとは、餘あまり輕々かるがるしいではありませんか」

「ナア二、一人ひとり歩あるくにも、之これには言いふに云いはれぬ祕密ひみつがあるのだ。俺おれの神謀鬼しんぼうきさ策くは女童をんなわらへの知しる所ところでない。マア俺おれのする様やうに任まかせておいたが宜よからうぞ」

「日中にちちゆうならばソリヤお一人ひとりでも宜よろしからうが、今夜こんやの様やうな事ことがあつては大變たいへんですから、何卒どうぞ日の暮くれない内うちに之これからお歸かへり遊あそばす様やうに願ねがひます。若い男をとこが戀女こひをんなの後あとを追おふ様やうに、夜分やぶんにコソコソと一人ひとり歩あるきするのは、何卒どうぞ心得こころえて下くださいませ。姫ひめさまも大變たいへんに御心配遊ごしんぱいあそばしますから……」

「イヤ實じつの所ところは、お前まへの知しつてゐる通とほり、女房にようぼうが出陣しゅつちんをしたのだから、先まづ第一だいいちに大自在だいじざいてん天様さまに御祈願ごきぐわんを凝こらし、御先祖ごせんぞの墓はかへも參まゐり、女房にようぼうの武勇ぶゆうを發揮はつきするやう祈いのつて居をつたのだ。そして所ところが、御先祖ごせんぞ様の石塔せきたふの後うしろから、テーナ姫ひめの顔かほ其儘そのままの

怪物が現はれ、恨めしの冷飯の……と吐きやがつて、怪體な手付を致し、終焉の果にや、毬のやうな目を剥きよつた。そこへ又一人の化物がやつて来て、傘のやうな目玉を剥きよつたものだから、流石の俺も一寸おつたまげて、わが家を指して逃歸る途中、誤つて入那川へ陥没したのだ。そこを貴様が折よく通つて助けてくれたのだ、マア有難い、御禮を申さねばなるまい。併しながら、エー……ン、彼奴の命は如何なつたか知らぬてな」

「彼奴の命も此奴の命もあつたものですか。貴方は大變に、ヤスダラ ヤスダラと仰有いましたが、ヤスダラ姫に對し、何かお考へがあるのですか」

「何、別に之といふ考へもあるのぢやない、彼奴の生死に就いて、少しばかり氣にかかつてならないのだ」

「私もヤスダラ姫さまの事が氣に係つてならないのですよ。噂に聞けば、テルマシ國からお歸りになつたといふ事、若しや王様と御夫婦にでもなられようものなら、私は如何しようかと、そればかりが心配でなりませぬワ」

「コリヤ娘、そんな心配は少しも要らない。お前はどこまでもセーラン王の妃だ。」

俺おれがキツと保証ほしょうして添そはしてやるから安心あんしんせい。併しかしながら、若もしも俺おれの女房にようぼうが、今度こんどの戦たたかひで命いのちを奪とられるやうな事ことがあつたら、お前まへ何なんと思おもふか」

「それは申まをすまでもなく、悲かなしうムこごいます。お父とうさまも矢張やつばり悲かなしいでせう」

「そりや俺おれだつて、悲かなしい……のは當あたり前まへだ。併しかしながらウーン……」

「お父とうさま、其後そのあとを言いつて下ください。如何どうなさると仰おつしや有あるのですか」

「マア刹那せつなしん心を樂たのしむのだな。其時そのときや其時そのときの又風またかぜが吹ふくだらうから」

「モシ姫ひめさま、御心ごしん配ぱいなさいますな、旦那だんなさまの心こころの中うちには、行先ゆくさきの事ことまでチヤ

ンと成案せいあんがあるのですから……それはそれは抜目ぬけめのない旦那だんなさまですから、流石さすが

は貴女あなたのお父とうさまだけあつて、よく注意ちゅういの行届ゆきとどいたものです。ヤスダラ山やまの春風はるかぜ

が吹ふいて、此このお館やかたは懸やがて百花ひやくくわらん爛漫まん、天國てんごくの花園はなそのと變かはるかも知しれませぬ」

「お父とうさま、貴方あなたは此頃このころ、大變たいへんにヤスダラ姫ひめさまを御鼻ごひいき眞遊あそばすさうですが、ヨ

モヤ、セーラン王様わうさまの御妃おきさきになさる御考おかんがへぢやありますまいな。さうなりや、私わたし

はどうしたら良いいのですか」

「すべて人間にんげんは、何事なにことも十分じふぶんといふ事ことはいかぬものだ。戀こひを得えむと欲ほつすれば位くらゐ

捨てなくてはならず、位を得むと欲すれば戀そのものを放擲せなくてはならぬ。
両方良いのは頼被りと だけだ。それさへお前に合點が行けば、お前の戀は永遠に繼續させてやるが、どうだ、此間からお前に相談しようと思つてゐたが、一度今日は好い機會だから聞いて見るのだ」
「妙なことを仰有います。私はイルナの國では最高級のセーラン王の妃、又國內第一の立派な夫に戀してゐるのです。それをどちらか捨てねばならぬとは、ヤツパリさうすると、貴方は王様を退隱させ、自分が年來の野心を遂げるといふ、面白からぬ御考へでせう」
「イヤ、俺の方から無理に迫るのぢやない。今までは武力に訴へてでも目的を達しようと思つてゐたのだが、お前の知つてゐる通り、大黒主様の應援軍迄お断り申し、部下の武士迄残らず遠征の途に上らせた位だから、何事も圓滿解決のつく見込が十分立つてゐるのだ。王様の口から仰有つたのだから、お前が何程頑張つた所で、王様の御決心は動かす事は出来まい。さうだから、位をすてて戀を選めといったのだ。お前の夫が刹帝利になるのも、親がなるのも、お前としては別に

差支さしつかへがないぢやないか。チツとは親おやの養育やういくの恩おんも考かんがへて呉くれたらどうだ」

「オホ、何なんとマア蟲むしのよいお考かんがへですこと。あの王様わうさまに限かぎつて、そんなこと仰おつしや有はる筈はずがありませぬワ。そりや貴方あなたの獨合點ひとりがてんでせう。さうでなくは、城内じやうないの悪者わるものども共にチヨロまかされ、油斷ゆだんをさされてムるのでせう。あゝ困こまつた事ことをなさいましたなア。あゝ併しかしながら、これで安心あんしんしました。貴方あなたに軍隊ぐんたいを抱かかへさしておくと、勢いきほひに任まかせて脱線だつせんをなさるから氣きが氣きでありませなんだ。これで王様わうさま、一安ひとあん心しんなさりませう。キツと貴方あなたは翼剥つばさはがれた鳥とりのやうなものだから、叛逆人はんぎやくにんとして入那いるなの牢獄らうごくにブチ込まれるにきまつてゐます。それは私わたしが氣きの毒どくでなりませぬ。併しかしながら海山うみやまの養育やういくの恩おんに酬むくゆる爲ため、命いのちに代かへても貴方あなたを助たすける様やうに王様わうさまへ願ねがひますから、どうぞ之これからは、悪わるい考かんがへを出ださないやうにして下さい。そしてヤスダラ姫様ひめさまに、どうぞ接近せつしんしないやうに心得こころえて下さい。頼たのみますから……」

「實じつの所ところは、何なにもかもブチあけて言いふが、ヤスダラ姫ひめは最早もはや俺おれの女房にようぼうだ。いろいろと惡魔あくまが邪魔じやまをしやがつて、戀こひの妨害ぼうがいを致いたしよる、お前まへがゴテゴテいふのも、決してお前まへの本心ほんしんからではあるまい。副守ふくしゆの奴やつ、お前まへの口くちを借かつて、俺おれの金剛心こんがうしん

を鈍らさうとかかつて居るだらう。モウ斯うなつては俺も命がけだ。誰が何と云つても、梃子でも棒でも動くやうなチヨロい決心ぢやないから、モウ下らぬ意見は止めてくれ。ハルマン、貴様も俺が出世をすれば一緒に昇るのだから、邪魔を致しては後日の爲にならないぞ、よいか。賢明な主人の本心がチツとは分つたか

「ハイ、分つたでもなし、分らぬでもありません。併しながら、國家の爲に自重せなくてはならない大切な御身の上、今後は私がどこへお出でになるにも、お供を致しますから、どうぞお一人で館を出ないやうに願ひます」

「エ、小ざかしし、ツベコベと主人の行動に就て干渉するのか。今日限りグツグツぬかすと、暇を遣はすから、トツトと出て行け。サマリー姫、其方も、俺のする事に喙を入れるのならば、最早了簡は致さぬぞ。何だ偉さうに、夫に嫌はれて、のめのめと親の内へ逃歸り、世話になつてゐながら、何時までも親に對し、主人氣取りで居るとは何の事だ。いゝ加減に慢心しておくがよからうぞ。最早俺は入那の國の刹帝利だ。國中に於て俺に一口でも逆らふ者があつたら、忽ち追放だか

ら、さう思へ。エーン」

斯かる所へ慌しくやつて来たのは例のユーフテスであつた。三人はユーフテスの落着かぬ姿を見て、稍怪しみながら、ハルマンは膝を立て直し、

「ヤア其方はユーフテス殿、いつもに變る今日の御様子、何か城内に變つたことが起つたのぢやありませんか」

と言葉せはしく問ひかける。ユーフテスは眞青な顔をしながら、

「城内には大變な事が突發しましたぞ。グズグズしてゐると、何時目玉が飛出るか、尾が下るか知れませぬ、氣をつけなさいませ。旦那様も御注意をなさらぬと、馬鹿を見られちやお氣の毒だと思つて御注進に參りました。私は大變にやられて來ました。前車の覆へるは後車の戒め、私のやうな失敗を旦那様にさしちや申譯がないと思ひ、忠義の心抑へ難く取る物も取敢ず、痛い足を引摺つて參つたのでムいます」

「テンと貴方のお言葉は要領を得ぬぢやありませんか。その頬べたは如何なさいました。紫色に腫れ上つてるぢやありませんか」

「天下無雙の美人が兩ホウから私の兩ホウを、可愛さ餘つて憎らしいと云つて、
振りよつたのです。ズイ分痛い同情に預かつて來ました。モシ旦那様、何卒ここ
四五日は登城なさらぬやうに心得て下さい。又頬ベタを抓られちゃ堪りませぬか
らなア」

「美人に頬を抓られたのを、お自慢で俺に見せに來たのだろ。随分氣分がよかつ
たらうのう」

「ハイ、宜かつたり、悪かつたり、嬉しかつたり、怖かつたり、つまり喜怒哀樂
愛憎欲の七情が遺憾なく發露致しました。立派なセーリス姫だと思へば、其奴が
大きな白狐になつてノソノソと歩き出す。一人は本當のセーリス姫だと思へば、
其奴が又目がつり上り口が尖り、忽ち狐の御面相になつて了ふ。イヤもう入那の
城内は、此頃はサーパリ妖怪變化窟となつて了ひました。何とかして本當のセー
リス姫を發見しなくてはなりません。旦那様も今お出でになつたら、キツと私の
二の舞をやつて馬鹿を見せられるに違ひありません。さうだから四五日は御見合
せを願ひたいと言つてるのですよ」

「アハ、ハ、面白面白、狐でも狸でも何でも構はぬ。そこを看破するのが天眼通力だ。貴様は戀の爲に眼がくらんでゐるから、そんな目に遇ふのだ。そこは流石のカールチンさまだ。城内の妖怪を残らず看破して、至治泰平の天國を築き上げるのが此方の役だから、先づ黙つて俺の御手際を見てゐるがよからう。ハルマン、貴様も今が思案のし時だ。ここで改心致し、主人の自由行動を妨げないといふ誓ひを立てるなら、従前の通り、家來に使つてやらう。オイ、娘、貴様もその通りだ。今日の場合、神力無雙、旭日昇天の御威勢高き俺に向つて、ツベコベ横槍を入れると、親子の縁も今日限りだ。どうだ、分つたか、エーン」

ハルマンはヤツと胸を撫で下し、兔も角も放り出されちや大變と、ワザとに嬉しさうな顔をして、

「ハイ有難うございました。今後は決して何も申しませぬ。絶対服従を誓ひますから、どうぞ末永く可愛がつて使つて下さいませ」

「ウン、ヨシヨシ、それさへ慎まば、俺だつて貴様に暇をやりたいことはないのだ」

ハルマン「時にユーフテスさま、實際そんな不思議が城内に突發してるのか、チツと合點が行かぬぢやないか」

「ウン、本當に不可思議千萬だ」

サマリ「それなら、カールチン殿、暫く妾は沈黙して、時の移るを待つであらう、さらば」

と言ひ棄て、裾をゾロリゾロリと引摺りながら、奥の間指して進み入る。ハルマンも、ユーフテスも續いて、自分の家路へ指して一先づ立歸る事となつた。カールチンは、

「ヤレヤレ邪魔物が拂はれた」

と打喜び、化粧室に入つて、いろいろと顔の整理を終り、美はしき衣服を身に纏ひ、裏門よりニコニコとして、城内指して又もや進み行くのであつた。

(大正一一・一一・一六 舊九・二八 松村眞澄録)

第一三章 擲揄（一一三八）

イルナ城の奥の一閒には、黄金姫、清照姫、セーリス姫が鼎坐となつて何事か笑ひ興じてゐる。

黄金「セーリスさま、貴女も随分思ひきつたお轉婆ですね。ユーフテスを到頭膽玉の宿替をさして【ぼつ】歸したぢやありませんか。今そんな事なされると、肝腎の目的が畫餅に歸しちや困るぢやありませんか」

「ハイ、さう心配をして下さいませぬ。屹度ユーフテスは又々やつて來ますよ。大象も女の髮の毛一條にひかれると云ひますからな。妾の婉曲な言靈が、彼の腦裡に深く深くつき込んでありますから、如何あつても、よう忘れはしませぬわ。一寸妾の横目を使つただけでも、大の男がグナグナに肝も骨もなくなつて、茹でた蛸の様になるのですもの、オホ、、、、、」

「あなたは惜しいものだな。三十萬年未來の二十世紀の世に生れさしたら、定めて良い藝妓になるでせう。荒男を毬の如くに翻弄すると云ふ凄しい女だから、如何

な黄金姫も荒肝をとられましたよ。オホ、

「ホ、ホ、ホ、あのまア黄金姫様の仰有います事わいの。妾よりも、も一つ先生がここに居られますわ」

と清照姫を指さす。

「清照姫はまだ試験中だ。あなたは最早優等卒業生で銀時計の口ですよ。然しあなたのお眼鏡で清照姫がさうお轉婆に見えますかな。親位、子にかけたら馬鹿なものはありませんから、娘の事は私では十分に分りませぬわ。貴女の側面觀でさうお認めになれば、或はお言葉の通りかも知れませぬ。何とまア困った娘を持つたものですわい。然し貴女は狐に化けて嚇かしたぢやありませんか。城内一般の偉い評判になつてみますよ。餘り腕を揮うて茶目式を發揮なさるものですから、今後の清照姫の活動に支障が起りはせぬかと、チツとばかり心配ですわ」

「何、そこは又私が砲兵隊を繰り出して、白兵戦を掩護致しますから大丈夫ですよ。なア清照姫様、あなたの方寸にチヤンとあるでせう」

「オホ、ホ、ホ、愈面白くなつて來ましたね。早くカールチンさまがやつて來て呉

れれば宜いいに。あの戀人こひびとは何なにを愚圖ぐづぐづ々々してゐやんすかいな。此頃このころの空そらの樣やうに俄にはかに模樣もやうがグレンと變かはり、途中とちゆうに於おいて私わたくし以上いじやうのナイスに出會でつくはし、例れいの垂涎すゐえん三尺さんじやく、細ほそ目めの幕まくが下おりてゐるのではあるまいかと心配しんぱいでなりませぬわ。ほんにほんに戀男こひをとこを持つもつと氣きの揉もめた事ことだ。あたゐ、もしカールチンさまのお心變こころがはりでもしてゐたら如何どうしまほうか。なアお母かアさま、チツと娘むすめの心こころも推量すゐりやうして下くださいませ。

フ、フ、フ、フ、

黄金姫わうごんひめは怪訝けげんな顔かほをして手鼻てばなをツンとかみ、唇くちびるの泡あわを拭ぬぐひながら一寸目ちよつとめを丸まるくし、皺しわのよつた口くちを尖とがらし、清照姫きよてるひめの顔かほをマジマジと覗のぞき込んで、

「これこれ清さま、お前まへチツと樣やう子が變かはつて來きたぢやないか。本當ほんたうに惚ほれて貰もらつちや此芝居このしばいが打うてぬぢやないか」

「ホ、フ、フ、油斷ゆだんのならぬは娘むすめですよ。妾わたしだつて初めはじの内うちは好すかんたらしい、あのカールチン奴め、うまく三寸さんずんの舌したでチヨロまかし、サアとなつたら背負せおひ投なげを喰くはし、エツパツパを喰くはしてアフォンとさしてやらう、其顔そのかほを見るみが面白おもしろいと不人ふにん情やうの事ことを考かんがへてゐましたが、深夜密しんやひそかに考かんがへて見みれば私わたしだつて女をんなだもの、異性いせいが嫌きら

ひと云ふ道理もないぢやありませんか。カールチンさまが何程ヒヨットコでも、友彦の事を思へば、幾層倍男振が宜いか知れませぬわ。お母さま、あなたの目から見てもさうでせう。もう今となつては芝居どころか、眞剣にカールチンさまを思ふ様になりました。何處迄もヤスタラ姫で引張るつもりですから、何卒親の慈悲で私の戀を叶へさして下さい、お願い申します」

「これは怪しからぬ。女と云ふものは油断のならぬものだ。あゝあ如何したら宜からうかな。セーリス姫様、お前さまは本當に偉い、男に耽溺せないだけ見上げたものだ。此清照姫は小さい時から癖が悪うて、男の側へ寄せると直此通り「デレ」て了ふのだから困つたものだ。何卒お前さまからトツクリと清さまに云うて聞かして下さいな。今となつて、こんな事を云はれちや氣が氣ぢやありませんか」

「ホ、ホ、ホ、清照姫様はヤツパリ新しいですな。それが本當でせう。妾の様な骨董品は最早時代遅れですよ。いやもう感心致しました」

「お母さま、よく考へて御覽なさいませ。猫に鼠、男に女と云ふぢやありませんか。猫の前に鯉節を出しておけば、いつかは喰ひつくものですよ。一旦香ばしい

味を覺えたが最後、誰が何と云つたつて放すものぢやありませんか。

ホ、ホ、ホ、誰が何と云つてもカールチンさま程氣の利いた方が外にあるものですか。早く来てくれぬかいなア。假令お母様が何と云つても妾の夫は妾がきめるが正當だ。お母さまの夫ぢやあるまいし、私の夫を人にきめて貰ふ様な、そんな不見識な事が如何して出來ますものか。ねえ、セーリス姫さま、さうぢやありませんか。

オホ、ホ、ホ、又しても清さま、お前は私に擲擲つて居るのだな。親の前でそんな事を云ふ娘が何處にありますか。世間慣れて、如何にも斯うにも始末のつかぬド轉婆になつたものぢやな。

如何です私の腕前は、お母さまでさへも本當になさるでせう。これ位うまくやつてのけねば、如何しても麥飯で鯉は釣れませぬからな。誰がすかたらしいカールチン如き悪人に戀慕する奴がありますか。オホ、ホ、ホ、

それでチヨツと此婆も安心しました。何卒うまくやつて下さいや。

然しお母さま、前以て斷つておきますが、人の心は生物ですから何時心機一轉

して嘘が誠になるかも知れませぬから、其時こそは因縁ぢやと思つて諦めて下さるでせうな。三浦之助義村が時姫に向つて云ひますだらう。「親につくか夫につくか、おちつく道はたんだ一つ、返答如何に、思案如何にとせりかけられ、どちらが重い軽いとは、恩と戀との義理づめに言葉は涙諸共に……思ひ切つて打ち明けませう。父さま、許して下さいませ」と云ふでせう。さうだからマサカになつたら、棺桶へ片足つつ込んだ末の短い頼りないお母さまよりも本當の力になつてくれる末長い夫につく方が本當の利益ですわ」

「えー仕方のない女だな。如何なつと爲さいませ。お前さまの戀愛までも干渉する餘裕がありませんわい」

「オホ、何と面白い活劇を拜見致しました。フランスのオリオン劇場へでも持つて行つて上演したら、随分人氣を呼ぶ事ですわよ」

「何と云つても三五教きつての千兩役者ですから、うまいものですわい。僅かに十五やそこらで肩揚げのとれない中から男と驅落をしたり、脇鐵砲を喰はしたり、兩親を置去りにして龍宮島まで飛出し、平氣で黃龍姫と名乗り、女王さまになつ

て澄まし込んで居ると云ふ竦腕家だから、到底親の私でもお側へは寄せぬわ
い。オホ、、、

斯く割りなき雑談に耽る折しも、受付のミルは慌しく入り来り、三人の前に兩
手をついて、

「只今右守さまがお入来になりました」

セーリス「それは御苦勞、直こちらへお通り遊ばす様に云つておくれ」

ミルは、

「ハイ」

と答へて表へ驅出す。黄金姫はニタツと笑ひを残し、王の籠り室へ手早く姿を隠
して了つた。

（大正一一・一一・一六 舊九・二八 北村隆光録）

第一四章

吃驚（一一三九）

右守司のカールチンは意氣揚々として清照姫、セーリス姫の話してゐる奥の間へ入り來り、

「あゝヤスダラ姫殿、セーリス姫殿、えらい御無沙汰を致しました。昨日はお目にかかる積りで居りましたが、少しく差支が出来まして到頭失禮を致しました」
「それはお忙しいことでムりましたな。道中で頭の鉢合せをしたり、親切にお墓參りをなされたり、狸に騙されたり、河へ飛び込んだり、大變な御活動でムりましたさうですな。流石は右守さまだと云つて、姉さまも感心して居やりました。さう立ちはだかつて居らずに、マアここにお坐りなさいませ。昨日の一伍一什を一つ聞かして頂きたいものでムります」

カールチンは頭を掻きながら、

「へー、別に活動したと……云ふ譯でもありません。時の勢やむを得ず、惟神的にさされたのですよ。誰が又そんな事を御報告に參りましたかな」

「私の天眼通で一吋此處から透視して居りましたよ。まづまづお怪我がなくて結構でしたな。時にユーフテスさまは如何してゐられますかな。昨日から待つてゐる」

ますが、お顔を見せなさらぬので大變に氣を揉んで居ります」

「工、何と仰有います。ユーフテスは昨日來たぢやありませんか。大變に頬邊を
抓られて顔を腫らして居ましたよ。大變苛めなさつたと云ふ事ですが、さう惡戯
をするものぢやありませんぞ。女はヤツパリ女らしく爲さる方が床しいですな」

「この間からユーフテス様のお顔を拜んだ事はありません。そりや何かのお考へ
違ひでせう。大方私だと思つて仇志野の古狐にでも弄ばれて居らつしやつたので
せう。何とまあ困つた人だなア」

「何分此頃は惡魔横行しまして、彼方にも此方にも古狸や狐が出現し、男を惱ま
すと見えますわい。ワハ、ハ、ハ、」

「もしもし姉さま、何恥かしさうに俯向いて居られますの。あれほど八釜しく焦
れて居ながら氣の弱い、何です、早く御挨拶をなさいませぬか」

清照姫、細い聲で恥かしさうに、

「ハイ」

と云つたきり益々俯向く。

「アハ、ハ、ハ、餘程恥かしくなつて來たと見えるな。流石はお嬢さまだ。いやさうなくては女の價值がない。今時の女は男を三文とも思つてゐないから困るのだ。いやズンと氣に入つた。海棠の花でも雨に濕つてチツとばかり俯向いて居る所に、得もいはれぬ風情のあるものだ。エへ、ハ、ハ、ハ、」

「もし右守さま、口から何だか長い紐が下がつて居るぢやありませんか。早うお手繰り遊ばせ。姉さまが御覽になつたら、あまり見つともよくありませんよ。」

ホ、ハ、ハ、ハ、あのまア細い目わいのう。本當に右守さまも、姉さまにスウエートハートして居られると見えますな。お目出度いお目出度い。これ姉さま、お顔を上げなさらぬか。何ですか十二か十三の娘の様に、そんな氣の弱い事で如何して戀が成功しますか。私、側に見てゐても本當にジレツたいわ」

「どうやら恥かしいと見えるわい。いやセーリス姫さま、姉妹の貴女がここに居らつしやると、姫も氣がひけて思ふ事も云へないと見えます。何卒少し席を外して貰ふ事は出來ますまいかな」

「ホ、ハ、ハ、ハ、それはお易い御用でムいます。それなら邪魔者は暫く姿を隠しま

すから、何卒^{どうぞ}シツポリと御^ご兩人^{りやうにん}様^{さま}お樂^{たの}しみ^み』
と態^{わざ}とにプリンとして見^みせ、疊^{たたみ}を二^{ふた}つ三^みつボンボンと蹶^けつて早^{さうさう}々に自^じ分^{ぶん}の居^あ間^まへ走^{はし}つて行^ゆく。

「オホ、何^{なん}と面^{おも}白^{しろ}いものだなア。然^{しか}し、あこに云^いふに云^いはれぬ妙^{めう}味^みがあるのだ。チツとセーリス姫^{ひめ}は俺^{おれ}達^{たち}のローマンスを妬^やいてゐると見^みえるわい。いやヤスダラ姫^{ひめ}殿^{どの}、セーちやまは歸^{かへ}りました。サアもう誰^{たれ}に遠^{ゑん}慮^{りよ}は入^いりませぬ。お顔^{かほ}をあげなさい。さうしてトツクリと將^{しやう}來^{らい}の御^ご相^{さう}談^{だん}を遂^とげておかうぢやありませぬか」

「オホ、好^すかぬたらしい男^{をとこ}だこと、貴^{あなた}方は立^{りつ}派^ぱなイルナ城^{じやう}の右^う守^{もり}様^{さま}、さうして、テーナ姫^{ひめ}様^{さま}と云^いふ立^{りつ}派^ぱな立^{りつ}派^ぱな牡^ぼ丹^{たん}餅^{もち}のやうなお顔^{かほ}の奥^{おく}さまがあるぢやありませぬか。私^{わたし}の樣^{やう}な出^で戻^{もど}りの女^{をんな}を捉^{とら}へて、そんな事^{こと}仰^{おつ}有^{しや}いますと、貴^{あなた}方の名^{めい}譽^{いよ}に關^{かか}はるぢやありませぬか。宜^いい加^か減^{げん}におやめなさいませ」

「これはしたり、案^{あん}に相^{さう}違^{あひ}の姫^{ひめ}の御^お言^{こと}葉^は、そんな筈^{はず}ではなかつたに。何^{なん}とした變^{かは}りやうだらう」

「妾^{わたし}は些^{ちつと}も變^{かは}つては居^あないのよ。變^{かは}つたのは貴^{あなた}方^{かた}のお心^{こころ}ですわ」

「イヤ吾々は些も變つてゐない。姫の心がスツカリ變つてるぢやないか」

「さうですか。貴方が好きで好きで仕方がなかつたのだが、今日は又何だか知らぬが、ぞぞ毛が立つ程嫌になりました。好きな貴方が嫌ひな貴方と變つてゐるのですから、ヤツパリ本人は貴方でせう。本人が變ればこそ、相手方の妾の目から變つて見えるのですわ」

「そんなこたア如何でも宜い。サア愈今日は情約締結を致しませう。私が當城の主人刹帝利と今になりますから、貴女は私の正妃、よもやお不足はありません。昔

妾は貴方の様な水臭いお方は末の見込がムリませぬから、嫌ひでムります。昔からいろいろと艱難辛苦をして、ヤツと此處まで夫婦が位置を築き上げ、今や進んで刹帝利におなりなさると云ふ所で慢心を遊ばし、不人情にも女房を殺しにやつた後で、妾の様な何にも經驗のない、つまらぬ女を女房にしようと思ふ様なお方は、私絶対に嫌ひでムります。又外に綺麗な方が見付かつたら、私は第二のテナ姫様にしられて了ひ、生命をとられるやらも圖られませぬから、まアそんな劍呑な方にお相手になるのは止めておきませうかい」

「今更いまさらそんな事ことを云いつて貰もらつちや困こまるぢやありませぬか。大黒おほくろ主様ぬしさまから吾々われわれの目もく的てきを達成たつせいする爲ために、五百ごひやく騎きの軍勢ぐんせいを應援おうえんの爲ため御派遣ごはけん下くださるのをば、貴女あなたの希き望ぼうによりお斷ことわり申まを上げ、其上そのうへまた味方みかたを殘のこらず呼よび集あつめ、ハルナの國くにへ遠征えんせいの旅たびに出だして了しまひ、最早もはや守まもり少すくなくなつた此際このさい、お前まへさまに尻いどを振ふり向むけられて、如何うして此右守司このうもりのかみが立たち行ゆきますか。チツとは推量すありやうして貰もらひませうかい。エーン」

「ホ、、、、、お前まへさまはそんな頓馬とんまだから妾わたしが嫌きらふのだよ。女をんなにかけたら目めも鼻はなもないのだから、本當ほんたうに困こまつた唐變木たうへんぼくだな。ウフ、、、、」

「これ、ヤスダラ姫ひめさま、腹はらの黒くろい。いゝ加減かげんに「いちや」つかして於おいて下くだされ。男冥加をとこみやうがにつきますぞや」

隣となりの室しつにはオホンオホンと、男をとこの咳拂せきばらひが聞きえて來きた。これは黄金わうごん姫ひめが二人ふたりの掛合かけあひを面白おもしろ可笑をかしく立聞たちぎきし、わざとセーラン王わうの聲色こわいろで咳拂せきばらひをして見みせたのであつた。清照きよてる姫ひめは小聲ここゝろになり、

「あの通とほり、襖ふすま一枚まい次の間まに王様わうさまが控ひかへてゐるのですから、貴方あなたの様やうにさうツケツケと何なにもかも云いつて貰もらつちや困こまるぢやありませんか。ちと氣きを付つけて下くださいな」

カールチンは二つ三つ首を縦に振りながら小聲になり、

「ウン、よしよし、あ！ それで分つた。何だか妙な事を云ふと思つたが、王が隣室に居られるので、あんな事を云つたのだなア。よし分つた。もう俺も諒解したから心配して呉れな」

「ホ、何、何が諒解ですか。妾の様な女を相手にせず、もつと立派なお方にお掛合遊ばせ」

斯く云ふ折しも、ミルは慌しく走り來り、

「もし右守さま、ヤスダラ姫様、今王様とヤスダラ姫と云ふ貴女にソツクリのお方が歸られました」

カールチンは、

「何、ヤスダラ姫が歸つた。王様がお歸り、ハテ、如何したものかな」と腕を組み胡坐をかいて、暫し思案に沈みつつあつた。

(大正一一・一一・一六 舊九・二八 北村隆光録)

第四篇 怨月恨霜えんげつこんさう

第一五章 歸城きじやう（一一四〇）

天の目一つあめ まひと かむつかさ神司

竹野の姫の鎮たけの ひめ しづまれる

高照山の岩窟たかてる やま がんくつを

後に見捨あと みすててスタスタと

狼猛おほかたけぶ山道やまみちを

黄金わうごん姫ひめを初はじめとし

四方よもの景色けしきも清照きよてる姫ひめの神かみの命みことや龍雲りううんや

テームス、レーブ、カル、リーダー 數多あまたの供人ともびと從したがへて

セーラン王わうやヤスタラの姫ひめの命みことは悠々いういうと

駒こまに跨またがり荒野あらの原はら 吹ふく風こがらしにさらされつ

照山てるやまた峠たうげも乗のり越こえて 轡くつわを竝ならべ歸かへり來くる

其御姿の雄々しさよ

イルナの都の入口に

歸り來れる折もあれ

左守の司のクーリンス

家の子郎黨引き連れて

いと慇懃に出迎へ

セーラン王の歸館をば

悦び勇み前後

兵士共に守らせて

旗鼓堂々と城内に

漸く歸り來りけり

奥の一間に黄金の

姫の命は立て籠り

セーラン王の聲色を

使つて右守の神司

縦横無盡に操りつ

清照姫はヤスタラの

姫の命と假名して

言靈劍ふりかざし

戀に狂ひし右守をば

いとサンザンに惱ませる

時しもあれや受付に

慎しみ畏み仕へたる

腰の曲りしミル司

右守の司の前に出で

セーラン王の一行が

數多の供人諸共に

いよいよ只今御歸館と

其報告に肝潰し 四邊キ口キ見廻しつ

両手を組んでドツと坐し 摩訶不思議なる出来事に

煩慮するこそをかしけれ あゝ惟神々々

御靈幸はへまして 纏れに纏れし物語

いとながながと説いてゆく 此有様を諾ないて

いとスクスクと口車 辻らせまたへ麻柱の

神の御前に瑞月が 謹み敬ひ願ぎまつる

あゝ惟神々々 御靈幸はへましてよ。

然として俯向いて居る。セーラン王は、直に三十一文字をもつて怪しみ問ふ。
セーラン王一行は、奥の間に進み入り、見れば清照姫、カールチンの二人が黙

思ひきや右守司のカールチン

千代に榮ゆるわが居間にありと。

何事なにごとの起おこりし事ことか知らねども

清きよけき居ゐ間まを犯をかす癡しれもの者もの。

逸いちはや早く右うもり守もりの司つかさわが居ゐ間まを

清きよめて去されよ神かみのまにまに。

怪あやしかもイルナの城しろの内うち外そとを

包つつむ魔ま神がみの聲こゑさやぐなり』

ヤスダラ『なれこそは妾わらわが身みをば虐しひげし

右うもり守つかさ司つかさのカールチンかも。

カールチンよ一日ひとひも早はやく村むら肝きもの

心こゝろ清きよめて誠まことにかへれ。

ヤスダラ姫ひめ神かみの命みことは一ひと柱はしら

二人ふたりあるとは思おもはざりけり』

清照きよてる 『ヤスダラ姫ひめ神かみの命みことの魂たましひは

清照きよてる 姫ひめと輝かがやきませば。

今いましばし尊たふとき御名みなを借かりにけり

醜しこたす助けむと思おもふばかりに』

ヤスダラ 『黄金わうごんの姫ひめの命みことは今いまいづこ

その御消息みたよりの聞きかまほしさよ』

清照きよてる 『黄金わうごんの姫ひめの命みことは奥おくの閒まに

セーラン王わうの聲こわねつかひつ。

カールチン醜しこの身魂みたまを洗あらはむと

母娘おやこふたり二人は心碎こころくだきつ』

カールチン「吾こそは戀の擒となり果てて

恥をかくとは思はざりけり。

兵士をハルナの國に遣はして

翼とられしやもめ鳥あはれ。

かくならば最早右守の神司

君の御前に命捧げむ。

いざさらば命を召せよセーラン王

欲と戀とに迷ひし吾を

セーラン「何程の罪や汚れのあるとても

直日の神は許しますらむ。

いろいろと戀の魔神に操られ

汝が司の目や醒めにけむ

黄金姫は奥の間より、隔ての襖を押しあけて微笑しながら出で迎へ、セーラン王、ヤスダラ姫に向ひ、會釋しながら三十一文字を詠む。

有難しいと畏しと思ふかな

尊き君の無事の歸城を。

大君の御後を守る親と子が

摩訶不思議なる夢を見しかな。

カールチン、ユーフテス等がいろいろと

戀路に迷ふ様のをかしさ。

腸も破るるばかりの可笑しさを

こらへて今日が日をば待ちける

カールチン 二世までと契りし妻を振り捨てて

思はぬ方に心寄せつつ。

思はざる人に思はれ戀はれしと

思ひし事を悲しくぞ思ふ。

今ははや心の闇も晴れ渡り

眞如の月の光見るかも

龍雲 吾とても右守の司に相似たる

醜業仕へし事もありけり。

さりながら御恵深き大神は

咎め給はず吾を生かしたつ。

カールチン神の司よ聞き召せ

悔い改めは人の寶ぞ

カールチン「かしこ畏しや龍雲司りゅうんつかさの御言葉みことばは

救すくひの神かみの聲こゑと響ひびきぬ。

今いまよりは生うまれ赤あか子こになり變かはり

神かみと王きみとに誠まこと捧たもげむ」

テームス「イルナ城じやううちと内外つつを包むみし村雲むらくもも

晴はれて嬉うれしき今日けふの空そらかな」

リーダー「遙々はるばるとテルマン國こくを立たち出いでて

今日けふは嬉うれしき夢ゆめを見みしかも」

レーブレ 吾われとても元もとよりめでたきものならず

君きみに叛そむきし曲津神まがつかみなる。

さりながら尊たふとき神かみの御光みひかりに

照てらされ今は眞人まびととなれるもも

カル 大黒主神おほくろぬしかみの軍いくさに従したがひて

道踏みちふみ外はづし谷間たにまに倒たふれぬ。

此この世よをば照國てるくに別の現あらはれて

救すくひたまひし事ことの嬉うれしささ

清照きよてる 有難ありがたし忝かたじけなしと大前おほまへに

朝あさな夕ゆふなに太祝詞ふとのりとの宣のれ。

セーランの君の命はイルナ城の

譽も高き元の刹帝利。

いろいろと曲を企みし右守をば

見直しまして救はせ給へ。

清照姫神の命の悪戯を

怒らせ給ふな右守の司よ

セーリス姫は王の歸城と聞きて慌しくかけ來り、

珍らしやセーラン王と姉の君

百の司の歸城を祝はむ。

ヤスタラの姉かへりますと聞きしより

高照山の空を仰ぎつ

第一六章 失戀會議 (一一四一)

右守の館の奥の一間には、サマリー姫とサモア姫の二人が、此頃右守司の行動の何となく遽として落着きのないのに心を痛めつつ、密々と前後策を攻究しつつあつた。

「サモア殿、其方は此頃の父上の御様子に就て、何か不思議に思ふ事はないか、私何んだか心配になつて仕方がないのよ。母上がハルナ國へ御出陣になつてからは、家を外にして出歩き通し、家事一切は其方除けの有様、それに合點の行かぬは俄に髪を揃へたり髻をいぢつたり、男の癖に顔に白粉を塗つたり眉を揃へたり、衣服を毎日着替へたり、まるで若い男のする様な事ばかり爲て居られるぢやありませんか。大方ヤスダラ姫さまに口先でチヨロマカされて、アンナ狂氣じみた事

を爲なさるのぢやなからうかと、案あんじられて仕し様がやうありませぬよ」

「私わたしの察さつする所ところでは、旦那様だんなさまはどうやらヤスダラ姫ひめ様に戀慕遊れんぼあそばされ、現うつをぬかして居ゐらつしやる様に思おもはれます。マンモスの話はなしから考かんがへて見みると、旦那だんなには大たい變へんな惡魔あくまが付つけねらつて居ゐる様やうですわ。コリヤどうしても姫ひめさまから一應御諫言いちおうごかんげんをして戴いたかねば、到底私わたしなぞが御諫おいさめ申まを上げてもダメですわ」

「困こまつた事ことがで來きましたなア。父ちちは到底私わたしどもの言いふ事ことは耳みみに入いれる氣遣きづかひはな
いから、旦那様だんなさまの御信任厚ごしんにんあつきユーフテスから申まを上げる様やうにしたらドンなものだら
うかな」

「それは全然ぜんぜんダメでせうよ。ユーフテスが旦那様だんなさまの精神せいしんを混亂こんらんさせたのですもの」
「あのユーフテスが？ そんな事ことを父ちち上に勸すすめたのかい。何なんとマア惡わるい男をとこだな
ア。これからユーフテスと呼よび出して嚴重げんじゆうに調しらべて見みませう。コレコレ、マンモ
ス、其處そこに居ゐないか、一寸用事ちよつとようじがある。早はやく來きて下ください」
と呼よばはる聲こゑに襖ふすまを押開おしあけて入いり來きたるはマンモスであつた。彼かれは二人ふたりの密談みつだんを不ふだ
道徳うとくにも隣室りんしつに息いきを殺ころして立聞たちぎきして居ゐたのであつた。

「姫さま、御呼びになつたのは私で御座りますか。何なりと、御用を仰せ付け下さりませ」

サマリ「ア、マンモス、偉う早いぢやないか。大方最前からの二人の談話をすつかり聞いて了つたのだらう」

「ハイ御推量に違はず、一切の経緯を残らず承はりました。實に困つた事になりましたねえ。是と云ふも全くユーフテスの爲す行で、決して旦那様の心より出た事ではありませぬ。それだからマンモスが何時も旦那様や奥様始め姫様にも申上げたでせう。ユーフテスは實に右守家の爆裂弾だから、一時も早く放逐遊ばし、彼の代りに此マンモスを御採用下されと。私は決して私利私欲に驅られて人を落し、自分が出世をしようと思ふやうなケチな心ではありませぬ。只々お家の大事を思へばこそ、死を決して御忠告申上げたのです」

「兔も角もお前御苦勞だが、父上の在處を一時も早く探つて連れ歸つてお呉れ。愚圖々々しては居られないから」

「エ、承知致しました。併しながら今日は貴女様の豫ての御許しのサモア姫と改

めて夫婦の結婚をなすべきマンモス一生の大事の日でムりますから、何卒此御用はハルマンに申付けて下さいませ。私一生の祝日ですから、今日一日や二日に旦那様がドウカウといふ譯でありませぬからなア

「コレコレ マンモス、お前とそんな約束は私はした覺はない。神妙に忠義を竭した曉は、都合に依つたらサモア姫の様な美人をお前の女房にしてやらうと言つたまでだよ。斯う言ふと濟まぬが、先達ての様に左守の邸宅へ忍術を以て忍び込み、下手をして捕へられ、男らしくもない、主人に頼まれた秘密まで悉皆敵方に打明けて、生命を惜み逃げ歸つて来る様な卑怯な男には、何程サモア姫だつて愛想を盡かさずには居られないぢやないかえ。モウそんな野望は思ひ切つたが宜からう。第一家筋からして段が違つてるのだから」

「ハイ宜敷うムいます。一寸の蟲にも五分の魂、月夜ばかりぢやありません。暗の夜もありますから、随分御注意なさいませ。サマリー姫様、サモア殿、左様な

と凄いい文句を残してスタスタと足音荒く表を指して出て行つた。

後見送つて兩人は、暫し茫然として居た。

「オホ、何と男の戀に呆けたのは見つともないものだなア。サモア殿、あのスタイルを御覽になつたら、定めし満足でせうなア」

「オホ、心の底から、屬根嫌になつて了ひますわ。エへ、」

話變つて、マンモスは二人の女に手痛き肱鐵の言靈を浴びせられ、無念やる方なく、失戀者同士の應援を求めむため、犬猿も畜ならざりしユーフテスの館へさして、トントントントン駆けて行く。ユーフテスはマンモスの來訪に際し、一度も吾家の敷居を跨げた事がないマンモスが飛んで來たのは、唯事ではあるまいと、いつもなら鹽振りかけて箒を立てる處だが、自分も失戀の結果、何となく心細くなつて居たので、いつもの敵も今日は強い味方が出來たやうな心持で門口に迎へに出で、

「ヤア、マンモス殿、其慌て方は何でムるか。よもやサモア鐵道の脱線顛覆ではありませぬかなア」

「脱線も顛覆も通り越えて、メチャメチャに破壊してしまひましたよ。セーリス

姫さまはどうになりましたか

「どうなつたか、かうなつたか、サツパリ見當が付かないのですよ。彼奴は、ババ化物でした」

「ヘーン、あのセーリス姫が……どう云ふ意味の化物ですか。矢張りサモア姫のやうに貴方を今まで甘くチヨロまかし、最後の五分間になつて伏兵が現はれ、クリップ砲で砲撃と出かけたのですか」

「何、それならまだ氣が利いて居るが、セーリス姫と思つたのは大變な古狐でしたよ。大方狐の奴、本物のセーリス姫をいつの間にかバリバリとやつて了ひ、旨く化けて居やがつたと見えますわい、いやもう女には懲り懲りだ。今思ひ出してもゾツとするやうだ」

「何、そんな事があるものか。今朝もセーリス姫さまが本當に心配して「此頃ユーテスさまのお顔が見えぬ」と云うて居たよ。併し彼奴もサモアの亞流だ。惚れられて居たと思ふと違ふから、まあ斷念するのだなア」

「如何にも斷念（殘念）至極だ。併しながら、右守の神様の【レコ】はどうなつ

たらう、此間から舌を痛めたので外出もせず熏ぼつて居たので、一寸も御様子
分らぬが、キット、「アフォン」の幕が下りたに違ひなからうなア」

「サア其事について、大變サマリー姫とサモアとが御心配の體だ。俺もそれを思
ふと大變氣の毒で堪へられぬ……事は無いわい。いや寧ろ小氣味がよいやうだ」

かく話す處へ門口より、

「ユーフテス ユーフテス」

と呼びながら入り来るは右守の司のカールチンであつた。ユーフテスは、其姿を
見て口を尖らし、

「ヤア旦那様、血相變へて、何事でムいますか」

「ヤア大變だ大變だ。王が二つもあり、ヤスダラ姫が二人も居るのだから、あん
まり恐ろしくて居られた態ぢやない。スツテの事で……無事に命が助かるかと思
つた城内は、どいつもこいつも化物ばかりだ。甘い事、柔しい事吐しやがつて俺
達を安心させ、ソツと召しとらうといふ計劃だから、俺も強者、改心したやうな
顔をして歌をよんで其場を誤魔化し、便所へ行くと云つて便所の穴からソツと逃

げて歸つた所だ。何でも一人は本物で一人は化物だ。もうかう露顯した上はユー
フテス、お前も助かるまい、俺もどうかせなけりやならないと、此處へ相談に來
たのだ。ヤア、マンモス、貴様も此處へ來て居たのか、三人寄れば文珠の智慧だ
から、此處一つ相談をしようぢやないか」

「旦那様、あの奥の間から、セーラン王の聲音を使つて居るのは、三五教の黄金
姫と云ふ奴です。さうしてヤスダラ姫と名乗つて居る奴は、矢張贗者で三五教の
宣傳使、清照姫と云ふ、鬼熊別様の妻子ですよ」

「そんな詳しい事を貴様は誰に聞いたのか」

「何と云うても蛇の道は蛇ですわ。或方法をもつて【すつかり】偵察しましたわ
い」

「そいつは大變だ。愚圖々々して居ては俺達の命がなくなるかも知れないぞ。サ
ア今晚のうちに吾々三人が城内に忍び込み、一人も残らず斬り殺して了はねば、
枕を高うする事は出來まいぞ」

マンモス「こんどは忍術の奥の手を出しますから滅多に失敗は致しませぬ。サア

お二人様、奥へお出なさいませ。私が秘密を教へます」
と奥の離室に進み入る。茲に三人は今夜の十二時を期して、黄金姫以下重なる幹部を殺害せむと、鳩首謀議をこらして居た。ユーフテスの家に仕へて居る下女のチールは三人の隠謀を残らず立聞きし、何食はぬ顔をして、そつと裏口をぬけ出し、右守の娘サマリー姫にその顛末をすつかり密告して了つた。サマリー姫は今後如何なる活動をなすであらうか。

(大正一一・一一・一七 舊九・二九 加藤明子録)

第一七章 酒月(一一四二)

頃しも冬の初め、木枯の樹々を渡る聲は猛獸の吼え猛るが如く烈しき夕間暮、イルナ城の表門を警固してゐたミル、ボルチーの兩人は、門番の常として無聊を慰むる爲め、朝から晩まで碁を打つ、將棋をさす、日没後は最早門の開閉を要し

ないので、強い酒に舌鼓を打ち、下宿の二階で天下を論ずる書生氣分になり、性にも似合はぬ議論に時を移してゐた。

「オイ、ボルチー、今日は久しぶりでセーラン王様が澤山な御家來をつれてお歸り遊ばしたので、俺達も何とはなしに、其處等中が暖かい氣分になつて來たよ。肝腎な主人が不在だと、何處ともなしに冷たい淋しいものだ。一つ今日は祝に、トロツピキ酔ふ事にしようかい」

「何だか俺も酒の加減で、冷たい體が暖かうなつて來たよ。併しながら貴様、聞いてるだらうが、あのカールチンにお位を譲らると云ふ事だが、實際だらうかな。何で又物好きな、王位を捨てて、あんな受のよくないカールチンに位を譲つたりなさるのだらう。餘り世の中が物騒なので、政治にお飽き遊ばして、吾々臣下や國民を捨て、山林に隱遁して光風霽月を友とすると云ふ風流な生活を送られる考へだらうかな」

「何と云つても、時節の力には神様でも叶はぬのだから仕方がないさ。禪讓放伐と云つて、何時迄も世は持ちきりと云ふ事はない。あひさに頭が代るのも亦人氣

が新しくなつて宜いかも知れないよ。カールチンさまも、矢張神界の御都合で刹帝利にお成り遊ばす時節が来たのだらう」

「左守司様を差措いて一段下な右守司様に位を譲られるとは、チツと順序が違ふぢやないか」

「漢朝に帝堯と云ふ天子があつた。在位七十年、年既に老いたれば、何人に天下を譲るべきかと大臣等に御尋ねになつた。大臣は皆諂つて、幸に皇太子様御在しませば、丹朱にこそ御譲りなさいませと申上げた。さうすると帝堯といふ天子の言に、天下は一人の天下ではない、何を以てか吾太子なればとて、徳足らず政の眞義を知らないものに位を譲り、四海の民を苦しむべきやと仰せられ、皇太子たる丹朱に譲り給はず、何處の野に賢人あらむと、隱遁の者までも尋ね給ひ、遂に箕山といふ所に、許由といふ賢人が世を捨て光を韜み、唯苔深く松瘦せたる岩の上に一瓢を掛け、瀝々たる風の音に人閒迷情の夢を覺して居た。帝堯之を聞しめして勅使を立て、御位を譲るべき由を仰せ出されたが、許由は遂に勅に答へず、剩つさへ、松風溪水の清き音を聞きて折角爽かになつた耳が、富貴榮華の賤しき

事を聞かされて、心までが汚れたやうだ、と云つて潁川の水に耳を洗つて居た。同じ山中に身を捨て隠居して居た巢父といふ賢人が牛を曳いて來り、水を吞まさむとして、許由が頻りに耳を洗つて居るのを見て、何故に汝は耳を洗つて居らるるか、と不思議さうに尋ねた。そこで許由は、帝堯吾に天下を譲らむと仰せられたのを聞いて、耳が汚れたやうな心地がしてならないから、耳を洗つて居るのだと答へた。巢父もまた首を振つて、如何にもそれでの水流が常より濁つて見えたのだなア、左様な汚れた耳を洗つた水を牛に飲ますと大事の牛が汚れると云つて、牛を曳き連れて歸つて了つた。そこで帝堯様が、ハテ困つたことだ、この天下を誰に譲つたが宜からうかと、四方八方隈なく尋ね求め給うた結果は、冀州に虞舜といふ賤しい人があつた。その人の父は盲目者なり、母は精神ねぢけて忠信の言を道らず、徳義の經に則らずといふ女なり、その弟は象といふ驕慢悖戾の曲者であつた。獨り虞舜のみは孝行の心深くして、父母を養はむが爲に歴山に行つて耕すに、其他の人々はその徳に感動して畔を譲り、雷澤に下つて漁る時は其浦の人々居を譲り、河濱に陶するに器皆苦塗からず、舜の往きて居る所に二年在れ

ば邑をなし、三年あれば都を成すといふ調子で、萬人が其徳を慕つて來たといふ立派な人である。年二十の時には孝行の譽天下に聞えたので、帝堯様は此男に天下を譲らむと思召して、先づ内外に付いて、其行ひを觀むと欲し、娥皇女、英といふ姫宮を二人まで舜に妻せられた。そして其御子九人を舜の臣下として其左右に愼み随はせられた事が、三十萬年未來の支那國にあつた。カールチン様も矢張神徳に由つて王様から位を譲られ給ふのだから、大したものだ。ア、ゲーウツプーガラガラガラ、又しても酒の奴、天氣が悪いので逆流して來よつた。アーン

□ 妙な處へ話を持つて行くぢやないか。然しながら漢朝の帝堯といふ王様は變つたものだ。一點の私利私欲もなく、子孫の爲めに美田を買ふと云ふ様な利己主義は微塵もなく、聖人賢人に世を譲つて世界萬民を安堵させようと遊ばす其御精神は、人主たるものの模範とすべきものではないか。吾セーラン王様も、さうするとヤツパリ帝堯様の様な名君だと見えるな。然しながら俺の考へでは右守司のカールチンは、それ程聖人賢人ぢやと思ふ事が出來ないわ。只サマリー姫様のお父さまだと云ふ點が、ひつかかりで、刹帝利を譲られるのかも知れぬ。それだつ

たら吾々初め國民は大變な迷惑をせなくてはなるまいぞ」
「そんな事が吾々門番に分つて堪らうかい。善惡正邪は神でなければ分るものぢやないよ。卑しき臣下の分際として、そんな事を非難してみた所で屁の突張りにもなりやせぬわ。それよりも機嫌よく磐若湯を召し上つたら如何だい」
「其許由と云ふ奴、賢人か知らぬが、俺から見ると餘程いゝ馬鹿だなア。普天の下、率土の濱、皆王臣王土に非ざるなしと云ふぢやないか。その王様の御守護遊ばす山林にもせよ、國土に住みながら王の勅命を拜受せず、一簞の食、一瓢の飲、光風霽月を樂しむと云ふ、利己主義の仙人氣取りになつて、國家を忘却すると云ふ馬鹿者が何處にあるか。今の奴はさう云ふ拗者を指して聖人賢人と持てはやつてゐる奴が多いからサツパリ呆れて了ふわ。巢父も巢父で、擔うたら棒の折れる様な馬鹿者だ。餘程貧乏相と見えるわい。耳を洗うた川水を牛に吞ますと牛が汚れるなんて、何處まで馬鹿だか見當がつかぬぢやないか。そこになると虞舜は偉いわい。王様の姫君を二人まで女房に貰ひ、到頭天下をゾロリと頂戴したのだから、俺等から考へて見ると餘程理想的の人物だ。末代迄も堯舜の世と云つて、か

けかまへのない後世の人間にまで持離される様になつたのも、ヤツパリ虞舜が圓轉滑脱、自由自在の身魂の働きをやつたからだ。許由、巢父なんて、舜に比ぶればお話にならぬぢやないか」

「そらさうだ。俺でも許由だつたら、耳を洗ふ處か二つ返事で、猫が鯉節に飛びついた様にニヤンのカンのなしにチユウチユウと吸ひつくのだけどな。然しカールチン様もヤツパリ虞舜流だ。一も二もなく刹帝利を受けるのだからヤツパリ偉いわい。三百餘騎の士を抱へ、うまく大黒主の喉元へ飛び込み鞆丸を握つてゐるのだから、今日の運が向いて來たのだ。左守さまの様に兵は凶器也、誠の道を以て民を治むるに軍人等が要るものかと云つて、王様始め自分迄が軍人らしきものをお抱へ遊ばさぬのだから、已むを得ず時の勢抗すべからずと云ふ鹽梅で讓位さるる事になつたのだらうよ。これを思へばヤツパリ人間は勢力が肝腎だ。交際術に長じ、權門勢家に尾を掉り、頭を傾け、敏捷くまはるのが社會の勝利者だ」

「オイ、ミル、貴様はカールチンさまが刹帝利になられても、ヤツパリ神妙に門

番を勤める考へか。よもや、そんな馬鹿な事はしよまいね。忠臣二君に仕へずと云ふ事があるからな

「そんなことは今發表する限りでないわい。俺は俺としての一の見識を持つてゐるのだから……夜も大分に更けて來た様だ。ドレ、モウ寝まうぢやないか」

と云ふかと思へば、其儘ゴロンと酔ひ倒れ、白河夜船を漕いで忽ち華胥の國へ行つて了つた。ボルチーはミルの高軒に寢就かれず、微酔機嫌で潜り門をガラリと開け、ほてつた顔を夜風にさらし酔を覺まさむと、ブラリブラリと門前を迂路つき始めた。折柄雲を排して現はれた月の光は容赦なくボルチーの頭を照らした。

「あゝあ、いゝ気分だ。秋の月も気分が宜いが、冬の夜の空にかかる月は、何處ともなしに淒味があつて之も亦一種の風流だ。月と云ふ餓鬼や、いつ見ても、あまり氣分の悪くないものだ。其代りに日天様に比ぶれば氣の利かぬこたア夥しい。豆明月だとか、曙明月だとか、月見の宴だとか、何だとか云つて、人間さまの翫弄にしられて平氣の平座で空に控へてゐるのだからなア。ゲー、ガラガラガラ、あゝあ苦しい苦しい、あまり月の叱言を云つたので、嘔吐を【つき】さうだ。サ

ツパリ嘔吐【つき】、間誤【つき】、きよる【つき】さがして、寝【つき】が悪くて、こんな處まで【つき】出されて來たのだな。日天様と云ふお方は神威赫々として犯すべからず、【ど】日中に月さまの様に酒肴を拵へて、日輪見をしようと言つてお顔を拜まうものなら、忽ち目は晦くなり、頭はガンガンする、神罰は觀面に當る。大自在天様は日輪様だ。三五教は月天様だと云つてゐるが、大自在天と彌勒さまとは、これだけ神力が違ふのだから、ヤツパリ俺達の奉ずるバラモン教は天下一品の教だ」

と管を巻き一人囀つてゐる。

そこへ慌しく十數人の部下を引率れやつて來たのは、失戀組の大將カールチンを初め、ユーフテス、マンモスの面々であつた。ボルチーは先頭に立つたマンモスにドンと突當り、ヒヨロヒヨロヒヨロと五歩六歩後しざりしながら、路傍の枯草の上にドスンと腰を下した。草の上には霜の劍が月に照らされて閃めいてゐる。

「あいたゝゝ、誰ぢやい、人に衝突しやがつて、御免なさいと吐さぬかい、アー

ン。禮儀を知らぬも程があるわい。一體きょ貴様はいょ一體何處の馬骨だ。俺を何様と心得てゐる。勿體なくもイルナ城の門番のボルチーさまだぞ」

マンモス「ヤア、よい處で會うた。貴様、これから俺等の先頭をして表門を開くのだ。サア立てい」

「俺はチツとばかり酩酊してゐるから、暫く此處で月を眺め酔を醒ますから、先へ行つてくれ。潜り門を開いておいたから……ヤア何と澤山の黒頭巾だなア」

マンモス「近き未來の刹帝利カールチン様のお通りだ」

と肩肱怒らし、一行と共に城内さして進み入る。

(大正一一・一一・二四 舊一〇・六 北村隆光録)

第一八章 酩苑(一一四三)

表門の潜りの開いて居たのを幸ひ、カールチン、ユーフテス、マンモスの失戀

黨は十數人の部下と共に玄關の戸を蹴破り、大刀をズラリと引き抜き、セーラン王の居間に闖入し、ヤスダラ姫を除くの外、王を初め黄金姫、清照姫、セーリス姫其他の近侍共を手當り次第に斬り捨てむと、王の居間近く進み寄り、カールチンは大音聲にて、

「吾こそは、右守の司、カールチンでムる。日頃の目的を達せむ爲、夜陰に乘じ、右守の司、御首頂戴せむ爲立向ふたり。最早叶はぬ所、尋常に割腹あるか、但は

カールチンが手を下さうか、返答承はらむ……黄金姫、清照姫の魔神を使うてイルナ城を攪亂し、人を迷はす悪神の張本、最早叶はぬ百年目、覺悟せよ」

と唝鳴りつけた。此聲に驚いて黄金姫、清照姫、セーリス姫其他の近侍は、槍、薙刀を各自に引提げ、

「何猪口才な反逆人共、この神譴を食へ」

と云ふより早く突いてかかる。カールチン、ユーフテスは「何猪口才な」と獅子奮迅の勢凄じく、松明を打ち振り打ち振り斬つてかかる。一上一下、上段下段と火花を散らす其凄じさ。漸くにして王を始め黄金姫、清照姫、ヤスダラ姫、セー

リス姫其他は一人も残らず打たれて仕舞つた。カールチン一派の持てる刃は、或は折れ或は鋸の齒の如くになつて居た。カールチンは死骸を部下に命じ一々門外に持ち運ばしめ、イルナ河の激流目蒐けてザンブとばかり水葬をなし、先づ凱旋の酒宴を張らむと再び奥殿に進み入り、酒汲み交はし、自慢話、成功話に時を移し、ゲラゲラと笑ふ其高聲は門外にまで響き渡つて來た。

正座にはカールチン、王者然として脇息に凭れ、酒倉より祕藏の美酒を取り出さしめ、十五六人の一隊は、胡坐をかいて無禮講の雑談に耽る。

「右守さま、いやいや刹帝利様、随分神變不思議の御活動を遊ばしましたなア。

先づこれで一安心でございます。どうぞ今日はお目出度い日だから、十分お過し下さいませ。このユーフテスも、何だか氣分がいそいそ致します」

「何と云つても智謀絶倫の某、作戦計劃に些しの違算もないのだから、今日の成功は前以て分つて居たのだ。ハ、ハ、ハ、ハ、此カールチンに向つて、夜叉の如く突かけ來るヤスダラ姫、こいつばかりは助けたいと何程焦つたか知れなかつたが、扱うて居れば遂には己の命が危なくなつたものだから、手練の槍先、ヤツとかけ

た一聲に、ヤスダラ姫の首は宙に舞ひ上つた時の嬉しさ惜しさ、こればかりは千載の恨事だよ、エーン」

「どうせこんな大望を遂行せむとすれば、多少の犠牲は拂はなくてはなりませんまい。併しながら此ユーフテスだつて、セーリス姫を「バラ」した時の残念さ、愉快さ、何と云つてよいか、思へば思へば愛戀の涙が零れますわい、アーン」

マンモスは早くも舌を縛らせながら、

「エへ、、、、誠に掌中の玉を無残に碎いた御兩人様、お察し申します。サモア姫はお蔭様で此處へ出て來なんだものだから、命が助かつて居ります。それを思へば、このマンモス位幸福な者はありませんなア」

「ウフ、、、、何を云ふのだ。肱鐵を喰はされたサモア姫に、まだヤツパリ執着心をもつて居るのか、困つた代物だなア。貴様のやうに不幸なものはない。カールチン様もいや刹帝利様も、このユー様も戀の敵、肱鐵をかました女をバラしたのだから、もはや執着心はとつて仕舞つたのだから、こんな幸福はない。貴様はまだサモアが此世に残つて居るのだから、嘸氣の揉める事だらう。エへ、、、、

云うと濟まぬが、サモア姫は、キット俺に「ホ」の字と「レ」の字だ。そんな事はチャンと此間面會した時に黙契してあるのだ。このユーさまに向つて放つた視線は、誠に至誠が籠つて居たよ。俺の目が眩しい程電波を送つたのだ。もうかうなつちや、マンモス、貴様も好い加減に見切つたら……いや斷念したらよからうぞ」

かかる所へ、サマリー姫、サモア姫、ハルマンの三人慌しく入り來り、此體を見て、

サマリー「お父様、セーラン王様は定めて御健全にゐらせられませうなア」

「ウン、まアまア何處かの國で御健全であらうよ」

「よもや、貴方は不軌を謀つたのぢやありませんまいな。萬々一左様な事をなされ

たとすれば、妾はセーラン王の妃、王の仇を討たねばなりません。時あつて親子

主從斬り合ひ争ふは武士の道、其覺悟は十分ムりませうなア」

「如何に夫の爲だとて、親に刃向ふ奴が何處にあるか。不孝者奴、下り居らう」

と、勝ち誇りたる心より叱りつけるやうに云ひ放つた。

此時茫然として煙とも霧とも分らぬモヤモヤの中から、白装束でパツと現はれたのは王の幽霊であつた。王は幽かな聲で、

「カールチンに夜襲せられ、命を取られたワイ……汝サマリー姫、夫を大事と思へば、カールチンの命を取つて呉れよ」

「ヤア、さては其方カールチン、王様を殺したのだな。もう此上は了簡致さぬ。このサマリー姫が刃の錆、覺悟めされ」

と其所に落ちてあつた薙刀を取るより早く、水車の如く振り廻し荒れ狂ふ。カールチンも死物狂ひ、大刀をスラリと引き抜き、サマリー姫に向つて斬りつくれば、無残やサマリー姫は肩先を七八寸ばかり斬り下げられ、夕チ夕チと七八歩後しざりして打ち倒れ、無念の齒嚙をなし、其場に息絶えて了つた。

「アハ、ハ、ハ、女童が大事の場所へ出しやばつて、此方の大望の邪魔をなし、天罰忽ち到つてこの惨い態、吾子ながらも愛想がつきたわい。アハ、ハ、ハ」

と豪傑笑ひに紛らして居れど、何となく悲しみの籠つた聲であつた。サモア姫は又もや薙刀を小脇に掻い込み、

「姫様の敵、思ひ知れよ」

と云ひも終へず、カールチンに斬つてかかる、カールチンはヒラリと體をかはし、前後左右に飛びまはり、

「まづまづ待つた」

と聲を限りに制しつつ逃げ廻る。サモア姫は耳にもかけず、カールチン目蒐けて斬りつくる。遠のカールチンも逃げ場を失ひ、井戸の中に「ざんぶ」とばかり落ち込んで了つた。ユーフテス、マンモスは、

「狼藉者、容赦はならぬ」

と左右よりサモア姫に向つて斬つて掛る。サモア姫のキツ先の冴えに二人は肝を潰し、大地に太刀を投げ捨て、両手を合せて救ひを求むる腑甲斐なさ。ハルマンは井戸の底に落ち入りたるカールチンを漸くにして救ひ上げ、サモア姫に向つて言葉激しく、

「暫く待てエー」

と一喝した。此時カールチンに斬り殺されたサマリー姫は、いつの間にか元の姿

となり、また 又もやなぎなた 薙刀をみつぐるま 水車の如くごと 振り廻し、カールチン目め 蒐が けて斬り付ける。カールチンも、

「もう此上は破れかぶれだ」

と云ひながら、再び薙刀を振り翳し、カチンカチンと刀を合せ、火花を散らして戦ふ。十二三人の従者は瞬く間にサマリ姫、サモア姫の薙刀に斬り倒されて仕舞つた。かかる所へ何所ともなく宣傳歌の聲が聞えて来た。

「神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは宣り直す

誠の神の御教

バラモン教の神館

イルナの城の刹帝利

夜陰に乗じて襲撃し

打ち亡ぼして其後を

掠奪せむと企みたる

心汚きカールチン

其運命も月の國　イルナの城の庭先で
 血で血を洗ふ親と子の　無殘至極の活劇は
 何れも心の迷ひより　突發したるものぞかし
 欲に心の眩みたる　右守の司よ、よつく聞け
 天地は神の造らしし　貴の聖所と聞くからは
 假令深山の奥までも　神の在さぬ處なし
 戀と欲とに踏み迷ひ　直日の魂を曇らして
 自ら地獄に落ちて往く　其慘状を救はむと
 高照山を後にして　漸く此處に北光の
 吾は目一つ神司　右守の司のカールチン
 戀に迷へるユーフテス　マンモス諸共よつく聞け
 朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
 假令大地は沈むとも　誠一つは世を救ふ
 誠一つの麻柱の　道に外れて世の中に

どうして人は立つものか 一日も早く片時も

悔い改めよ三人共 至仁至愛の大神は

汝三人の悪心を 洗ひ清めて天國へ

救はむ爲に朝夕に 心を配らせたまひつつ

汝が身邊を守ります 其御心を知らずして

私欲や戀に踏み迷ひ 根底の國の門口を

朝な夕なに開かむと 焦せるは愚の至りなり

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

此三人の曲靈を 洗ひ清めて天地の

神より受けし大本の 嚴の御靈となさしめよ

あゝ惟神々々 御靈幸はへましまして

此聲にカールチン、ユーフテス、マンモスはフト氣がつき見れば、サマリー姫もサモア姫も影も形もなく、又ハルマンの姿もない。月冴え渡る城内の庭先の土

の上うへに、何いづれもドツカと坐ざして居ゐた事ことが分わかつた。かく幻げん覺かくを見みせられたのは、全まったく神かみの御ご經けい綸りんであつて、旭あさひ、月つき日ひ、高たか倉くら明みやう神じんの活くわ動どうの結けつ果くわであつた。併しかし酒さけを飲のんだことだけは、矢やはり事じ實じつであつて、何いづれも目めはチラつき、足あし腰こしも立たたないばかりに泥でい醉すゐして居ゐた。さうかうする中うち、東とう天てん紅ねを呈ていし、夜よはガラリと明あけ放はなれ、煌くわう々くわう

たる冬ふゆの太たい陽やうは斜ななめに下げ界かいを照てらしたまうた。門もん番ばんのミル、ボルチーは目めを醒さまし、庭には先さきの土つちの上うへに右う守もりの司かみ以い下かの泥でい醉すゐして居ゐるに打うち驚おどろき、奥おく殿でんさして驅かけ入いつた。

(大正一一・一一・二四 舊一〇・六 加藤明子録)

第十九章 野襲やしふ〔一一一四四〕

入いる那な城やうの奥おくの一ひと間まには、黄わう金こん姫ひめ、清きよ照てる姫ひめ、ヤスダラ姫ひめ、セーリス姫ひめの四よ人にんは火ひ鉢ちを中なかに圍かこみながら、神しん話わに耽ふけり、話はなしは轉てんじてカールチンの身みの上うへに移うつつた。

黄金「右守司も種々雑多として刹帝利の位にならうと思ひ、工夫に工夫を廻らし
てみたが、とうとう清さまの美貌に迷ひ、欲と戀との二道を歩まむとして、一も
取らず二も取らず、しまひの果には諦めたと見え……兵士をハルナの國へ遣は
して、翼奪られし【やもめ】鳥あはれ……なぞと王様の前で泣言をいつて歸つ
て了つたが、併しあれは本氣で改心をしたのではありますまい。キツと今晚あた
り、失戀組を語らうて【むし】返しに来るかも知れませぬから、皆さま、決して
油斷はなりませぬぞや」

セーリス「左様な御心配は要りますまい。……かくならば最早右守の神司、君
の御前に命捧げむ……と云つたのですから、ヨモヤそんな事は出来すまい。
三百騎の味方は既にハルナの國へ派遣し、武力は既に既に根底から削がれてゐる
のだから、何程向ふ見ずの右守だつて、そんな馬鹿なことは致しますまいよ。……
……いざさらば命をめせよセーラン王、欲と戀とに迷ひし吾を……と云つて、
命まで差出したのですからな」

清照「さう樂觀は出来すまいよ。戀の意地といふものは恐ろしいものですから

なア。私がヤスダラ姫様になりすまして、力一杯翻弄したのだから、男の面を下げて、どうしてあのまま泣き寝入りが出来ますものか。お母アさまの仰有る通り、キツと今晚あたり、失戀組が暗殺隊を組織してやつて来るに違ひありません……
：思はざる人に思はれ戀はれしと、思ひしことを悲しくぞ思ふ……と云つて、未練らしく愚癡をこぼしてゐましたもの、キツと此儘で泣き寝入りは致しますまい

セーリス「それでも右守司は……今よりは生れ赤子になり變り、神と君とに誠捧げむ……と王様の前で言明したではありませんせぬか。あの時こそ私は右守司の心の底から出た言葉と感じました」

ヤスダラ「如何してマア此入那の城は暗闘が絶えないのでせう。昔から左守、右守は犬猫同様ぢやと聞いてゐました。仲の悪い者同志の標語は犬と猿とではなくて、入那城の左守、右守と云ふ用語迄出来てゐるではありませんせぬか。何とかしてかういふことのないやうに守つて貰ひたいものでありますなア」

黄金「ヤア是も誠の道の開ける徑路かも知れませぬ。イヤ之が却て神様の尊き御

守護しゅごですよ。王者わうじやさうしん五人ごにんあれば其位そのくらゐを失うしなはず、諸侯しよこうさうしん三人さんにんあれば其國そのくにを失うしなはず、大夫たいふさうしん二人ににんあれば其家そのいへを失うしなはずとかいひまして、如何どうしても争あらそひといふものは根絶こんぜつするものではありません。又また争あらそひの根絶こんぜつした時ときは國家こくかの亡ほろぶる時ときですから、動中どうちゆうせい靜あり、靜中せいちゆうどう動ありといふ惟神かむながらの御經綸ごけいりんでせう。右守司うもりつかさの陰謀いんぼうがあつた爲ため、セーラン王わうさま様も御威勢ごゐせいが天下てんかに輝かがやくのでせう。いつもかも平穩へいおん無事ぶじであれば、王様わうさまを始め人心じんしん弛緩ちくわんして國家こくかはますます衰頹すゐたいし、政治せいぢを怠をこたり、遂つひには國家こくか自滅じめつの悲運ひつんに陥おちいるものです。これを思おもへば右守司うもりつかさだつてヤツパリ入那いるなの國くにの柱石ちゆうせき、心の企たくみは憎にくむべきであるが、彼かれが謀反むほんを企たくんだ爲ために王わうの位置ゐちはますます鞏固きやうことなり、入那城いるなじやうの弛ゆるんで居をつた籬たがは緊張きんちやうし、國家こくか百年ひやくねんの基礎きそを造つくつたやうなものですから、右守司うもりつかさにして改心かいしんした以上いじやうは、何處どこまでも許ゆるしてやらねばなりません。なア、ヤスダラ姫ひめ様、貴女あなたは如何いかに思召おぼしめしますか」

「何事なにごとも善惡ぜんあく正邪せいじやは神様かみさまが御審判おさばき遊あそばすのですから、吾々われわれとしては右守司うもりつかさの罪つみを糾弾きうだんすることは出來できますまい。又また自分じぶんに省かへりみて見みれば、罪つみに汚けがれた吾々われわれ同志どうしが、如何いかにして人ひとを審判さばく事ことが出來できませうぞ。只ただ惟神かむながらに御任おまかせするより仕方しかたはありま

せぬ』

「さうですなア。右守司だつて吾々と同じ神様の分靈、もとより悪人ではありませぬ。悪神に憑依されて、良心の許さぬ野心を遂行しようとしたのですから、其悪神を憐れみ肉體を憐れんで、善道に立歸るやうにせなくては、吾々宣傳使の職務が勤まりますまい。同じ神様の氏子だから、只の一人でもツツポにおとしては神界へ濟みませぬ。右守司は春秋の筆法を以て論ずれば、右守司王位を守る入那城に忠勤を勵むと見直し聞直すことも出来ませう。言はば入那城に對する救ひの神ですワ。あの鷹といふ鳥は、生餌ばかり食つて生きてる猛鳥だが、冬になると爪先が冷えて、吾身が持てないので、温め鳥といつて、小鳥を捕獲し、兩足の爪でソツと握り、吾爪を温め、ソツと放してやるといふことだ。そして其小鳥の逃げて行つた方向をよく認めておいて、三日が間は其方面の小鳥を捕へないといふぢやありませんか。鳥でさへもそれ丈の勘辨があるのだから、いはば王様は鷹で、右守司は温め鳥のやうなものだ。キツと賢明な王様は右守司の罪をお赦し遊ばすでせう。どうで今宵は夜襲に来るでせうが、大江山の眷族旭、月日、高倉明神様

が
お守りまもある以上いじやうは、キツと目的もくてきを得達えだつせず、改心かいしんを致いたすでせう㊥

かく話はなす所ところへ、セーラン王わうは龍雲りううん其他そのたの忠實ちうじつなる臣下しんかを従したがへ現あらはれ來りきた、黄金わうごん姫ひめに向むかひ、

「いろいろ雑多ざつたの御心配おこころくばりに依よつて、入那城いるなじやうも稍安泰ややあんたいの曙光しよくくわうを認みとめました。全くまったく黄金わうごん姫ひめ様さま母子おやこの御守護ごしゆごの賜物たまものでございます。返かへす返がへすも有難ありがたく存ぞんじます㊥」
と感謝かんしゃの意いを述のべ立たてる。黄金わうごん姫ひめは歌うたを以もつて之これに答こたふ。

「月つきも日ひも入那いるなの城しろに現あらはれて

三五さんごの月つきの教をしへ照あてらせり。

三五あななひの神かみの教をしへを畏かしこみて

これおほぢの大道まもを守りませ君きみ。

世よの中に善よしも悪あしきも分わかちなく

守まもらせ給たまふ神かみの御稜威みいづは㊥

セーランい今まとなり神かみの教をしへの尊たふとさを

悟さとりし吾われぞ愚おろかなりけり。

愚おろかなる心こころに智ち慧ゑの御光みひかりを

照てらさせ給たまひし三五あななひの神かみ

ヤスダラおほぎみ大君おんための御くに爲おんため國おんための御おんため爲おんためと

思おもひ惱なやみて神かみを忘わすれつ。

神かみなくて如何いかでか國くにの治をさまらむ

われはこれより神かみに一ひと筋すぢ。

神かみと君きみ仰あふぎまつりて國民くにたみに

誠まことを教をしへ諭さとし行ゆかなむ

龍雲りゅううん 三五あななひの大道おほぢを進むすす身みなりせば

醜しこの曲津まがつもさやるべきかは。

村肝むらぎもの心こころねぢけし龍雲りゅううんも

神かみに照てらされ眞人まびととなりぬ。

神かみを知しり教をしへを知るしは人ひとの身みの

先まづ第一だいいちの務つとめなるらむ』

清照きよてる 皇神すめかみの御稜威みいづは空そらに清照姫きよてるひめの

神かみの司つかさも心こころ輝かがやく。

今いまははや入那いるなの城しろを包つつみたる

雲霧くもぎり拂はらひし心地こころこそすれ』

黄金わうごん 『今いましばし醜しこの雲霧くもぎり包つつむとも

神かみの伊吹いぶきに拂はらひよけなむ。

セーランの王きみの命みことよきこしめせ

今宵こよひは右守うもりのすさびあるべき』

セーラン 『よしやよし右守司うもりつかさの荒すさぶとも

神かみの守まもりの繁しげき吾身わがみぞ。

惟かむながら神かみの教をしへに任まかしてゆ

心こころにかかる村雲むらくももなし。

悲かなしみも亦また戦をのきも消きえ失うせぬ

神かみの光ひかりに照てらされし吾あは』

セーリスセーリス 大君おほぎみよ心こころゆるさせ給たまふまじ
ひまゆく駒こまの繁しげき世よなれば』

レーブレーブ われは今いま神かみの司つかさに従したがひて
高天原たかあまはらに住すむ心地こころちなり。

さりながら高天原たかあまはらも苦くるしみの
交まじらふ世よぞと心こころ許ゆるさず』

カルカル かけまくも畏かしこき神かみの御光みひかりを
仰あふぎ敬つやまふ身みこそ安やすけれ。

黄金わうごん姫ひめ貴うづの命みことに従したがひて
入那いるなの城しろに來きたりし嬉うれしさ』

テームステ照りわたる尊たふとき神かみの御教みをしへに

常世とこよの國くにの暗やみを照てらさむ。

常世とこよゆく天あまの岩戸いはとに隠かくれます

皇大神すめおほかみを引ひきだしまつれ。

今は早天はやあまの岩戸いはとの開ひらけ口ぐち

イルナの國くにもやがて榮さかえむ

清照きよてる 大神おほかみと君きみと國くにとの其為そのために

心盡こころづくしの果はてまでゆかむ

セーリスセよからざる事ことと知りつつユーフテスを

あやつり來きたりし心恥こころはじし。

さはいへど神と君との爲ならば

許させ給へ三五の神

清照 『われも亦よからぬ事と知りながら

右守の司をあやなしにけり。

カールチン右守の司よ赦せかし

清照姫のいたづら事を。

右守をばもとより憎しと思はねど

道の爲には是非もなければ

龍雲 『何事も皇大神は許すべし

身欲の爲のわざにあらねば

かく歌ふ時しも、俄に玄關口の騒がしさに、レーブは一同の許しを受け、視察のために表へ駆け出した。レーブは息を凝らして外の様子を窺ひ見るに、右守司を始めユーフテス、マンモス其他十數人は、庭に敷物も敷かずドツカと坐し、携へ持った瓢の酒をグビリグビリと呑みながら、手を拍つて切りに歌つてゐる。かと思へば、大刀を引抜き空を切り、右へ左へかけまはりつつ、バタリと倒れては起上り、一種異様の狂態を演じてゐる。レーブは不審晴れやらず、直に奥殿に引返し、王の前に復命した。

「申上げます、庭先の騒々しさに、命に依つて何事ならむと覗ひみれば、豈はからむや、右守司、門先に十數人の部下と共にドツカと坐し、酒を汲み交し、歌つて居るかと思へば、長刀を引抜き、前後左右に切り捲つて居りました。察する所、白狐さまに騙されて、月照る土の上によい氣になつて酒宴を催してゐるのでせう。右守司は大變ないい聲で詩吟をやつてゐました……月卿雲客或は長汀の月に策をあげ、或は曲浦の波に棹をさし給へば、巴猿一度叫んで舟を明月峽の邊に停め、胡馬忽ち嘶いて道を黄沙磧の裏に失ふ……なんて意氣揚々と劍舞をやつてゐま

したよ。あの詩から考へて見ますれば、おそれおほも王様を放逐し、あとの天下を握つた夢を見てゐるらしうムいます。實に亂癡氣騷ぎといつたら見られたものぢやムいませぬ」

「臆て目が醒めるだらうから、明日の朝まで打ちやつておくがよからう。折角天下を取つた夢を見て喜んでゐるのに、中途に醒してやるのは氣の毒だ。夢になりとも一度天下を取つて見たいといふ者がある世の中だから、一刻も長く目の醒めぬやうに樂ましてやるがよからう。アハ、ハ、ハ、ハ」

黄金「オホ、ハ、ハ、王様も餘程仁慈の心が發達しましたねえ。其御心でなくては、人の頭にはなれませぬぞ。サア皆さま、明日の朝まで、ゆつくりと就寢致しませう。明日は又面白い芝居が見られませうからなア」

「お母アさま、御願ですが、私だけ一寸其場へ出張させて頂く譯には行きませぬか。メツタに心機一轉して、右守司様に秋波を送るやうなことは致しませぬから

……」

「オホ、ハ、ハ、何と云つても劍呑で堪らないから、清さまは母の側を一寸も離れち

やなりませぬ、猫に鯉節だからなア。オホ、

「お母アさまの御心配なさらぬやうに、セーリス姫様、貴女と二人参りませうかねえ。さうすりや、お母アさまだつて心配はなされますまい」

「イエイエ、それでも貴女はカールチンさまに、私はユーフテスさまに擲掬つた覚えがあるのだもの、袖ふり合ふも多生の縁と云つて、萬更の他人ではありませぬからねえ。ヒヨツとして出来心が起つたら、又お母アさまに要らぬ氣を揉ませねばなりませんまい。モウやめませうか」

「だつて貴女、此儘寝るのも、何だか氣が利きませぬワ」

「コレ清さま、腹の悪い。又しても老人に氣を揉まさうと思つて擲掬つてゐるのだなア。モウ何時だと思つてゐなさる。山河草木も眠る丑満の刻ですよ」

「王様の前だから……左様ならば、今晚はドツと讓歩しまして、お母アさまの提案に盲從致しませう。盲從組のお方は起立を願ひます。オホ、」

「セーラン王は微笑を泛べながら獨り寢室に入る。黄金姫其他一同も微笑しながら、それぞれ設けられた寢室に入つて夜を明かす事となつた。」

第五篇 出風陣雅

第二〇章 入那立(一一一四五)

サマリー姫は父カールチンの夜更けて歸り來らざるに心を痛め、サモア姫、ハルマン其他二三の家僕を従へ、イルナ城の表門を潜つて廣庭迄やつて來た。東雲の空漸く紅く、霜柱の立つてゐる庭の芝生や土の上に「ぶつ」倒れて、カールチン始め十數人の家の子はふんのびてゐる。サマリー姫は眉をひそめながら、
「エ、情ない、何として又斯様な處に、父を始めユーフテス、マンモスが倒れて

ゐるのだらう。ハルマン、一つ揺り起してくれないか」

「ハイ承知致しました」

と云ふより早く、捻鉢巻に襷をかけ、まづ第一にカールチンを抱き起した。カール

チンは目をこすりながら、あたりをキヨロキヨロ見廻し、

「ヤア其方はサマリー姫、サモア、一體ここは何處だ。俺が酒に酔つたと思つて、

屋外へ放り出しよつたのだなア。怪しからぬ事を致す、ヨーシ、此方にも考へが

ある」

と立上らうとする。何人の悪戯が知らぬが、庭先の巨大なる捨石に紐を以て腰か

ら括りつけられ、動く事が出来ぬ。

「カールチンさま、しつかりなさいませ。ここは入那城内の大廣庭でムいますよ。

貴方は昨夜よからぬ事を考へて、城内へ闖入し來たのでせう。神罰立所に當つて、

こんな態の悪い乞食のやうに野天で倒れてみたのでせう。コレ、ユーフテス、お

前もシツカリせないか、何といふ黒い顔をしてゐるのだ。顔中墨が一杯ぬつてあ

るぢやないか」

「へー、兔も角、旦那様のお供を致しまして、うまく敵を殲滅し、いよいよ刹帝利になられた御祝にお酒を頂戴致し、餘り酔うた揚句、こんな所まで、副守護神が肉體を伴れて、酔ざましに出張したと見えます。イヤもう、ラツチもないことこでこムこいこました。アツハ、ハ、ハ、」

「ナニ、其方はカールチンと共に、セーラン王様を暗殺しよつたのだなア。モウかうなる上は王様の仇敵、覺悟をしたがよからう」

と懐劍をスラリと抜いて逆手に持ち、ユーフテスに向ひ斬つてかかるを、ハルマハンハはハ後ハよりハ姫ハのハ兩ハ腕ハをハグハツハとハかハかハへ、

「先づ先づお待ちなさいませ。これには何か様子のある事こでこムこいこませう。狼狽あてあ仕あ損あじてあはあなりあませぬ」

マンモス「ヤアここは城の馬場だつた。サツパリ狐にやられたと見えるワイ。モシモシカールチン様、陰謀露顯に及んでは大變です、サア早く逃げませう。オオイオ、ユーフテス、お前も早く逃げたり逃げたり」

「コリヤコリヤ、兩人、何も騒ぐ事はない。先づ俺の綱をほどいて、俺が逃げた

あとで逃げるのだ。主人を捨てて、貴様ばかり自由行動をとるといふ事があるか、エーン

サマリー「オホ、、、、、何とマア、とぼけ人足ばかり集つたものだなア」

サモア「見れば旦那様にユーフテスにマンモスの三人、失戀黨の領袖連ばかりが、お揃ひで……何と面白い夢を見られたものですなア」

カールチンは目に角を立て、

「コリヤ コリヤ サモア、失戀黨とは何だ。マ一度言つて見よ。了簡致さぬぞ」
「誠に御無禮なことを申しましたなア。餘り可笑しいものですから、ツイ脱線しました。オホ、、、、、」

かかる所へ龍雲、レーブ、カル、チームスの四人、館の玄關をパツと開き現はれ來り、

龍雲「ヤア、カールチン殿、サマリー姫様、先づ奥へお越し下さいませ。王様がお待ち兼でムいます」

サマリー姫は嬉しげに、

「ハイ、お前さまは龍雲さまとやら、此カールチンの悪人をよく戒めて歸して下さい。妾は一時も早く王様に御面會を願ひませう。コレ、ハルマン、案内をしておくれ」

と云ひながら、サマリー姫は王の居間をさして、ハルマンと共に進み行く。

カールチン「到頭酒に食ひ酔うて、知らず知らずに登城の途中、斯様な所で「くたば」つたと見える。何者か悪戯をしようつて、某が腰に紐を括りつけよつたと見える。兔も角も龍雲殿、拙者の紐をほどいて下され。手も一緒に括られてゐるやうだ」

「アハ、ハ、ハ、念の入つた泥酔だなア」

と云ひながら、手早く縛めをほどいた。これはレーブが昨夜ソツと悪戯をしておいたのである。ユーフテスの顔の黒くなつたのも、矢張りレーブの副守の悪戯であつた。

カールチン「ヤア有難い、サア、是から館へ歸らう。オイ、ユーフテス、マンモス、後につづけ」

テームス「待つた待つた、さうはなりませぬぞ。今王様が右守司に面會したいと仰有つて奥に待つてゐられます。一つ御禮を申上げたい事があると言はれますから、サア遠慮なしに奥へお通りなされませ。ユーフテスさまも手水を使つて一緒に拜謁をなさいませ。マンモスも同様だ」

ユーフテス「イヤ、滅相もない、王様に御禮を云はれるやうな悪い事は致して居りませぬワイ。此場はこれで御見逃しを願ひます」

「さう心配を致すな、案じるより生むが易い。マア行く所まで行つて見な、善か悪か吉か凶か分つたものぢやない。一つ悪い氣がした所で、たつた一つの首をとられると思やいゝぢやないか。首の一つ位何ぢやい。アーン」

ユーフテスは首のあたりを手で探りながら、

「ヤア、ヤツパリ俺の首は依然として密着してゐるワイ、どうぞ今日は大目に見逃してくれ。命の親だから」

「何と云つても勅命だ。綸言汗の如し。一度出づれば之を引込める譯には行かぬ。

サア行かう」

と素首そくくびをグツと引搦ひつつかんだ。ユーフテスは彌之助やのすけにんぎやう人形のやうに、ビツクリ腰こしをぬかし、手ても足あしもブラブラになつた儘まま、チームスに引張ひっぱられて、奥殿おくでんへ運はこばれた。龍りう雲うんはカールチンを引抱ひつかがへ、これ亦奥またおくへ進すすみ入いる。レーブ、カルはマンモスを二人ふたりして引擔ひつかつぎながら、これ亦奥殿またおくでんへ運はこび入いれた。

失戀しつれんたう黨たうの三人さんにんは王わうの前に引出ひきだされ、色青いろあをざめ、唇くちびるを紫色むらさきいろに染そめてガチガチと齒はを鳴ならしてゐる。

□ 右守司殿うもりつかさどの、随分ずぶん昨夜さくやは御愉快ごゆくわいでムつたらうなア

□ ハイ、夢ゆめの中で夢ゆめを見みまして、イヤもう何なんとも申上まをげやうがムいませぬ

と譯わけの分わからぬ事ことを恐おそる恐おそる答こたへた。

□ アハ、天下てんかをとると云ふ事ことは、随分ずぶん愉快ゆくわいなものだらうなア。どうだ、是これか

ら其方そのほうは刹帝利せつていりの後あとをついでくれる氣きはないか

□ メ、滅相めつさうもない、何事なにごとも王様わうさまの御意ぎよいに任まかします。王様わうさまのお言葉ことばとあらば、一言ひとこと

も背そむきは致いたしませぬ

□ 餘よが言葉ことばならば一言ひとことも背そむかぬと申まをしたなア。それに間違まちがひはないか

「ハイ、武士の言葉に二言はムいませぬ」

「然らば汝右守司、叛逆未遂の罪に依つて割腹仰せ付ける」

カールチンは此言葉に肝を潰しひつくり返り「アツ」と叫んだ。

「割腹仰せ付けるといふは表向き、其方は今日限りテーナ姫が凱旋あるまで、閉

門仰せ付ける。有難く思へ」

カールチンはヤツと胸を撫で下し、

「ハイ、割腹に比ぶれば、閉門位は何ともムいませぬ。私一人でムいますか」

「イヤ、ユーフテス、マンモスも同様だ。一人々々別個に閉門する時は、妙な心

を出し、悲觀に陥つては却て爲にならぬから、其方等三人は右守の館に同居閉門

を命ずる。勝手に酒でも飲んで失戀會議でも開いたがよからうぞ」

ユーフテス「ハイ、何と粹の利いた王様、誠に以て重々の御厚恩、御禮の申上げ

やうもムいませぬ」

「汝等三人、男ばかりにては炊事其外萬端に支障を來すであらう。これよりヤス

ダラ姫、セーリス姫、サモア姫をお給仕として百日間共々に汝の側に侍らすから、

有難く思へ^{ありがたおも}」

カールチンは不思議さうな顔をして、王の面體を打眺め、呆然としてゐる。

「アハ、今日より、この入那城は三五教の教理を遵奉し、喜ばして改心をさせる方針だから、汝等も満足であらう。イヤ清照姫殿、セーリス姫殿、サモア姫殿、御苦勞ながら百日間閉門を致す、三人の失戀黨を満足させてやつて貰ひたい」
清照「王様、お戲談を仰有るも程があります。苟くも王者として、戲談を仰有るといふ事はありますまい」

「決して戲談は申さぬ。清照姫殿は王の危難を救ひ、入那城の安泰を計つて下さつた殊勳者である。さりながら三五教の道に在りながら、權謀術數を以て敵を籠絡するは大道に違反するもの、是非々々カールチン、ユーフテス、マンモスの假令百日なりとも、閉門中の世話をなし、彼等三人を心の底より満足して改心致すやうになさるのが、そなたの罪亡ぼしだ。黄金姫殿、左様ではムらぬか」
「オホ、それ見なさい、清さま、餘り智慧が走ると、こんな天罰を受けねばなりませんぞや。これだから誠正直で行かねばならぬといふのだ、自分の美貌を看

板ばんに男をとこをチヨロまかし、王わうの危難きなんを救すくふのはよいが、其その權謀術數けんぼつじゆつすうが宣傳使せんでんしとして
の行おこなひに反はんしてゐるのだから仕方しかたがありません。サア清きよさま、セーリス姫ひめさま、
サモアさまも、男をとこをチヨロまかした神罰しんばつが酬むくうて來たきのだから、百日ひゃくにちの閉門へいもんの間あひだ、
三人さんにんの方に蟲むしの得心とくしんする所ところまで親切しんせつを盡つくすのだよ。オツホ、エライことにな
つたものだ。王様わうさまのお言葉ことばには、一言ひとことも反そむかうと思おもうても、背そむく餘地よちがありがた
ぬワイ」

清照きよてる「ハイ有難ありがたうムいます。三人さんにん閉門へいもんの處ところへ又また三人さんにんの女をんなが附添つきそふとは、何なんとマア
都合つがふの好よい事ことでせう。お母かアさま、百日ひゃくにちも一いつ緒しよに居をりますと、どんな氣きになるか
も知しれませぬから豫あらかじめ御承知ごしやうちを願ねがつておきますよ。なア、セーリス姫ひめさま、貴女あなた
だつて、フトした機はづみから、本當ほんたうにユーフテスさまがゾツコンお好すきになられる
かも知しれませぬわねえ。サモアさまだつて其その通とほりでせう。オホ、」
「エ、仕方しかたがない、男女だんぢよの道みちは何程なにほど親おやが目めを光ひからして居をつても、防ふせぐことは出で來き
ない、まして百日ひゃくにちも離はなれて居をれば、如何いかんともすることが出で來きないから、清きよさまの
自由意思じいういしに任まかしませう」

「右守司殿、サア三人の女と共に男女六人、早くここをお立ちなされ」

「閉門は確にお受け致しました。併しながら、今の王様のお言葉にて満足致しました以上は、清照姫様のお附添ひは御無用でムいます。私が悪いのでムいますから、清照姫様が私をいろと操り遊ばしたのも、決して恨みとも無理とも思ひませぬ。かへつて清照姫様に來て貰つては迷惑を致します。又百日の閉門中に心の悪神を放り出し、誠の精神に立復りたく存じますれば、異性が側に居りましては、満足に修行も出來ませぬから、何卒こればかりは御取消を願ひます。ユーフテス、マンモスも私と同意見だと思ひますから、何卒宜しくお取上げを願ひます」

「然らば汝の望みに任す」

「ハイ有難うムいます。心の曇つた吾々、悪逆無道をお咎めもなく、閉門位でお許し下さるとは御禮の申し様もムいませぬ。今後は何處までも誠を盡し、王様の御恩に報ずる考へでムいますれば、何卒々々御見捨てなく、百日後は下僕の端になりとお使ひ下さらば有難う存じます」

サマリー姫は聲も涼しく三十一文字を歌ふ。

大君おほぎみの恵めぐみの露つゆにうるほひて

野のべの醜草しこくさも甦よみがへりける。

重々ぢゆうぢゆうの罪汚つみけがれをもカールチン

宣直のりなほします君きみぞかしこき。

カールチン父ちちの命みことよ今いまよりは

二心ふたごころなく君きみに仕つかへませ

カールチンありがた有難わづしセーラン王わうの勅言みことり

千代ちよも八千代やちよも忘わすれざらまし。

罪深つみふかき吾われを見直みなほし聞直ききなほし

宣のり直なほします三あななひ五かみの神。

戀雲こひぐもも今いまや全まっく晴はれにけり

三五さんごの月つきの光ひかり見みしより

ユーフテス『いろいろと戀の魔の手にあやつられ

よからぬ事を企みてし哉。

村肝の心に住める鬼大蛇

今は全く消え失せにけり』

セーリス『ユーフテス神の司よ聞き召せ

戀と欲との二道は立たず。

欲に迷ひ戀に迷ひているいろと

あやつられたる人ぞいぢらしき。

われも亦よからぬことと知りながら

君迷はせし心は恥し』

サモアサモア「マンモスを舌したの先さきにていろいと
弄もてあそびたる吾われぞうたてき」

マンモス「恥はづかしや戀こひの囚とりことなり果はてて

思おもはず恥はぢをさらしける哉かな。

大君おほぎみの惠めぐみの露つゆの深ふかくして

重おもき罪つみとが科ゆる赦ゆるされにけり」

龍雲りゅううん「月つきも日ひも入いる那なの城しろの暗雲やみくもも

晴はれて日ひの出での御代みよとなりけり」

黄金わうごん 〇三五あななひの神かみの光ひかりの現あらはれて

入那いるなの城しろに旭あさひかがやく

セーラン 〇有ありがた難かみき神かみの御み稜いづ威づに守まもられて

入那いるなの城しろに月つきは輝かがやく

ヤスダラ 〇はるばるとテルマンこく國にを逃にげ出だして

尊たふとき君きみに會あひにけるかな。

さりながら神かみの光ひかりに照てらされて

吾わがこひぐも戀こひ雲ぐもは消きえ失うせにけり。

サマリー 姫ひめ貴うづつの命みことよ今いまよりは

セーラン王わうに仕つかへまませ。

ヤスダラ姫ひめ貴うづの命みことは黄金わうごん姫ひめの
教をしへに従したがひ神かみの道みち行ゆかむ
□

テームス□四方よも八方やもを深ふかく包つつみし雲霧くもきりも
はれて嬉うれしき今日けふの空そら哉かな
□

カル□足曳あしびきの山野やまのも清きよく晴はれにけり
入いる那なの城しろの神かみの伊吹いぶきに
□

レーブ□何事なにこともなく治をさまる君きみが代よは
さながら神代かみよの心地こころせらるる。

われも亦黄金姫に従ひて

ハルナの空に向ふ嬉しさ

茲にいよいよヤスダラ姫は神の教に照らされて、セーラン王を戀ひ慕ふ心を轉じ、天下萬民の爲に誠の道を四方に宣傳せむことを誓ひ、黄金姫の一行と共にハルナの都に進むこととなつた。セーラン王は今まで忌み嫌うてゐたサマリー姫を深く愛し、夫婦相並びて入那の城に三五の教を布き、國家百年の基礎を固むることとなつた。そしてカールチンは改心の結果、右守司と元の如く任ぜられ、テーナ姫の凱旋を待つて夫婦睦じく王に仕へた。セーリス姫は王の媒酌によつてユーフテスの妻となり、又サモア姫も王の媒酌に依つてマンモスの妻となり、入那城に仕へて子孫繁榮した。黄金姫は清照姫、ヤスダラ姫及びハルマンと共にハルナ城に向つて進むこととなり、レーブ、カル、チームス、龍雲は別に一隊を組織し、三五の教の宣傳歌を歌つて各地を巡教しつつ、ハルナの都を指して進む行くこととなつた。リーダーは王の忠實なる臣下となつて側近く仕ふる事となつた。あゝ惟

がらたまちはへませ
神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 松村眞澄録)

第二章 應酬歌(一一四六)

神が表に現はれて

善神邪神を立別ける

抑神が人間を

此世に下し給ひしは

天國淨土の繁榮を

開かむための思召し

選り清めたる魂と魂

高天原に現はれて

夫婦の道を開きつつ

現界人と同様に

靈的活動を開始して

情と情との結び合ひ

天人男女は相共に

美斗能麻具倍比なしながら

清き正しき靈子を

地上の世界に生み落し

人間界に活動する

夫婦の體に蒔きつける

天より降せし靈子は

父と母との御水火にて

忽ち母體に浸入し

動靜解凝引弛分合の

八つの力や剛柔流

三つの體をもととして

十月の間の母の身に

潜みて身體完成し

靈子の宮を機關とし

此世に現はれ來るなり

人の子として生れたる

神の御子なる人々は

地上に於ける教育を

完全無缺に受けながら

靈肉ともに發達し

其成人の曉は

此世を捨てて天國の

御園に歸るものぞかし

抑人間の肉體は

天津御國に住ひたる

天人どもの靈の子が

發育遂ぐる苗代ぞ

種蒔き苗立ち天國の

田畑に移植する時は

人は愈現界を 離れて天に復活し

天國淨土の神業に 參加しまつる時ぞかし

あゝ惟神々々 神の御國は目のあたり

此地の上に建設し 天國淨土の移寫として

短き此世を樂しみつ 元津御靈を健かに

磨きつ育てつ雲霧を 押分け歸る神の國

あゝ有難し有難し イルナの都の刹帝利

セーラン王も今までは 天津御國の消息を

知らざるために種々と 地上に於ける欲望に

心を驅られ居たりしが 三五教の御教を

聞きてやうやう人生の 尊き使命を悟りつつ

短き此世に欲望を 達成せむと企みたる

惡逆無道の右守をば 直日に見直し聞直し

救ひ與へし健氣さよ 吾は北光彦の神

天の目一つ神司

高照山を立ち出でて

汝が命の身邊を

守り救はむその爲に

暗に紛れて来て見れば

實にも目出度き今日の空

月日の光も爽かに

入那の城は永久に

花咲き匂ふ世となりぬ

黄金姫や清照姫の

貴の命やヤスダラ姫

龍雲司を始めとし

テームス、レーブ、カル、リーダー

其他百の司等の

清き心の花を見て

喜び勇む胸の裡

三五教の御教が

普く地上に亘りなば

敵もなければ味方なし

善悪邪正おしなべて

尊き神の御恵に

潤ひまつり天國の

姿を地上に現はすは

今目のあたり見る如し

實にも尊き國の祖

國治立大御神

瑞の御靈の大御神

天教山に在れませる

このはなさくやひめ
木花咲耶姫の神
大地をかねて守ります

金勝要大御神
御稜威輝く日の出別

日の出神の神徳に
忽ち開く常暗の

天の岩戸は永久に
塞がであれや惟神

神の御前に北光の
天の目一つ神司

至仁至愛の神の心もて
天地萬有一切に

代りて願ひ奉る
あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

と歌ひながら、北光の神は悠然として奥の間より現はれ來る其不思議さ。セーラ
ン王始め一同は突然の目一つ神の降臨に驚嘆やるかたなく、最敬禮を以て之を
し、北光神を正座に招ぎ奉つた。

北光神は莞爾として一同を見廻し、

千早ちはやぶ振ぶる神かみの教をしへの開ひらけ口ぐち

誠まこと一ひとつひとの手力たぢから男神かみ。

手力たぢから男神かみの命みことは何處いづくなる

誠まことをまもる人ひとの心こころに。

高天たかあまの原はらの御國みくには何處いづくなる

誠まことに強つよき人ひとの心こころに。

國治くにの立命たちのみことの御舍みあらかは

汝なが肉體からだの臍下した丹田ついはねに。

入いる那山なやま木この葉はのさやぐ醜風しこかぜも

風なぎて静しづけき今日けふの空そらかな。

高照たかてるの山やまを立出たちいで北光きたてるの

神かみの光ひかりは輝かがやきにけむ

セーラン 靈幸はふ神の光に照らされて

入那の闇は晴れ渡りけり。

戀ひ慕ふヤスダラ姫の肉體を

忘れ果てけり神のまにまに。

ヤスダラ姫神の命よ心せよ

汝をば憎む心にあらぬを。

さりながら誠の道に照らされて

消え失せにけり戀の黒雲。

美はしくいとしく思ふ吾胸は

今も昔も變らざりけり。

道の爲め世人のために荒れ狂ふ

心の駒を引きしぱり行く。

心にもあらぬ美辭を述ぶるより

神のまにまに打明かしおく』

ヤスダラ□有難し□吾大君の御心は

幾世いよくへ経ぬとも忘れわすざらまし。

大君おほぎみよサマリひめ姫と常永遠とことはに

御國みくにを守れ神かみのまにまに。

今いまよりは三五教あななひけうの神司かむつかさ

世人よびとのために鹿島かしまだ立ちせむ。

サマリひめの姫の命みことに物申ものまをす

誠まことを捧たさげ王きみに仕つかへよ□

サマリうづらやす心安おほしめく思召ひめみことしませ姫命

朝あさな夕ゆふなに清きよく仕つかへむ。

君行きみゆかば後あとに残のこりし吾々われわれは

心淋こころみしく日ひを送おくるらむ。

さりながら神の御手に抱かれし

吾身の上を案じ給ふな。

大君に誠心を捧げつつ

吾國民を安く守らむ

黄金 村肝の心の悩み失せにけり

姫と姫との和らぎを見て

清照 天津日は御空に高く清照の

姫の心は輝き渡る。

カールチン右守の司に物申す

吾惡戯を許し給はれ。

何事なにごとも見直みなほしするは神かみの道みち

もとより悪あしき心こころならねば

カールチンありがた有難きよてるし清照ひめ姫の御言葉みことばは

淋さびしき吾われの生命いのちなりけり。

今日けふよりは賤いやしき心こころ取直とりなほし

神かみと君きみとに誠まことを盡つくさむ

セーリスか斯かくすれば斯かくなるものと知しりながら

引ひくに引ひかれぬ場合ばあひなりけり

天地あめつちの皇すめおほ大神かみよ許ゆるしませ

知しりて犯をかせし詐いつはりの罪つみを

北光きたてる 何事もなにごと 皆みな 惟かむ 神々なら

靈幸たまち はへませ 教子をしへこ の上へ に。

善よ すと云い ひ 惡あ ししと云い ふも 人ひと の世よ の

かりの隔へだ てと聞き 直なほ す神かみ。

吾われこそは 天津誠あまつまこと の御教みをしへ を

四方よも の國々くにくに 開ひら く神司みつかさ。

さりながら 月つき に村雲花むらくもはな に風かぜ

雪ゆき に朝日あさひ のあたる世よ の中なか。

何事なにごと も神かみ の御胸みむね にまかすこそ

高天たかま の原はら にのぼる 架橋かけはし 𠮟

セーラン王わう は聲こゑ も涼すず しく歌うた ふ。 其歌そのうた、

𠮟 神かみ が表おもて に現あら はれて イルナの城しろ に蟠わたか まる

醜しこの枉津まがつつを追おひ拂はらひ
言こと向むけ給たまひし尊たふとさよ

吾われはイルナの刹帝利せつていり
バラモン教けうの神司かむつかさ

鬼熊おにくま別の御教みをしへを
朝あさな夕ゆふなに謹つつしみて

仕つかへまつりし甲斐かひありて
妻子さいしと在あれます黄金わうごんの

姫ひめの命みことや清照きよてるの
貴うづの司つかさに助たすけられ

又またもや北光きたてる神司かむつかさ
其外そのほか忠義ちうぎの人々ひとびとに

身みを守まもられて入那城いるなじやう
再ふたび王わうと君臨くんりんし

世よを常久とことはに守まもり行ゆく
嬉うれしき身みとはなりにけり

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
三五あななひ教けうの御教みをしへは

堅磐かきはと常磐ときはに忘わすれまじ
三五あななひ教けうやウラル教けう

バラモン教けうと種々いろいろに
教をしへの名稱めいしやうは變かはれども

天地てんちを造つくり給たまひたる
誠まことの神かみは一柱ひとししら

國治くに立た大神おほかみの
一ひとつに歸きするものぞかし

梵天帝釋自在天

盤古大神鹽長の

彦の命の御守護

愈高く深くして

宇内唯一の三五の

教に導き給ひたる

宏大無邊の神徳を

謹み感謝し奉る

左守の司のクーリンス

右守の司のカールチン

心を清め身を浄め

いざこれよりは入那城

セーラン王の聖職を

輔翼しまつり國民に

塗炭の苦しをば逃れしめ

天國淨土の眞諦を

導き諭し天國を

地上に細さに建設し

人と生れし天職を

上下睦み親しみて

仕へまつらむ吾心

麻柱ひませよ惟神

神に誓ひて諸々の

司の前に宣り傳ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 北村隆光録)

第二二章 別離の歌〔一一四七〕

黄金姫は別れに臨んで宣傳歌を歌ふ。

☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠一つの三五の

教の道は世を救ふ 齋苑の館を出でしより

神の恵に守られて 虎狼や獅子熊の

伊猛り狂ふ荒野原 漸く涉り高照の

珍の岩窟に導かれ 神徳無限の北光の

神の薰陶を受けながら 親子は勇み入那城

四方よもに塞ふさがる黒雲くろくもを
神かみの力ちからに吹ふき拂はらひ

セーラン王わうの危難きなんをば
救すくひ助たすけて今いまは早はや

天地てんち清明せいめい日月じつげつは
天津あまつ御空みそらに輝かがやきて

冬ふゆとは云いへど花香はなほふ
常世とこよの春はるの心地こころしつ

曲津まがつの荒すさみをさまりて
出いで行く吾われこそ樂たのしけれ

セーラン王わうよ聞きし召めせ
如何いかなる事ことのあるとて

天地てんちの神かみの與あたへたる
妃きさきの君きみのサマリ姫ひめ

必かならず見み捨すて給たまふまじ
天あめと地つちとにたとへたる

夫婦めをとの道みちはどこまでも
嚴きびしく守まもり進すすみませ

夫婦めをとは道みちの大本おほもとぞ
ヤスタラ姫ひめの神司かむつかさ

汝なれが命みことの御心みこころに
かけさせ給たまふ事こともなく

科戸しなとの風かぜに執着しふちやくの
雲くも吹ふき拂はらひ天地あめつちの

誠まことを千代ちよに永久とこしへに
立たてさせ給たまへ惟かむながら神かみ

神かみに誓ちかひて願ねぎまつる
吾われはこれより天地あめつちの

神かみの恵めぐみに助たすけられ 魔神まがみの荒すさぶ荒野あらのはら原

夜よを日ひについで進すすみつつ 歡喜くわんきの花はな咲さくハルナ城じやう

大黒主おほくろぬしの肉體からだに 巢すぐふ曲神まがみを言こと向むけて

神かみの司つかさの天職てんしよくを 盡つくしまつらむ惟神かむながら

神かみは吾等われらと俱ともにあり 北光神きたてるがみよセーラン王わうよ

吾往わがゆく先さきを恙つつがなく 守まもらせ給たまへと神床かむどこに

心こころ静しづめて祈いのりませ 天あめと地つちとは清照きよてるの

姫ひめの命みことと諸共もろともに 治をさまる御代みよもヤスダラ姫ひめの

貴うづの命みことの神司かむつかさ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

駒彦司こまひこつかさのハルマンと 茲ここに一行いつかう四人よにんづ連れ

清きよき尊たふとき聖城せいじやうを 名殘なごり惜をしくも後あとに見みて

吾われはこれより出いでて行ゆく あゝ惟神かむながら々々

御靈幸みたまさちはへましませよ

清照姫は又歌ふ。

神が表に現はれて

善神邪神を立て別ける

三五教の宣傳使

清照姫の神司

清き尊き御教に

心の駒を立て直し

鞭ち進む膝栗毛

心も軽き蓑笠の

草鞋脚絆に身を固め

猛虎のたけぶ荒野原

善言美辭の言靈を

打ち出しながら堂々と

進む行くこそ勇ましき

行手に如何なる曲神の

さやりて進路を塞ぐとも

何かは恐れむ敷島の

大和心は清く照る

仁慈の駒に矢を放つ

醜の曲靈はあらざらめ

あゝ勇ましや勇ましや

入那の城の黒雲は

清く涼しく晴れ渡り

天國浄土の有様を

現出したる今日の空

心の残る事もなし
いざこれよりは親と子が

心を合せ力をば
一つに固め月の國

さやる曲津を悉く
瑞の靈に言向けて

進みて往かむ惟神
北光神やセーラン王の

君の命に嬉しくも
謹み別れを告げまつる

あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

ヤスダラ姫は又歌ふ。

入那の國の刹帝利
尊き家系に生れたる

左守司のクーリンス
神の司の貴の子と

生れあひたるヤスダラ姫は
神命降り今茲に

戀しき父や大君の
あれます國を後にして

實にも尊き三五の
黄金姫の神司

清照姫きよてるひめにしたが従したがひて

惡魔あくまのせいと征途せいとにのぼ上のぼりゆく

あゝかむながらかむながら惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはみひまましまして

ヤスダラ姫ひめのたましひ魂たましひに

無限むげん無窮むきうのしんりき神力しんりきを

濊そそがたま給あめつちへ天地あめつちの

皇大神すめおほかみのおんまへ御前おんまへに

謹つつしみいやま敬ねひ願ねぎまつる

朝日あさひはて照てるとも曇くもるとも

月つきはみ盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちはしづ沈しづむとも

誠まことのちから力はよ世すくを救すくふ

誠まこと一ひとつあななひのあななひ三五あななひの

教をしへを守まもりまもいつまでも

イルナくのうらやす國くにを浦安うらやすく

守まもらせたま給おほぎみへ大君おほぎみの

御前みまへにつつし謹つつしみヤスダラ姫ひめが

謹つつしみかしこ畏かしこみ今いま此處ここに

別わかれにのぞ臨のぞみ願ねぎまつる

天國てんごく淨土じやうどの花はなもさ咲さく

ミロクみよのきたてる神かみ世よも北光きたてるの

天あめのまひと目まひと一かむづかさつ神司かむづかさ

高照山たかてるやまにかへ歸かへりなば

汝ながつまがみ妻神つまがみのたけのひめ竹野たけのひめ姫ひめ

御前みまへにたい對たいしヤスダラ姫ひめ

道みちのつかさ司つかさが種々いろ々いろと

惠めぐみをう受けうれしうれしさをを

感謝し居たりと委細に
 傳へたまはれ惟神
 神に誓ひて願ぎまつる
 吾は是より黄金の
 姫の命に従ひて
 荒野ヶ原を打ち渉り
 嵐に髪を梳り
 霰や雪に身をそぼち
 身なりも卑しき蓑笠の
 いと軽々と進み行く
 セーラン王よサマリー姫
 吾往く後は睦じく
 天地の神の神業を
 互に助け助け合ひ
 勤しみたまへヤスダラ姫の
 神の司が旅立の
 別れに臨み願ぎまつる
 あゝ惟神々々
 御靈幸はひましませよ

ハルマンは又歌ふ。

三五教の宣傳使
 吾は駒彦神司

言依別の御言もて
イルナの國に身を襲し

忍び入りしは三年前
上下に時めく右守司

カールチン館に身を寄せて
卑しき下僕となり下り

バラモン教に迷ひたる
曲人達を悉く

誠の道に言向けて
神の御前に復り言

申さむものと朝夕に
神に祈りし甲斐ありて

いよいよ吹き來る時津風
吾職責も今は早

漸く盡しあらためて
三五教の神柱

黄金姫と諸共に
曲津の猛ぶ月の國

ハルナの都に蟠まる
八岐大蛇の征服に

進み往くこそ勇ましき
コーカス山の聖場を

立ち出で茲に早三年
仇に月日を送りしを

心に嘆き居たりしに
一陽來復三五の

誠の花は咲き出でて
心も勇む春駒の

名もハルマンと改めて
正々堂々進み往く

あゝ面白し面白し
北光神よ大君よ

吾往く後は天地の
神の教を朝夕に

照らし給ひて永久に
蒼生を平けく

いと安らげく守りませ
吾は尊き大神の

御靈を背に負ひながら
第二の故郷と住みなれし

イルナの都を後にして
茲に別れを告げまつる

あゝ惟神々々
御靈幸はひまませよ。

いざさらば心の駒彦勇み立ち

ハルナの都へ立ちて向はむ。

大君よ心安けくまませよ

汝が魂に神まませば。

北光きたてるの神かみの命みことに物もの申まをす
吾わが往ゆく先さきを守まもらせ給たまへ
□

北光きたてる 汝なれこそは三五教あななひけうの神司かむつかさ

駒彦こまひこなりしかいと珍めづらし。

天地あめつちの神かみの經綸しぐみはどこまでも

ゆき渡わたりけれ尊たふとしの世よや。

ハルマンの神かみの司つかさを駒彦こまひこと

悟さとり得えざりし吾われの愚おろかさ
□

清照きよてる 清照きよてるの姫ひめの司つかさも駒彦こまひこも

みな化物ばけものの類たぐひなりしか。

吾われこそは小化物こばけものなり駒彦こまひこは
大化物おほばけものよ恐ろしく思ふおもふ

駒彦こまひこ「清照きよてるの姫ひめの命みことに言問こととはむ

汝なれが心こころは化物ばけものならずや。

吾われよりも汝なが命みことこそ恐ろしき

右守うもりの司かみをもてあそびまし。

吾われこそは右守うもりの司つかさに使つかはれて

下僕しもべの恥はぢを忍しのび居ゐたりし。

顧かへりみれば吾われこそ汝なれに比くらべては

實げにも小ちひさき化物ばけものぞかし

黄金わうごん 『世よの終をり大化物おほばけものが現あらはれて

智者ちしやと學者がくしやを嚙かみ殺ころすなり。

現界うつしよに時ときめく人ひとの大方おほかたは

大化物おほばけものの器うつはなりけり。

世よの中なかの大化物おほばけものを盡ことごとく

言向ことむけ和やはす三五あななひの道みち』

ヤスダラ 『面白おもしろし大化物おほばけもののさやる世よに

現あらはれ出いでし神かみの化物ばけもの。

化ばかされて魂たまを洗あらひしカールチン

吾われも騙だまされたくぞ思おもひぬ』

カールチン 清照きよてるの姫ひめの命みことに操あやつられ

揉もみ潰つぶされて眞人まびととなりぬ。

世よの中なかは善ぜん悪あく不ふ二じ正せい邪じや一いち如によ

その理ことわりを今いまや悟さとりぬ。

善ぜんと云いひ悪あくと稱となふも人ひとの世よの

中なかを隔へだつる玉垣たまがきと知しる

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 加藤明子録)

第二三章 龍山別たつやまわけ (一一四八)

龍雲りゅうんは言葉ことばしづかに歌うたふ。

神かみが出現しゅつげんましまして 善ぜん惡あく邪じゃ正せいを立別たてわける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

直日なほひの御靈みたまを經たてとなし 瑞みづの御靈みたまを緯ぬきとして

織おりなされたる綾錦あやにしき 御旗みはたに輝かがやく十曜とえうの紋もん

善ぜんをば助たすけ曲津見まがつみを 誠まことの道みちにまつるはず

清きよき正ただしき神かみの道みち われは龍雲神司りゅうんかむつかさ

ウラルの道みちを遵奉じゆんぽうし セーロン島たうに打渡うちわたり

彼方あなた此方こなたとさまよひし 時ときしもあれや神地城かうぢじやう

ケーリス姫ひめのお見出みだしに あづかりここに登龍とうりうの

門戸もんこは漸やうやく開ひらけ來きて 鰻登うなぎのぼりに登のぼりつめ

心傲こころたかぶり末遂すゑつひに 惡逆無道あくぎやくぶだうの限かぎりをば

盡つくしをへたる醜司しこうかき 北光神きたてるがみのお諭さとしに

前非ぜんびを悔くいて眞心まこころに 復活ふくくわつしたる嬉うれしさよ

心こころにかかりし醜雲しこうもも サラりと晴はれて日月じつげつの

胸むねに輝かがやく身みとなりぬ
これぞ全まく三さん五ごの

尊たふとき神かみの御おん恵めぐみ
御おれい禮れいは言こと葉ばに盡つくされず

惡あく逆ぎやく無ぶ道だうの龍りう雲うんも
仁じん慈じ無む限げんの大神おほかみの

尊たふとき心こころに見みな直ほされ
聞き直なされて村むら肝きもの

心こころに期きせぬ修しう驗げん者じゃ
北きた光てる神がみの御み教をしへに

七しち千せん餘よ國こくの月つきの國くに
檢あらため巡めぐる嬉うれしさよ

沐もく雨う櫛しつ風ふうも何なんのその
昔むかしの罪つみに比くらぶれば

萬まん分ぶん一いちの恩おん報ほうじ
げにも尊たふとき限かぎりなり

神かみの恵めぐみの幸さちはひて
心こころも清きよく照てり渡わたる

清きよ照よ姫ひめや黄わう金こんの
姫ひめ命のみことに伴ともはれ

入いる那なの都みやこに現あらはれて
セーラン王わうの御おん爲ために

心こころを盡つくし身みを盡つくし
仕つかへ奉まつりし嬉うれしさよ

かくなり果はてし上うへからは
入いる那なの都みやこに龍りう雲うんは

心こころを殘のこす術すべもなし
あゝ勇いさましや勇いさましや

晴はれて嬉うれしき宣せんでん傳し使し
 四し方はうにさまやがるつ曲ま津が靈つひを
 一ひとつも残のこさことずむ言こと向むけて
 未すゑ頼たのもかしかきど首か途どかな
 北きた光たてる神がよがセがーがラらンら王わうよ
 左さ守もり司つかさのククーーリリンンス
 茲ここに別わかれを告つげままつつる
 いいよよ吾われが預あづかりりて
 尊たふとき清きよき大おほ神かみの柱はしらと造つくり育そだて上あげ
 ウうブぶスすナな山やまのイいソそ館やかた
 いいと勇いさまましく復かへり言こと
 神かみの御み前まへに願ねぎままつつる。
 龍たつ山やま別わけと改あらためめて
 風かぜに草くさ葉はのななびびく如ごと
 勝かち鬨どきああぐぐる神かみの國くに
 いいざざいいざざささららばいいざざささららば
 サさマまリりーー姫ひめよカかーールるチちン
 其その他ほか百ももの司つかさたち
 テてィィムムスス、レレィィブブ、カかルる司つかさ
 月つきの御み國くにを巡じゆん歴れきし
 日ひ出のでの別わけの御おん前まへに
 申まをしままつつららむむ惟かむ神ながら

千早ちはやぶ振ぶる神かみと君きみとの言ことの葉はを

普あまねく照てらす身みこそ嬉うれしき。

曲まが神かみにかき亂みだされし吾わが魂たまも

科しな戸どの風かぜに吹ふ拂きははれにけり。

いざさらば龍たつ山やま別わけと改あらためて

世よ人の爲ために道みちを傳つたへむ。

レレーブ、カル、テムス司つかさと諸もろ共ともに

荒あ野らのを進すすむ身みこそ嬉うれしき。

惟かむ神な尊がき神たの御み守まもりに

安やすく進すすまむ荒あ野らのヶ原がはら。

黄わう金こん姫ひめ神かみの命みことの神かむ柱しら

進すすませ給たまふハルナぞ戀こひしき。

これよりは月つきの國くに々くに經へ巡めぐりて

やがて進すすまむハルナ都みやこへ。

君きみゆかば鬼熊おにくま別の御柱みはしらに

龍山たつやま別わけをよきに傳つたへよ。

龍雲りゅううんの魔神まがみの道みちにありと聞きかば

鬼熊おにくま別わけも舌したをまかさむ。

さりながら悪あしきをすてて眞心まごころの

花はな咲さき出いでしわれは眞人まびとぞ

黄金わうごん 『龍山たつやま別わけ神かみの司つかさの言ことの葉はを

わが背せの君きみによきに傳つたへむ。

大黒主神おほくろぬしの司つかさの耳みみに入いらば

忽たちまち心こころひるがへしなむ。

龍雲りゅううんの神かみの司つかさを龍山たつやま別わけと

名な乗のりるも誰たれか誠まこととやせむ

龍雲りゅうん 龍卷たつまきの雲くも晴はれ行ゆきし其その後あとに

輝かがやき渡わたる月つきかげもあり

日ひも月つきも皆みな龍卷たつまきにつつまれて

曇くもりし空そらも晴はらす松風まつかぜ。

松まつが枝えを吹渡ふきわたりゆく科戸邊しなとべの

風かぜこそ神かみの御水み火いなりけりら

清照きよてる 面おも白しろし龍山たつやま別わけのいでたちを

見送みおくるわれはほほゑまれぬる。

照てりわたる頭あたまに鉢卷はちまきしめながら

出いでます姿すがた面おも白しろきかなら

龍雲りゅうん 『はげあたま 禿頭ピカピカ 光ひかる鉢巻はちまきは

曲まがに舌したをば巻まかせむ爲ためぞや。

まかすとは弱よわきをくじく故ゆゑならず

誠まことの道みちにまかすのみなり。

魔ま訶か不思議しぎ惡あく神がみたち忽まち善ぜんとなり

今いまは尊たふとき神かみの司つかさよ』

ヤスダラ 『いさ 勇いさましき龍山別たつやまわけの其姿そのすがた

坊主鉢巻ばうずはちまきよくも似合にあへる』

龍山別たつやまわけ 『やかた いざさらばこれの館やかたを龍山別たつやまわけの

此この武者振むしやぶりをよくみそなはせ。

野のも山やまも草木くさきも川かはも忽たちまちに

てらしてゆかむ此このはげあたま禿頭あたま。

照てりわたる神かみの大道おほぢを歩あゆむ身みは

神かみぞ宿やどりて頭かうへてるなり。

禿はげあたま頭くま隈なくなく光ひかり清照きよてるの

姫ひめの命みことと現あらはれて行く。

年とし老おいてあが顔色かんばんせは黄金わうごんの

姫ひめの色香いろかにうつろひにけり

黄金わうごん 馬鹿ばか々々ばかし吾肉體わがからだは老おいぬれど

心こころは若わかき春はるの野草のぐさよ。

神國かみくにに進すすみ行く身みは老おいと若わかきの

隔へだてなければいつも勇いさみぬ。

吾身こそ六十路の坂を越えぬれど
心は二八の優姿かも

龍山別「これはしたりわが言靈のすべりすぎて

思はぬ方におち行きにける。

黄金の姫の命よ赦せかし

君を老いしと言ひし過ち。

諺に雀百まで牡鳥を

忘れぬと云ふ謎を忘れし。

何事も廣き心に神直日

見直し給へ黄金姫司

黄金わうごん 『不老不死神ふらうふしかみの御國みくにに身を置いて

常世とこよの春はるをゑらぎ樂たのしむ。

此世このよをば捨すてて御國みくにへ上のぼるとも

忘れわすざらまし君きみの姿すがたは 『

龍山別たつやまわけ 『龍山別神たつやまわけかみの命みことの禿頭はげあたま

忘れわすむとして忘れわすざらまし。

月つきも日ひもこれの頭かっへにてりわたり

心こころにしみて胸明むねあきけくなりぬ 『

セーラン 『面白おもしろし誠まことの道みちにまつるひし

人ひとの言ことの葉罪科はつみとがもなし 『

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 松村眞澄録)

第二四章 出陣歌(一一四九)

レーブは歌ふ。

ライオン川を打渡り 玉山峠の峻坂を
黄金姫の一行に 従ひ駒を引きながら
テームス峠の關所をば 漸く無事に乗り越えて
大黒主の軍隊に 坂の麓に出會し
千尋の谷間に顛落し カルの司と諸共に
三途の川を打渡り 天國淨土の門口を
探險したる折もあれ 照國別の一行に

呼び覺まされて甦り

葵の沼の傍に

又もや敵に包圍され

危き生命を助かりつ

沼の彼方に來て見れば

黄金姫や清照姫の

貴の命の御休息

いよいよ再生の思ひして

レーブとカルとの兩人は

黄金姫に隨伴し

入那の森に來て見れば

右守の司の放ちたる

テル、テク、アルマに出會し

漸く敵を追ひ散らし

チームス司と諸共に

入那の城へ進み入り

暫く此處にやすらへば

北光神に招かれて

セーラン王は九重の

雲押分けて高照の

深山をさして出で給ふ

暗さは暗し闇の道

チームス、レーブ、カル三人

轡を並べて夏々と

王に従ひ高照山の

岩窟をさして進み行く

あゝ惟神々々

神の恵みの深くして

思ひもよらぬヤスダラの
姫の命に出會し

暫らく此處に日を送り
北光神に促され

駒に跨り堂々と
夜陰に乘じ入那城

歸りて見ればカールチン
畏れ多くも萬乗の

吾大君を退けて
己が欲望を達せむと

計り居るこそ嘆てけれ
天地の神は何時迄も

魔神の荒びを如何にして
やすく見逃し給ふべき

忽ち陰謀露顯して
右守の司に潛みたる

八岐大蛇や醜神は
掻き消す如く逃げ去りぬ

あゝ有難し有難し
神の御稜威は忽ちに

輝き渡る四方の國
天明らけく地豊に

瑞祥の御代となりにけり
セーラン王の神勅もて

龍山別に從ひて
三五教の御教を

四方の國々島々に
隈なく教へ傳へ行く

名さへ目出度き宣傳使

靈魂の限り身の限り

誠を筑紫の果までも

開きて行かむ神の道

北光神よいざさらば

セーラン王よサマリー姫

左守右守の司等よ

吾行く後は天地の

神に誠を捧げつつ

入那の國は云ふも更

テルマン國を初めとし

其他百の國々へ

三五教の御光を

照らせ給へ天地の

神に誓ひて神司

レープは偏に願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

神に任せし吾體

生命の續く其限り

曇りと汚れに充ち果てし

豊葦原の國中を

清めすかして天國の

至喜と至樂の状態を

出現せずにおくべきか

あゝ惟神々々

誠一つの三五の

五六七の神の御前に

謹み敬ひ願ぎ奉る。

千早振る神の恵を蒙りて

世人を救ふ身こそ嬉しき。

悪を捨て誠の道に入那城

後に見捨てて進み行くかな。

北光の神の司よ吾魂を

いや永遠に守り給はれ。

素盞鳴の神の命の守ります

三五教は世を救ふ道。

人は皆天と地との大神の

珍の宮居と聞くぞ嬉しき。

今よりは心の駒を立直し

魔神まがみの荒すさぶ荒野あらの分け行ゆくく。

苦くるしさの中なかにも樂たのしみある世よには

如何いかな枉まが津つの來くるも恐おそれじ」

カルは又また歌うたふ。

入いる那なの城しろを後あとにして　　レレイブ、テテームス兩りやうにん人と

心こころを協あはせ手てをとりて　　惡あく魔まの征せい討たうに上のほり行ゆくく

吾われは尊たふとき神かむつかさ司し　　龍りゅう雲うん司つかさも今け日ふよりは

龍たつ山やま別わけと名なを變かへて　　魔ま神がみの荒すさぶ山やま川かはを

いと易やす々と宣せん傳でん歌か　　歌うたひて進すすみ出いでませよ

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも　　月つきは盈みつとも虧かくるとも

御み空そらの星ほしは落おつるとも　　海うみはあせなむ世よありとも

一旦いつたん神かみに任まかしたる　　吾われ等ら四よ人にんの宣せん傳でん使し

決して變心する勿れ

神を忘れし其時は

身魂に忽ち苦みを

覺ゆる時と知る上は

如何なる艱難に遭ふとても

神を力に三五の

誠を杖にいそいそと

道の眞中を驀進し

魔神の集まる巢窟を

根本的に掃蕩し

吾三五の大道を

世界に照らし大神の

御稜威を四方に擴充し

神と人との中に立ち

善惡正邪を超越し

只何事も大神の

任し給ひし神直日

清き心に宣り直し

見直し行かむ宣傳使

あゝ面白し面白し

神は吾等と俱にあり

吾等は神の子神の宮

如何なる枉の來るとも

いかでか神に敵し得む

あゝ勇ましや勇ましや

入那の城を後にして

足竝揃へて四人連れ

旗鼓堂々と恙なく

勝利しよつりの都みやこに立向たちむかひ
神かみの御前みまへに勝鬨かちどきを

現あらはしまつるは目まのあたり
いざいざさらば、いざさらば

北光きたてる神がみや其他そのほかの
百ももの司つかさの御前おんまへに

茲ここに暇いとまを告つげまつる
あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはへましませよ。

惟神かむながらかみ神の大道おほぢを四方よもの國くに

開ひらき行ゆく身みぞ樂たのしかりけり。

天地あめつちは如何いかに廣ひろしと云いひながら

神かみの守まもらぬ國土くにつちはなし。

天地あめつちの神かみの惠めぐみに抱いだかれて

神かみの御國みくにを開ひらき行ゆくかな。

北光きたてるの神かみの司つかさや大君おほぎみに

今いま別わかれ行ゆく吾われぞ悲かなしき。
さりながら生しやうじやひつめつ者あ必めつ滅あ會あ者あ定ぢやぢやうり離
別わかれて後のちに會あはむとぞ思おもふ
』

(大正一・一・二五 舊一〇・七 北村隆光録)

第二章 惜別歌(一一五〇)

テームスは又また歌うたふ。

ハルナの都みやこにあれませる 大黒主おほくろぬしの神かむつかさ司
右守うもりの司かみと語かたらひて イルナの城しろを占領せんりやうし
セーラン王わうを放逐はうちくし 右守うもりの司かみは刹帝利せつていり

富貴榮華を極めむと 企み居れる由々しさに

左守の司のクーリンス 社稷を憂ひましまして

大梵天王大前に 額き祈りたまふ折

三三教の宣傳使 黄金世界の神柱

秋野彩どる紅葉の 神の御稜威も清照の

姫の命の二柱 イルナの國を横ぎりつ

ハルナの都に出でませば 二人を途中に迎へ入れ

イルナの都の危難をば 取り除けよと御宣示の

いと尊さに左守司 吾を間近く呼びたまひ

四五の従者を引きつれて 神力無雙の神司

迎へまつりて來れよと 仰せられしぞ尊けれ

イルナの城を後にして 秋風渡る野路を越え

イルナの森の手前にて 地底の關所に君待てば

聲も涼しく宣傳歌 歌ひて來る神司

あゝ有難や尊やと
心の中に伏し拜み

喜ぶ間もなく二柱
いづくともなく御姿を

隠したまひし悲しさよ
暫らくありて二柱

イルナの都に出でまして
悪魔になやみたまひたる

セーラン王を救ひ出し
高照山の岩窟に

導きたまひて千萬の
神の教を宣りたまひ

北光神の御恵に
傾きかけしイルナ城

元に復して今此處に
妖雲忽ち拂拭し

至治太平の瑞祥を
認めたるこそ嬉しけれ

セーラン王やクーリンス
神の司の御教に

従ひまつりチームスは
名さへ尊き宣傳使

龍山別に従ひて
魔神の猛る荒野原

言靈戦隊組織して
出行く身とはなりにけり

思へば思へば天地の
神の恵の浅からず

心の雲も晴れ渡り

清き尊き宣傳使

四方に打ち出す言靈の

恵の露は草や木の

堅磐常磐の末までも

助けてゆかむ惟神

尊き神の御前に

吾等一行の成功を

愼み敬ひ願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

神に仕へし宣傳使

如何で心を變ずべき

虎狼や獅子熊の

醜の餌食となるとても

神のたまひし吾身魂

天國淨土に參上り

神靈界の消息を

明め來りて地の上に

又もや嬉しく降臨し

七度八度生きかはり

死にかはりつつ三五の

教を開かて置くべきか

今日は目出度く宣傳使

惡魔征討の首途ぞや

龍山別よレーブ、カル

勇めよ勇めよよく勇め

祈れよ祈れよよく祈れ
下らぬ理屈を取り除き

仁慈の道を一條に
四方の國々委曲に

開きて世人を天國に
救ひて進む宣傳使

實にも尊き限りなり
セーラン王よ北光の

神の司よ、いざさらば
吾はこれより暇乞ひ

七千餘國の月の國
隈なく廻り大神の

尊き道を宣傳し
尚も進んで筑紫國

龍宮島はまだ愚か
高砂島や常世國

自凝島の果てまでも
神の光に照らされて

吾天職を完全に
盡しまつらむ勇ましさ

國治立大御神
豊國主大御神

神素盞鳴大神の
御前に愼み願ぎまつる。

此世をば造り給ひし國治の

立の命の御稜威尊き。

吾は今イルナの都を後にして

誠の道に進むうれしさ。

進み行く大野が原にさやりたる

醜の身魂を照らし行くかも。

龍山の別の命の頭照る

後に従ふ吾ぞ目出度き。

闇の夜も龍山別と諸共に

進み行く身は暗からじとぞ思ふ

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 加藤明子録)

第二十六章 宣直歌〔一五二〕

龍山別 常暗の曇り果てたる世の中は

龍山別の頭尊き。

身も魂も光る印に頭まで

清く照るなり龍山別は

テームス 有難し頭まで照る神司

吾に與へし神ぞ畏き。

レーブ、カル汝も喜べ頭照る

神の御供に仕へし身をば

清照きよてる 『面白おもしろし龍山別たつやまわけの神司かむつかさ』

常世とこよの國くにまで照てらしたまはむ』

黄金わうごん 『照てり渡わたる龍山別たつやまわけの頭あたまこそ

機動演習きどうえんしゅの道場だうぢやうなるらむ。

月つきも日ひも皆みなてり渡わたる頭かしらこそ

天あめと地つちとをわがものにせむ』

龍山別たつやまわけ 『月つきも日ひも星ほしも照てるなる吾頭わがかうへに

なほも宿やどらす天地あめつちの神かみ。

正直しやうぢきの頭かうへに神かみは宿とまるてふ

その神柱かむばしらいとど目め出で度たき』

カル ㊦ 月も日も星さへ宿をカル頭

龍山別は神にまします

龍山別 ㊦ アハ、、あきれ果てたる人々の

その言の葉に吾顔照れるも

サマリー ㊦ お頭りは光りて老人と見えぬれど

赤らむ顔に若きをぞ知る

龍山別 ㊦ 若がへり若がへりして現し世に

生れ来りし龍山別よ。

吾われこそは言こと靈たま別の御み子こなりし

龍山たつやま別の生うれ變かはりぞ。

顯幽けんいうに幾度いくたびとなく出入でいりして

又またも此世このよで恥はぢをかきしよ。

わが靈たまは神代かみよの昔むかしエルサレム

醜原しこはら別に從したがひし曲まが。

國照くにてるの姫ひめの命みことに背そむきたる

龍山たつやま別の靈たまの御末みすゑぞ。

さりながら神かみは許ゆるさせたまひけむ

今日けふ改あらためて司つかさとなりぬ。

ここだくの罪つみや汚けがれも荒磯あらいその

浪なみに捨すてたる吾われぞ嬉うれしき』

テームス「いざさらば君の御前を龍山別の
司「司と共に首途せむかな」

龍山別「レーブ、カル、テームス三人吾と共に
三五「三五の道開きゆくべし」

清照「いざさらば右守の司のカールチン
縁「縁は盡きじ又も會はなむ。」
くれぐれ「くれぐれも許したまはれ吾罪を
恨「恨みたまはず憎みたまはず」

カールチンキョ 清照キョテの姫ヒメの司ツカサをヤスダラ姫ヒメの

司ツカサと思おもひし吾われの愚おろかさ。

心ココロから思おもはれ戀こはれ居をるものと

笑壺笑ッポに入いりし吾われの愚おろかさ。

いざさらば清照キョテ姫ヒメよ大神おほかみの

道みちにまさしく進すすみまませ

セーリスセリス心ココロにもなき戀こひ衣着きかぎ飾りて

化ばけ終おつせたる吾われぞうたてき。

大君おほぎみのみこと畏かしこみユーフテスを

わが背せの君きみと仰あふぎまつらむ。

はしたなき女をんなとおぼし給たまふまじ

まことより出でし嘘うその惡戯いたづら。

嘘そらごといもま今はまこととなりにけり
操あやつりしひと人にいま今はそ添そひつつつ」

ユーフテスなにごと「何事かみも神よの任まさしのままならば

心安いじやすかれせーリスの姫ひめ。

戀こひ衣ころも幾い重くへかさねていま今はははや

脱ぬぎす捨すてが難たきみ身みとはなりぬる」

サモアわれ「吾われとも神かみのお道ほにそ背むきたる

醜しこのしこ醜わ業わざ敢あへてせしかな。

厭いとひてしひと人ひととめ夫をと婦めのち契ぎりをば

結むすぶかもか神かみのこ心ころなるらむ。

今はただ戀こひしくなりぬマンモスの

わが背せの君きみと千代ちよを契ちぎらむ。

マンモスよ許ゆるさせたまへ偽いつはりの

心こころ汚きたき吾わが行おこなひを

マンモス『何事なにごとも晨あしたの露つゆと消きえ果はてし

今日けふは心こころに朝あさ日照ひてるなり。

朝あさ日ひ影かげ漸やうやく西にしにイルナ城じやう

夕ゆふべの契ちぎり頼たのもしきかな。

常とこ暗やみの夜よに睦むつびあふ戀こひの道みちに

しばしば雲くものかからざらめや

サモア 〇 頼もしきわが背の君の言の葉は

花咲く春に逢ふ心地せり。

千代八千代變らず睦び親しみて

世人のために道を開かむ

北光 〇 天地を包む雲霧くまもなく

晴れ渡りたる今日ぞ尊き

セーラン 〇 常夜行く暗は晴れけり三五の

月の光に照らされし身は

黄金わうごん 月つきも日ひも西にしにイルナの城しろの上へに

千代ちよを壽ことほぐ群鳥むらがらすかな

清照きよてる 大神おほかみの光ひかり隈くまなく照てり渡わたり

イルナの城しろは魔まの影かげもなし

龍山たつやま別わけ いざさらば吾わが大君おほぎみに暇いとま乞ごひ

月つきの山路やまぢを照てらしゆくべし

ハルマン 駒彦こまひこが心こころの駒こまにむちうちて

ハルナの都みやこへかけりゆくかも。

春駒はるこまの勇いさみ進すすんで三五あななひの
道傳みちつたへゆく吾われぞ嬉うれしき
『

ヤスダラ『大君おほぎみに悲かなしき袂たもとを分わかちつつ
嬉うれしき道みちの旅たびをなすかな
』

カールチン『いざさらば百ももの司つかさよ恙つつがなく
神かみの大道おほぢに進すすみ行ゆきませ
』

クーリンス『常闇とこやみの夜よは晴はれ渡わたるイルナ城じやう
左守さもりの司つかさも心こころ勇いさめり。
』

ヤスダラの姫の命よ心して

虎伏す野邊を進み行きませ。

惟神の教をよく守り

安く往きませハルナの都へ

ヤスダラ『いざさらば父の命よまめやかに

命ながらへ君に仕へませ』

かく各歌を詠み交し、惜しき別れを告げて、
冬の太陽は煌々として斜に宣傳使の頭上を照らさせ給うた。
あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・二五 舊一〇・七 加藤明子録)

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

靈界物語 第四二卷 舍身活躍 巳の巻

終り